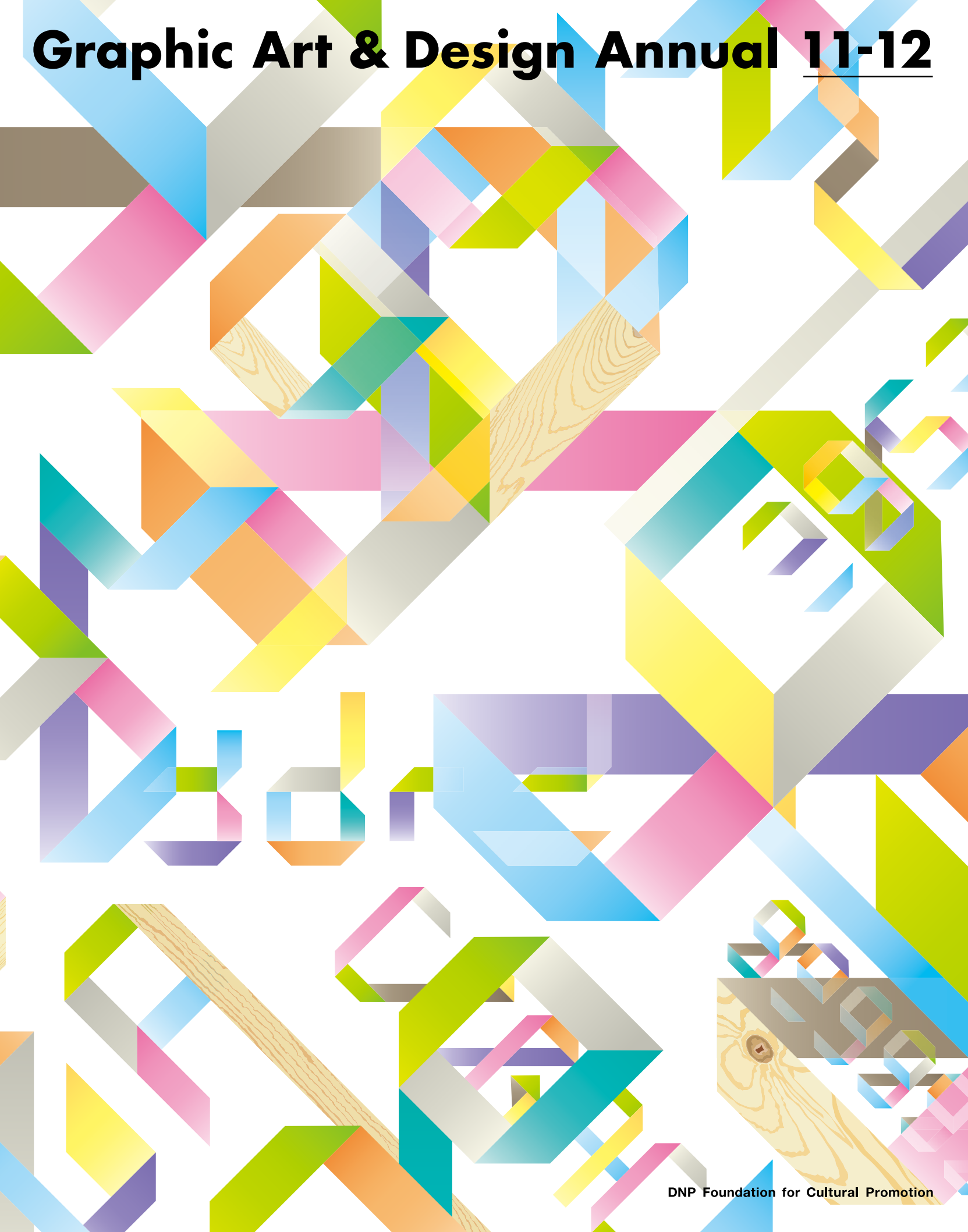
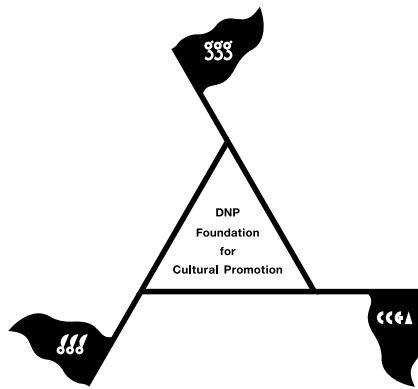


# Graphic Art & Design Annual 11-12



# Graphic Art & Design Annual 11-12



[表紙デザイン]

## GRV2576

様々な表情を見せてくれる日本伝統の遊び「折りガミ」と  
3つのギャラリーの略称である ggg、ddd、CCGA の文字をモチーフに、  
出会うたび表情を変える作品・空間・人・その驚きとワクワク感を表現してみました。  
グルーヴィジョンズ

[Cover Design]

## GRV2576

With a motif blending origami, a traditional Japanese pastime that takes myriad forms of expression,  
and the three galleries' acronyms – ggg, ddd and CCGA –  
we sought to convey the surprise and excitement derived from  
the galleries' continuously changing artists, exhibits and spatial manifestations.  
Groovisions

## Graphic Art & Design Annual 11-12 ggg ddd CCGA

Publication: DNP Foundation for Cultural Promotion

DNP Ginza Building, 7-7-2 Ginza,

Chuo-ku, Tokyo 104-0061

Phone: +81 3 5568 8224

Planning & Editing: ginza graphic gallery

Art Direction: Shin Matsunaga

Design: Shinjiro Matsunaga, Moemi Kiyokawa

Photography: Mitsumasa Fujitsuka (ggg),

Ryota Sakai, Akihito Abe, Koji Takanashi (ggg gallery talk)

Translation: Rei Muroji, Office Miyazaki Inc.

Cooperation: Shoji Usuda, Koichi Kawajiri

Printing & Binding: Dai Nippon Printing Co., Ltd.

# Contents

## 目次

はじめに	5
北島 義俊 (DNP文化振興財団理事長)	

### 序論:

ggg 25周年を迎えて—グラフィックデザインの過去、現在、未来—	6
長友 啓典 (アートディレクター、グラフィックデザイナー)	
DNP—グラフィックデザイン振興の模範—	12
アニタ・キューネル (ベルリン アートライブラリー学芸員)	

1 展示事業	15
ginza グラフィック・ギャラリー (ggg) 2011–2012	16
ddd ギャラリー 2011–2012	40
CCGA 現代グラフィックアートセンター 2011	50

2 教育・普及事業	57
ggg, ddd ギャラリートーク	58
出版活動	71

3 アーカイブ事業	73
DNP グラフィックデザイン・アーカイブ	74

4 国際交流事業	79
ggg 企画展 中国巡回「pushpin・パラダイム」展	80
タイポジャンチ 2011 ソウル	81
福田 繁雄展 & 『福田 繁雄 DESIGN 才遊記』出版記念	81
AGI 日本事務局サポート	82
Tokyo ADC Award 2011 ドイツ・フランクフルト巡回	82
田中一光・永井一正・福田繁雄展—日本ポスター界による不滅の教え—	83

5 研究助成事業	85
2011–2012年度 助成実績	86

展覧会概要	87
展覧会一覧	92
ギャラリー概要	100

Foreword	5
Yoshitoshi Kitajima (Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion)	

### Introduction:

On the Occasion of ggg's 25th Anniversary: The Past, Present and Future of Graphic Design	6
Keisuke Nagatomo (Art Director & Graphic Designer)	
DNP—That Means Exemplary Promotion of Graphic Design—	12
Dr. Anita Kühnel (Curator of Graphic Design Collection at the Kunstbibliothek, Staatliche Museen zu Berlin)	

1 Exhibitions	15
ginza graphic gallery (ggg) 2011–2012	16
ddd gallery 2011–2012	40
Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) 2011	50

2 Education & Enlightenment	57
ggg, ddd Gallery Talk	58
Publications 2011–2012	71

3 Archiving	73
DNP Graphic Design Archives	74

4 International Exchange	79
ggg Traveling Exhibition in China "Push Pin Paradigm"	80
Typojanchi 2011 Seoul: International Typography Biennale	81
"Shigeo Fukuda Exhibition" and Event Commemorating the Publication of <i>Fukuda Shigeo Design Saiyuki</i>	81
Support of Japan Office of AGI	82
"Tokyo Art Directors Club Award 2011" Traveling Exhibition in Frankfurt, Germany	82
"Ikko Tanaka・Kazumasa Nagai・Shigeo Fukuda – Great Poster Masters from Japan"	83

5 Research Support	85
2011–2012 Financial Support Activities	86

Review of ggg, ddd and CCGA 2011–2012	87
List of Exhibitions 1986–2012	92
Galleries' General Information	100





# Foreword

## はじめに

2011年度のギンザ・グラフィック・ギャラリー (ggg) では、田中一光氏の没後10周年を記念した「田中一光ポスター 1980-2002」をはじめ、11回の企画展を開催いたしました。また、dddギャラリーでは6回の企画展を、現代グラフィックアートセンター (CCGA) では、2回の企画展を開催いたしました。

なかでもgggの第303回企画展「100 ggg Books 100 Graphic Designers」は、ggg開設25周年を記念し、ggg Books 100人の作家の代表作を展示し、あらためて25年間を一望するとともに、未来に向けた新しい取り組みとして、ggg Booksを電子書籍化しました。

アーカイブ事業としては、杉浦康平氏、横尾忠則氏、田名網敬一氏の方々から、大変貴重なポスターを多数ご寄贈いただき、DNPグラフィックデザイン・アーカイブはますます充実してまいりました。

また、国際交流事業も活発に行い、「田中一光・永井一正・福田繁雄展」をブルガリアのソフィアで開催したのをはじめ、ソウルでは「TYPO-JANCHI 2011」に田中一光アーカイブのポスターを出品しました。さらに中国・深圳では、gggで開催した「プッシュピン・パラダイム展」を、フランクフルトとベルリンでは、「ADC展」を巡回しました。

引き続き、多方面からのご意見やご協力をいただきながら、活動を推進して参りたいと存じます。今後とも、皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

DNP文化振興財団 理事長  
北島 義俊

During the 2011 fiscal period ginza graphic gallery (ggg) mounted a total of 11 exhibitions, one highlight being an exhibition of the latter-year (1980-2002) posters of Ikko Tanaka held in commemoration of the 10th anniversary of his untimely death. The year also saw six exhibitions held at ddd gallery (ddd) in Osaka and two at the Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) in Fukushima Prefecture.

Meriting special notice this year was the 303rd exhibition at ggg: “100 ggg Books 100 Graphic Designers.” Mounted to commemorate the gallery’s 25th anniversary and to celebrate publication of the 100th volume in the ggg Books series, the exhibition presented an overview of ggg’s quarter century with a show of 100 representative works by the designers featured in ggg Books to date. Also on display at this exhibition was the first volume of ggg Books made available in e-book format, a new initiative taken with an eye on the future.

In archiving operations, the collection of the DNP Graphic Design Archives was greatly enriched in 2011 with donations of numerous highly valued posters by Kohei Sugiura, Tadanori Yokoo and Keiichi Tanaami.

The year also saw a host of activities undertaken to promote international exchanges. These included an exhibition of the works of Ikko Tanaka, Kazumasa Nagai and Shigeo Fukuda in Sofia, Bulgaria, and participation in “Typojanchi 2011” in Seoul with a display of posters from the Ikko Tanaka Archives. Two shows originally held at ggg were taken abroad during the year. These were “The Push Pin Paradigm,” which travelled to Shenzhen, China, and “The 2011 Tokyo ADC Exhibition,” which was mounted in Frankfurt and Berlin, Germany.

As always, we continue to invite your opinions and humbly ask for your sustained cooperation and support as we proceed forward with our diverse activities.

Yoshitoshi Kitajima  
Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion

# ggg 25周年を迎えてーグラフィックデザインの過去、現在、未来

## 長友 啓典

アートディレクター、グラフィックデザイナー

——今日は長友さんが、グラフィックデザインの現状についてどう考えていらっしゃるかを聞いてみたいのですが。

**長友** もう「“グラフィックデザイン”では納まらんやろうな」という気はしています。僕は造形大や工学院で教えているから、若い人と接する機会が多いんですけど、そもそもグラフィックデザイン科というのがいまは少なくなっているみたいだね。デザイン界も書き換えのときじゃないですか？それをいい方向に持っていくには、教育というか先生がやっぱり重要じゃないかと思うんです。

幸い僕自身は先生や仲間恵まれました。この世界に入ったときには、デザインなんて言葉さえなくて図案科ですよ。「図案」が「デザイン」と呼ばれるようになり、やがて「グラフィックデザイン」や「アートディレクター」という言葉も一般的になっていきましたが、まあ分業が進んだだけで、やっていることは同じようなもんですけどね。

でも、いまの若い人たちを見ていたら、「僕らがやってきたこととはまた違う流れやな」という気もするんです。休み時間にストリートダンスみたいなものやってるでしょ？(笑) そんな感覚、僕らのときはなかったですから。

明らかに変わってきてるなあという気がするんです。卒展のプレゼンテーションなんか聞いてると、「はあー」と思う。もうね、パフォーマンスなんです。それも二次元じゃなくて三次元の。その中のひとつの要素としてグラフィックデザインがあるというか。専門学校のコースでも、デザインだけでなく、音楽はあるわITはあるわ医療もあるわで、いろんなものがグチャグチャに入り乱れてる。

それはね、面白いことでもあるんです。とはいえ、デザインはデザインでちゃんと勉強してもらわないといけませんから、その兼ね合いをどうするかが大切です。でも、いまはそういった時代の流れに先生方がついていけないというか、どうしたらいいかわからなくて迷っているのではないですか？ デザインの仕事というのは、やっぱり現場の匂いも含めて教わらないと。教科書やカリキュラムではうまいこと行かんと僕は思いますね。

——長友さんが学生だったときはどうだったんでしょう？

**長友** なんかもうムチャクチャでした(笑)。僕が桑沢デザイン研究所に通ってるときには、いわゆる教育者の人はほとんどいなくてね。田

中一光先生をはじめ、横尾忠則さんや宇野亜喜良さんといった綺羅星のようなスターたちが教えに来られてたんです。みなさん第一線の現場の人たちですよ。で、その人たちの教えることが全然違うの(笑)。

田中一光先生みたいに「何か見つけたら深く追求しなさい」と言う方もいれば、逆に「浅く広く勉強しろ」と言う人がいたり、「私の言うことなんて聞くな」と言いながらしゃべる人がいたり(笑)。だけど、それがすごく面白かったんですよね。

——そもそもどういうきっかけで桑沢に？

**長友** ほんと偶然なんです。僕はデザインのデの字も知りませんでしたから。ある会社で書生みたいなことしていたときに、そこの社長の息子さんアメリカにデザイン留学をしていて、空いてた部屋に住んでいたんです。すると、いままで見たこともないようなデザインや美術の本が一杯あってね。それを見てるうちに「こういう仕事もあんなな」と。社長も「学校に通ったらどうだ？」と言ってくれたので人に色々聞いてみたら、桑沢という専門学校が新しくできてどうやら面白いらしいぞと。あと、桑沢の夜間に女優の李香蘭さんが通っているというのも何かで知ってね、「だったら行こう、会えるかもわからん」とかって(笑)。まあ、そんな時代ですよ。先生たちも手探りだったんじゃないですか？田中一光先生は「君たちは2年制なんだから、4年制の大学に通う学生の倍、勉強をやらないかん」というやり方ですごくかったですよ。いま考えると、そのときやったことがすいぶんタメになりました。教室で教えるだけでなく、歌舞伎に能、オペラなんかにも連れてってくれたりね。先生はなんでも本物を見せようとするんです。

“食いもん”についても実地で教わりました(笑)。あるとき「君、何が好きか？」と聞かれたので「中華が好きです」と答えたんですけど、学生ですから中華料理といってもそれこそ餃子とラーメンくらいしか知らなくて。すると先生は「中華料理といってもいろいろある。そういうのを知ってから好きだと言いなさい」なんて言って、渋谷の恋文横町のお店から、ツバメのスープなんかが出るような高級なお店のコースまで食べさせてくれたりね。

酒を飲みながら、どういうワインがフレンチに合い、イタリアンに合うのか？ ってことまで教えてくれるんですよ。そういうところで学ぶことは、学校で教わることに以上に大切だったりしますよね。

当時でもそういう先生は珍しかったですけど、いまはどこ探しても絶

対いないでしょう？ 何が本物かということを身銭を切って教えてくれるだけでなく、色んなことを年がら年中一緒に議論していて、先生の生き方や考え方がすごくよくわかるんです。

僕ね、あの先生が偉かったなと思うのは、自分が何かを作ったら助手とも言えない学生みたいなものにでも、必ず「どう？」って聞くとこ。反応を知ろうとするんですね。

振り返ってみると、あれは僕が20歳くらいの頃ですから、先生と僕が10歳しか変わらないということは、当時あの人は30歳ですよ。30の若さでそんなことができるかって言えば……我が身を振り返っても、70になるいまでもそんなことできない。まあ、ひとつだけ、若い人に酒をおごるぐらいはね、ずっと守ってきましたけれど(笑)。

——そういう環境だと作るものが違ってくるでしょうね。

長友 そりゃもう全然違うでしょう。教育もありますが、やり方がまず違いますから。僕らの頃は、色ひとつとっても自分で作ってたんです。いまの人は、チップをポツと貼るだけでしょ？ こんなに簡単なことはないけど、こんなにさみしいこともないですよ。

田中一光先生がもう徹底的に言うわけですよ。その頃、テニソンという煙草があって、パッケージの赤い色がものすごく印象的なんですけど、先生はね、そういう印刷物を切りぬいて、自分で色見本帳を作っておられました。新人はそれを整理する役目なんですけど、そうやって色を覚えてくわけ。で、そのテニソンの赤をポツと出して、「長友君、この色を出してみなさい」なんて言う。そしたらポスターカラーで一から作るわけですよ。

もちろん、そんなもん簡単にできないの。うまくいなくてバケツ一杯分くらい作る。そしたらその色がからだにすり込まれますよね。文字だって面相筆で描かないといかんわけですから。1mmくらいの文字なのに、明朝とゴシックを書き分ける。この訓練をやるとどんな不器用な人でも覚えますよ。

僕は持論みたいに言ってるんですが、漢字は書きとりで覚えるじゃないですか。あれと同じで、色や配色もやっぱり勉強なんです。持って生まれた才能だという話もあるけど、とんでもない。だから学生には色の書きとりというか、「描きとり」を教えるべきだと僕は思うんです。もちろん、真っ赤は真っ赤でええんです。ええなんですけど、その色の意味をちゃんと教える先生がいないとダメなんですよ。

——厳しい世界でもあるわけですが、グラフィックデザイナーを続けるために必要なことはなんですか。

長友 それはもう「好きかどうか？」でしかないと思います。あとは体力ですね。田中一光先生が、「1に体力2に体力、3、4がなくて、5に才能」とよく言ってました。僕がなぜ先生に気に入られたのかというと、ラグビーをやっていたから「こいつは体力がありそうだ」と思われてたんじゃないかと思います(笑)。

トレーニングで体力を鍛えるのもすごく大事なことで、松井や松坂、イチローにしたってね、子供の頃から天才と言われてたけれど、毎日毎日キャッチャーが構えたところに、投げて、投げて、投げてでしょ？ そうやって自分を見つけていく。デザイナーも同じで、モニターの「ボタンひとつで赤」なんてはずはないんです。

そうやって訓練をこなしているとね、降りてくるんです。スコーンとなるときがある。ジョギングハイとかウォーキングハイもそうですよね。僕はいまウォーキングを日課にしてるんですけど、最初の10分くらいは「ああ、もう嫌やな」とか思いながらやっても、20分くらいすると、からだが一掃スーっとなってくる。で、いつのまにか勝手に歩いてる。デザインもそういうものなんです。

言わばエクスタシーみたいなものですよ。僕の知り合いでシャンパンを飲み続けていたら降りてくると言った人がいるけど、「それは酔っぱらいや」と(笑)。だけど、そういうのに似ている感じはあります。

だから僕の信条としては質より量。量は質を凌駕します。先生もね、「役者バカというのがあるように、手バカというものがある。それになれ」と、よくおっしゃってました。それと同時に「人前で汗を流すような熱演はするな。苦労のあとを見せてはいけない。重くなってお客もイヤになってくる」ともね。裏で汗をかけるようになったらプロなんです。でも、実際はなかなかやり続けられないんです。やめる理由なんて簡単にできるわけだから。「風邪ひいたからちょっと今日は……」とか、「阪神が負けたから休もか」なんて言うてね(笑)。だけど、それでもやり続けてると、なにか降りてくるのは間違いない。

そう言えば、この前、JAGDAの総会で富山に行ったとき、学生に「スランプのときはどうするんですか」って質問されたんですけど、僕は壁にぶち当たったり、悩んだことがないんですよ。

そもそも僕らの仕事の先輩方は、時間かけたらヘタクソだと思ってましたから。早くパピパッとやらないと。電話で仕事を受けたときに頭

の中では出来てても、わざと時間かけて考えたフリして持って行ったり(笑)。

そもそもどのタイミングでデザイナーとしてやっていこうと思ったかさえも曖昧なんです。黒田(征太郎)とK2という事務所を作ったときも、「スナックK2でもええやないか」と話してたくらいで。そのぐらいの感じでやって来ました。世のため人のためを思ってデザインをやっているわけじゃなく、おっきな波が来るのをただ待っている。そうやりながら「どうしたら一番楽かな?」というのを探しているような気がします。だけど、楽に生きるにはとにかく一生懸命やるしかないんですよ。だから仕込みは大変なんです。でも、その仕込みの段階は表に出さない。田中先生も時間をやりくりして、本当にマメに展覧会見たりするのに全国飛び歩いて、それこそ四国においしいもんがあると聞けば四国に飛んでいってました。

——今日のお話で出た「デザイン以外のことが大切」とか「手を動かす」といった部分は、時代につれ薄れて来ているものでもありますね？

長友 デザインだけでなく、どこの世界でも薄れてきてるでしょう？ 会社の社長や上司にしても、ふつうの会社員ばかりですから。ノルマをこなせと言うだけのね。僕が一番最初に会った会社の社長みたいな人がいないんですよ。「もっとお前の好きなようにしてびっくりさせてくれよ」とか「面白いことをやって笑かしてくれよ」なんて言ってくれる人たちがいないことには、きっかけも生まれません。

そうなるかと心配ですね。聞くとところによると、いま若い人たちは外国に行きたくないと言うそうじゃないですか。もっと行ったほうがええと思うけど。僕、このあいだ香港に行ったんですけど、こんな70のおっさんでも外国では刺激を受けてグワァーとなるわけだから、若い衆が行ったらもっとなるはずですよ。

デザイナーでもそうでなくとも、自分の中にある何かを形にしたい人は、そういういろんなエネルギーを汲み取らないと。「カッコええな」とか「どうやったらこんな作れんの?」とか、そういうどん欲さがすごく大事だと思うんです。美味しいもん食べたいみたいな気持ちというか(笑)。

バーにも行かなくなってるんですよ？ まず、お店の中よう入らんそうです。それはやっぱり田中一光先生みたいな先生がいなくて、連れて行かれないのと違いますか？ もったいない話ですね。デザイン

の業界以外の人たちと知り合えるのに。色川武大さんをはじめ僕も色々な方々と酒場で知り合いになりましたから。

そう言えばよく色川さんがね、「人生は8勝7敗でいいんですよ」と言っていましたけど、ほんとそうだと思います。全勝なんかありえない。必ず黒星がある。だからその黒星をどうやって白星に変える？ って話になるわけで。田中一光先生なんかも外から見てると全戦全勝みたいな感じですけど、人に見せないところで悔しがっておられたこともいっぱいあると思いますね。

そういう意味ではね、優れたグラフィックデザイナーを育成するためには、まずバーの入り方から教えたほうがええかもしれません(笑)。いずれにせよ「ちゃんと決められた時間勤めて、効率さえよけりゃええの?」ということ、もういっぺん考え直したい。

あとはね、デザイナーであるからには、関係者ではなく観客を刺激しないことにはやっぱり意味ないんじゃないの？ とも思います。狭い業界内で閉じてしまうと古くからある権威的な美術展みたいなものと同じ世界になりかねないですから。

僕は70年に日宣美(日本宣伝美術会)がなくなったのはいいことだと思うんです。それこそ健康的だという気がします。時代にそぐわないものがなくなるのは当たり前のことですから。でも、あの頃は学生に古いものをつぶすパワーがあったわけで、もしいまそのパワーがなくなっているというのであれば、やっぱりどこか病んでるということですよ。教育者や賞の審査員もそうかもしれない。いつも似たようなもんしか出て来なくなるとマズいんです。

だから、gggには“健康的なデザインの場”であり続けてほしい。若い才能も探せばいるはずなので、そういう人たちにチャンスを与えることができる素晴らしいですね。昔から「gggで展覧会できたらいいばしのもんや」というのはみんな思っているわけですから。過去25年のあいだに僕も3回展覧会をやらせてもらいましたが、ちょうど“食欲旺盛”な頃に(笑)、ほんと好きなことやらしてもらえて励みになりましたから。

(聞き手・テキスト：河尻亨一)

# On the Occasion of ggg's 25th Anniversary: The Past, Present and Future of Graphic Design

**Keisuke Nagatomo**

Art Director & Graphic Designer

— *To begin, we would like to ask your views on the current state of graphic design.*

**Nagatomo:** My feeling is that things can no longer be confined to what we used to define as “graphic design.” I teach at Tokyo Zokei and Kogakuin universities, so I have a lot of contact with young people. To begin with, it seems that nowadays there are fewer courses around in the graphic design field. Maybe it's time to rewrite the book on what we call design. And to move things in the right direction, I think education – teachers – are important.

I myself was fortunate in being blessed with good teachers and associates. When I entered the field, the word “design” didn't even exist in Japanese; what we now call design was “zuan” back then. Gradually “zuan” came to be replaced by the word “design,” and not long after that expressions like “graphic design” and “art director” also entered our everyday vocabulary. The vocabulary merely became increasingly specialized, but what we were doing was really no different from before.

When I look at young people today though, I get the feeling that what they're doing seems to be moving in different directions from what we've been doing. In their time off they do things like street dancing, whereas in my day we never thought of doing such things. (laughs)

Clearly things seem to be changing. Watching their presentations at their “graduation exhibitions,” I'm amazed. It's like they're giving a performance – and not in two dimensions but in three, and graphic design is only one element of it. Even in courses at vocational school, they don't just present a design; there's also music, and information technology, and medical treatment. Many different things all get mixed in.

The results are pretty interesting too, I must say. Still, we have to get them to study design as they're expected to, so what's important is how to achieve a proper balance. But today teachers aren't in step with what's happening, and being unsure of what they should do, they seem to have lost their way. Learning to become a designer still means learning hands-on what it's like where the job takes place. In my opinion just following the textbook and curriculum isn't enough.

— *What was it like when you were a student?*

**Nagatomo:** It was total chaos! (laughs) In the days when I was attending Kuwasawa Design School, we weren't taught by teachers. We were taught by a galaxy of stars: people like Ikko Tanaka, Tadanori Yokoo and Akira Uno – all designers working at the top of their profession. What each of them taught us was completely different from one another. (laughs)

People like Mr. Tanaka told us that when we found something that ap-

pealed to us we should pursue it thoroughly. Others took the opposite view and told us to study with a broad and shallow approach. There were even some who told us not to pay any attention whatsoever to what they were telling us! (laughs) That's how things were in those days, but I must say, it was extremely interesting.

— *How did you come to study at Kuwasawa?*

**Nagatomo:** It was completely by chance. I didn't know the first thing about design. I happened to be helping out at a certain company where the boss's son was studying design in the United States, and I stayed in his vacant room. The room was filled with books about design and art, books of a kind I'd never seen before. Browsing through them it struck me that this was a profession I'd never known about. My boss, learning of my interest, suggested I go to a design school, and when I asked people about it they told me that a vocational school called Kuwasawa had just opened and was said to be quite interesting. I also heard from somewhere or other that Ri Koran, the famous actress, was a student in Kuwasawa's night school. So, thinking that I might possibly meet her, that's when I decided to go. (laughs)

That's the way things were in those days. I bet even our teachers were groping in the dark. Ikko Tanaka was especially awesome in his approach. “You guys are in a two-year program,” he told us, “so you have to study twice as hard as students who go to a four-year college.” Looking back today, I learned a lot from what I did back in those days – and not just from what Mr. Tanaka taught me in the classroom. He also took me to see things like Kabuki and Noh and opera. He wanted me to see the genuine articles.

I also learned a lot about food from him! (laughs) One day he asked me what kind of food I like, and I replied that I like Chinese food. Being a lowly student though meant the only Chinese food I knew was things like gyoza dumplings and ramen noodles. Mr. Tanaka immediately quipped that Chinese food comes in infinite variety, and he said it was only after I knew it all that I should say I like Chinese food. And with that he swept me off to a place like the one in Koibumi-yokocho in Shibuya, and also to a high-class Chinese place and treated me to a full-course meal – including shark's fin soup!

Over drinks he also taught me such things as what wine goes with French food and which with Italian. Learning things in places like that can even be more important than what you learn at school.

Even back in those days, teachers like him were rare; but today no matter where you might look, you'll never find a teacher like him anywhere. He didn't just dig into his own pocket to teach me what the genuine article was; through discussions on all sorts of topics day in and day out, I also came to a really good understanding of his way of life and way of thinking.

What I really admire about Mr. Tanaka was whenever he created something he would invariably ask even us lowly students, guys who were by no means his assistant, for our opinions. He wanted to know how we reacted to his works.

Looking back, I was around 20 at the time and Mr. Tanaka was 30: in other words, we were only 10 years apart. Even today at 70 I couldn't match the way he was then, and yet he was a mere 30. Oh, there is one way I've always been like him though – I've always treated young people to a good drink! (laughs)

— *Being in an environment like that must also have had an effect on what you created.*

**Nagatomo:** Definitely. Education played a role, but the way we did things was completely different. In our day, for example, we created our own colors. Today people just paste on color chips, right? Nothing could be simpler – yet nothing is so unfulfilling, either.

Mr. Tanaka had a lot to say on the subject. In those days there was a brand of cigarettes called Tennyson, and the red hue on the package was quite striking. Mr. Tanaka took packages like that, cut out the colored areas, and made his own book of color samples. He would have new students put the thing together, and this was how we learned about colors. On one occasion he pulled out that Tennyson red and told me to create it. That's how he went about making posters, creating his colors from scratch.

Of course, doing that was easier said than done. When things didn't go right you'd end up with a whole bucketful. Then the color would become ingrained in your skin. With lettering too, he made us use fine-point brushes. Even for something as small as 1 millimeter, we would learn to write in Mincho and Gothic typefaces. When you undergo training like that, even the most clumsy person gradually gets the hang of it.

I have a pet theory of sorts. To learn our kanji characters we study by dictation, right? In the same way, colors and coloring are something you have to learn. Some people would say it's a talent you're born with, but that's sheer nonsense. That's why I think students should be taught how to create colors. Of course, knowing that bright red is bright red is sufficient. It's sufficient, but you still need a teacher who can properly teach you the meaning of the color.

— *The world of graphic design can be very demanding. What would you say is necessary in order to continue to be a graphic designer?*

**Nagatomo:** It's all a matter of whether you like what you're doing or not. And physical stamina, too. Mr. Tanaka would often say a graphic designer had to have five things: first, physical stamina; second,

physical stamina; third and fourth, nothing in particular; and fifth, talent. I think the reason he took a liking to me was probably because I played rugby, so he must have thought I had enough stamina physically.

Physical training is also extremely important. Even baseball players like Matsui, Dice-K and Ichiro – they may have been called prodigies when they were children, but day after day after day they practiced throwing a ball, again and again and again. That's how they found out what they're capable of. It's the same thing with a designer. You don't come up with red just by pressing a button on a screen.

It's in the process of training that at some point it all suddenly becomes clear to you. There's a moment when it suddenly hits you – just like the way a jogging high or walking high suddenly comes over you. I go walking every day, and the first 10 minutes or so I always just want to stop; but then when I keep going for about 20 minutes, suddenly my body feels light and from then on I just keep walking without thinking about it. It's the same way with design.

It's like some sort of ecstasy. I know somebody who said that inspirations come to him when he drinks champagne. I tell him he merely gets drunk! (laughs) But it's a feeling sort of like that.

That's why my personal creed is that volume is more important than quality: volume outdoes quality. Mr. Tanaka often said that just as there are actors who are supreme in their profession but know nothing else, there are people who are great at working with their hands but can do nothing else – and he exhorted me to be someone like that. He also told me not to make a great show of how much work went into something. One shouldn't show the traces of one's effort, he said, because it puts a burden on the viewer. He said it's when you learn to do your sweating behind the scenes that you become a true pro.

Doing something on a continuing basis isn't so easy in reality, though. It doesn't take much to come up with excuses for stopping. "I've got a cold and don't feel myself today," you might say to yourself, or "The Tigers lost last night, so I think I'll take the day off." (laughs) But if you persist at times like that, then the inspiration comes to you. I can guarantee it.

This reminds me of something that happened recently when I went to Toyama to attend JAGDA's annual general meeting. A student asked me what I do when I get in a slump. But the fact is, I never run into a brick wall or agonize over my work.

To begin with, designers senior to me thought spending a lot of time on a work only meant you had no talent. They said if you're good, you do things quickly, dash them off. But even if a great idea popped into our head while we were still on the phone accepting a job offer, we would always deliver the finished work pretending we'd spent lots of time on it! (laughs)

I'm also not even sure just when it was I decided to make a go of becoming a designer. The same thing's true of when I teamed up with Seitaro Kuroda to create our office, K2; we even talked about opening a bar named K2 rather than a design office. That's the way I've approached things all along. I haven't been a designer out of any desire to be of service to the world or mankind; I've always just been waiting for a huge wave to come over me. And in the process I think I've always looked for the easiest way out. In the end though, living the easy life takes a lot of hard work, doesn't it.

That's why the preparation or learning phase is so demanding. But what you do during that phase shouldn't be made obvious. Even Mr. Tanaka – as busy as he always was he'd somehow make time to go traveling around the country to see exhibitions – even if his choice of destinations may sometimes have been influenced by hearsay of some local delicacy he was eager to try!

— *You've mentioned the importance of knowing things other than design and of doing things hands-on, but would you agree that these things are becoming less important over time?*

**Nagatomo:** I'd say it's not something confined only to the realm of design. Look at the people who manage or run today's companies; they're all just ordinary employees who tell their workers to go meet quotas. You no longer find people like the president of the first company I worked for. He used to tell me to do what I wanted – and surprise him. Or he'd tell me to do something interesting – to make him smile. Without people like that, opportune occasions just don't arise. That's a source of worry, isn't it. I hear that young Japanese today say they're not interested in going abroad. It would do them good to go more, I think. Recently I paid a visit to Hong Kong, and if even an old fogey of 70 like me can get excited by what he sees in other countries, how much more so in the case of young people.

Whether you're a designer or not, anyone who wants to put form to what lies within themselves should feed on energy of various kinds like that. I think it's really important to be greedy – greedy in the sense of seeing something you think is really neat and wondering how you could make such a thing. Maybe "hungry" is a better word – a strong urge to devour something truly tasty. (laughs)

Young people today don't visit bars anymore either, do they. Apparently they rarely go in the door of such places, and I think this is because students today don't have a teacher like Ikko Tanaka to take them there. It's their loss too, because there they could get to know people outside the world of design. I made the acquaintance of a lot of different people at bars – people like Takehiro Irokawa, the writer.

Mr. Irokawa often said that in life it suffices to win 8 bouts and lose 7 – alluding to sumo, that is – and I agree completely. You can't expect

to win all the bouts all the time; there will always be bouts you lose. Which is why the question arises as to how to turn your losses into victories. Even in Ikko Tanaka's case, from the outside you might get the impression that he won every bout he fought. But I bet there were also many times when he felt chagrined without showing it.

In that sense, maybe the best way to nurture outstanding graphic designers would be to teach them first how to enter a bar. (laughs) At any rate I would suggest reconsidering the wisdom of being satisfied simply by putting in your allotted time and getting your job done efficiently.

Another thing, as a designer it's meaningless, I think, if your work piques the interest of the people around you but fails to stimulate the ordinary people who come to see it. If you enclose yourself within the narrow parameters of your field, you may find yourself in the same category as an art exhibition targeted only at experts.

I think it's a good thing the JAAC (Japan Advertising Artists Club) was disbanded in 1970. It was a healthy move, I think, because things that become out of step with the times should disappear – it's only natural. In those days though, students had power to crush and eliminate old things; and if today that power is no longer there, then something's wrong. The same is perhaps true of today's educators and competition judges, too. There's something wrong if everything we see resembles everything else.

That's why I'd like to see ggg continue being a "healthy" design venue. Young talent should be out there just waiting to be discovered and it's wonderful to give such people opportunities. Everyone's always believed that if you can hold an exhibition at ggg, you've made it as an artist. I myself was afforded opportunities to exhibit my works at ggg three times during the past 25 years, and being allowed to do what I truly wanted to do precisely at the time when my "appetite" was at its hungriest encouraged me greatly in my career.

Interview and text by Koichi Kawajiri



# DNP — グラフィックデザイン振興の模範

アニタ・キューネル

ベルリン アートライブラリー 学芸員

ギンザ・グラフィック・ギャラリー (ggg)、dddギャラリー、現代グラフィックアートセンター (CCGA) のように世界のグラフィックデザインの振興に熱心に努め、そのうえ大きな成功を収めている組織を、私はほかに知らない。これらはいずれも大日本印刷株式会社 (DNP) によって支援されている (2008 年より財団法人 DNP 文化振興財団により企画・運営)。DNP は 1876 年に、日本で初の本格的印刷会社として設立された。

DNP は質の高いデザイン、印刷を通じてのその実現を可能にすることで、自社製品のみならず、広くデザイン文化全般に対する自らの重い責任を果たしている。DNP の運営する非営利ギャラリーは、公立の諸美術館と並んで、様々なグラフィックアートに関する公共的対話にたいへん重要な貢献をしている。日本のグラフィックデザインにおける高度なデザイン文化を推進し、これを国のアイデンティティの重要な一部として保護することを目的としたとき、おのずから、こうしたデザイン文化を国際的視点からも展望し、海外における展開と比較したいという願いが生じる。以来、定期的に欧米のグラフィックデザイナーを招いて展覧会を開催している。選抜の水準は高く、ggg、ddd、CCGA から展覧会開催の誘いを受けること自体、とても大きな名誉である。

ggg は DNP が創設した最初のギャラリーであり、当然のことながら、それは世界的名声を獲得している。このギャラリーの 300 を超える展覧会と出版物のリストは、さながら世界の選りすぐりのグラフィックデザイナーの人名録である。日本での体験は海外の多数のグラフィックデザイナーに消えることのない印象を残し、彼らの制作にインスピレーションを与えている。日本のグラフィックデザイナーも同じく、つねに欧米のグラフィックデザインから影響を受け、それを自らの視覚表現のレパートリーに組み込んでいる。

ggg は単にギャラリーであるにとどまらない。それは多数の出版物やインタビューを通じて、造形およびスタイルの背景にある理論的概念、デザインのコア部分を示し、デザインの今日と未来、またデジタル時代におけるデザインの役割に関する諸問題を議論する公共的プラットフォームとなっている。写真の出現が複製版画を時代遅れなものにしつつも、写真がグラフィックアートという媒体自体に取って代わることはなく、実際にはグラフィックアートをそれにふさわしいアートの道に復帰させた。同じように、デジタル媒体が印刷媒体に取って代わることはないであろう。映画の発明はスチール写真を排除しなかった。各種の媒体は並存し、それらのもつ意味が変化したり、相互に影響しあっていることがわかる。紙が突然姿を消すことはないであろうし、この素材から作られるパッケージも、本などの印刷物と同様、存在し続けるであろう。

ここ 20 年あまりの間に、デジタル革命によって印刷物の役割が問い直されてきた。すでにウェブデザインはきわめて大きな重要性を獲得している。デジタル領域においてすぐれたデザインを推進するとは、デザインをパブリックに展示・提示するためのプラットフォームとしてのデジタル領域の潜在的な可能性を活かすことでもある。いわば、デジタル・バージョンの ggg である。それは、

審美現象としてのグラフィックデザインに対する鑑識眼を高め、さらにはグラフィックデザインのデジタル化に対する鑑識眼をも高めるであろう新たな方法となるかもしれない。また、デザインの水準をさらに高める働きをするだろう。DNP が印刷業界における世界的リーダーとなり、そのみならず、他の分野——たとえば電子工学や情報セキュリティ——においても冠たる地位を獲得して久しい。そこで、デジタル媒体におけるデザイン品質に関する議論のための新たなプラットフォームを設立してはどうだろうか。

しかし、これと平行して、ポスターや印刷媒体といった伝統的な形式を見失うことがないようにしたい。過去の評価は現在への重要なヒントを提供し続ける。たとえば 1945 年以前の時期を調査し、そうした時代の少数のデザイナーひとりひとりの作品に光を当てるのもおもしろいだろう。同時に、視野をチェコ、スロヴァキア、ハンガリー、ポーランド、ロシア、スペイン、あるいはラテンアメリカやアフリカなどヨーロッパ以外の大陸まで広げてみるのもよいかもしれない。また、デジタル媒体における図形言語を、印刷媒体における、とくに国家的あるいは個人的な図形言語と比較するのは、たいへん興味深いことである。

これまでの ggg および ddd ギャラリーの多彩な活動を見ると、両ギャラリーがまさに今述べたような事業に邁進してきたことがわかる。

2000 年、DNP グラフィックデザイン・アーカイブが設立された。2006 年から 2007 年にかけて、「ジャパニーズ・ポスター・トゥデイ」と題する同アーカイブ所蔵作品の展覧会がヨーロッパ 4 か国を巡回した。これは、近年の日本のグラフィックデザインがきわめて洗練されたものであることを印象づけた。また、その記録的入場者数が強い関心と呼んだ。

グラフィックデザインのヨーロッパにおける公的コレクションのほとんどは、19 世紀にアーツ・アンド・クラフツ運動の結果として創設されたものである。この時期には日本のグラフィックアート (木版画) も収集された。ヨーロッパのモダンアートへの影響が多であったためである。今日の状況はこれとは異なり、ヨーロッパのコレクションの中で 1945 年以降の日本の現代グラフィックデザインの占める割合は概ね低いレベルにとどまっている。現在、日本のグラフィックデザインへの関心が途方もなく高いのは、このような理由にもよる。

それらの所蔵作品はすべて、伝統的な紙の作品である。我々はデジタルデザインの収集の可能性を追求しなければならない。そうした新しいデジタル形式のグラフィックデザインの保存はどうすれば可能なのだろうか。我々はそれらの作品をコレクションから除外すべきなのだろうか。10 年間の計画段階を経て、1997 年に ZKM (Zentrum für Kunst und Medientechnologie Karlsruhe カールスルーエ・アート・アンド・メディア・テクノロジー・センター) が開設された。我々はニューメディアに関するあらゆる問題について ZKM に問い合わせるべきなのだろうか。現在のところ、ZKM 以外の国立美術館がコストの高い技術的・人材的ノウハウに費用をかけることは不可能である。DNP の諸文化施設の構想はいかなるものとなるであろうか。

# DNP— That Means Exemplary Promotion of Graphic Design

**Dr. Anita Kühnel**

Curator of Graphic Design Collection at the Kunstbibliothek, Staatliche Museen zu Berlin (Art Library of the State Museums)

I know of no other similar institutions which campaign as ardently — and with such success — to promote international graphic design as the ggg, ddd gallery and the CCGA, all of which are supported by DNP. DNP was founded in 1876 as first full-scale printing company in Japan.

With its engagement for high quality in design and the realisation in prints DNP admits one's heavy responsibility not only for the own production but also for the culture of design in general. The non commercial galleries managed by DNP make a very important contribution to a public dialogue about various kinds of applied graphics besides the state museums. With the principal aim of promoting the advanced culture of design evident in Japanese graphic design and safeguarding it as an important part of the national identity, the desire soon manifested itself to also view this culture of design from an international perspective to see how it compares with developments abroad. The result: graphic designers from Europe and the USA have been regularly invited to exhibit in Japan ever since. The standards for selection are high and an invitation to exhibit at the ggg, ddd gallery or the CCGA is a tremendous honour in itself.

Being the first gallery to be founded by the DNP corporation, ggg rightly commands a worldwide reputation. A glance down the list of the gallery's more than 300 exhibitions and publications reads like a who's-who of the crème de la crème of graphic designers from all over the world. The experience of Japan has left a lasting impression on many foreign graphic designers and proved a source of inspiration for their own work. And in turn, their Japanese counterparts have always similarly absorbed influences from European and American graphic design and appropriated it into their own visual repertoire.

The ggg is more than just a gallery. With its many publications and interviews, it has grown to become a public platform that presents the core theoretical ideas behind artistic figures and styles and discusses questions on the present and future of design and its role in the digital age. For although the emergence of photography rendered reproductive prints obsolete, it did not supplant the graphic medium as such, but actually brought it back to an artistic path that suited it. In this vein, print media will not be supplanted by digital media. The invention of movies didn't eliminate the static pictures. The various media exist in parallel and we observe the changing of the meanings and the interaction. Paper will not suddenly disappear and packaging made from this material will continue to exist, just as the book and other printed material will.

Over the last two decades some of print's roles have already been called into question by the digital revolution. And web design has already taken on an enormous significance. Promoting good design in the digital domain also means harnessing its potential as a platform to exhibit and present things to the public — perhaps as a digital version

of the ggg? Such a thing would amount to a new, additional way to stimulate a greater critical awareness among the public of graphic design as an aesthetic phenomenon also in its digital applications and would emphasize high design standards. A long time ago the company DNP has not only established a world leader in the printing industry, but has also become a number one position in other field: electronics and information security. Why not setup a new platform for discussion about design quality in digital media?

Parallel to this, we should not, however, lose sight of the traditional forms of the poster and the print medium. An assessment of the past will continue to provide important pointers for the present. It would be interesting, for instance, to examine the period prior to 1945 and highlight the work of a few individual designers from that time, while simultaneously broadening our view to include Czech, Slovakia, Hungary, Poland, Russia or Spain and continents beyond Europe, such as Latin America and Africa. It would be very interesting to compare the picture languages in the digital media to the especially national and individual picture languages in the print media.

With the diversity of their work up to now, the ggg and ddd gallery have shown us that they are well on the way to doing just that.

In 2000 was founded the DNP Graphic Design Archives. Under the title "Japanese posters - today" works from the DNP Graphic Design Archives were on tour in the years 2006 and 2007 in four countries in Europe. This exhibition gave a very sophisticated impression about the youngest development of the graphic design in Japan and awaked lively interest as the high numbers of visitors documented.

The most of European state collections of graphic design were founded in result of the Art and Crafts movement in the nineteen century. In this time were also collected examples of Japanese graphics (wood cuts) because the influence of these about the modern art in Europe was very important. Today is in the European collections the proportion of modern graphic design from Japan after 1945 different, more or less unimportant. That's why and concerning the high level the extraordinary interest in graphic design from Japan.

All these collections are traditional paper collections and we have to ask for the possibilities for collecting of digital design. How we can conserve the new digital forms of graphic design? Should we ignore these forms for our collections? After a planning phase of ten years the Centre for Art and Media (ZKM) in Karlsruhe opened in 1997. Should we refer to ZKM in all questions of new media? At the moment it's impossible for the other state museums to pay the very cost-intensive technical and personal know how. What will be the concept of the culture institutions of DNP?



展示事業

Exhibitions

## **ginza graphic gallery 11-12**

April 1 – 25, 2011

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2011

May 9 – 31, 2011

Sato Koichi Poster Exhibition

June 6 – 28, 2011

Raymond Savignac; At the Age of 41, Maestro Born from Poster [Monsavon au lait]

July 4 – 28, 2011

2011 Tokyo Art Directors Club Exhibition

August 4 – 27, 2011

[gggg] Groovisions Exhibition

September 2 – 28, 2011

Form, Color and Structure: The Sensual World of Aoshi Kudo

October 5 – 29, 2011

100 ggg Books 100 Graphic Designers

November 4 – 26, 2011

SVA MFA Design: Ideopolis-Tokyo Exhibition

December 1 – 24, 2011

Luminous Mandala: Book Designs of Kohei Sugiura

January 13 – February 25, 2012

DNP Graphic Design Archives Collection IV

Ikko Tanaka Posters 1980-2002

March 2 – 27, 2012

Rodchenko - Innovator of Russian Avant-Garde -



ggg

100

100 ggg Books

100 Graphic Designers

00

100 ggg Books

100 Graphic Designers



ggg

100 ggg Books  
100 Graphic Designers



# Tokyo Type Directors Club Exhibition 2011

April 1 – 25, 2011

TDC展 2011



わずか10枠の受賞作品に、メディア芸術祭で脚光を浴びたEye Writerの作家がいる、隣にスイスと日本のポスターが、イスラエルの美術館CIや、北京のセレクトショップのブランディングもある。いかに横の振幅の広い賞であることか。またグランプリはじめブックデザインがフィーチャーされた年でもあった。審査員各人の「個」が持ち得る見識・感性を総動員し、目前にあるメディアもカテゴリーも異なる作品に向き合い、2011年の秀作として「いずれかを選ぶ」、その結果がここにある。震災の影響で歴史上初めて海外受賞者に会うことのない年になった。服部一成理事の提案で国内受賞者のギャラリートークを急遽開催できたことが幸いであった。

東京TDC 照沼太佳子

Among a mere 10 winners, one finds an artist using EyeWriter, the system that garnered great attention at the Japan Media Arts Festival; posters created in Switzerland and Japan; the Corporate Identity for an art museum in Israel; and branding for a boutique in Beijing. The awards were thus of amazing breadth, highlighted this year by outstanding achievements in book design, including the Grand Prix winner. The exhibition brought together superlative works selected by judges each availing of their respective discernment and sensibility to critique works from differing media in varying categories. Under the impact of last year's earthquake, none of the foreign winners came to Japan. Takako Terunuma, Tokyo TDC









# Sato Koichi Poster Exhibition

May 9 – 31, 2011

佐藤晃一 ポスター



子供の頃からポスターを描くのが好きで、将来はポスターを描く人になりたいと思っていたが、それは結局グラフィックデザイナーの仕事であった。今でも肩書きは「ポスター作家」としたいくらいの気分である。

今回の展示では過去44年間の作品のうち実際に仕事として依頼されたポスター 130点を2部屋の壁いっぱいには掛け、ラフスケッチや版下台紙などはテーブル面に並べて手に取って観られるようにした。若い人たちには、アナログ時代の印刷物の面白さを肌で楽しんでもらったことと思う。一方にポスターを作りたい人がいて、一方にそれを待っている人々がいるかぎり、ポスターは作られ続けるだろう。

佐藤晃一

From the time I was a child I loved to draw posters and wanted to be someone who draws posters, and ultimately I learned that is what graphic designers do. Even now I like to think of myself as a “poster artist.”

For this exhibition, I selected 130 posters from the past 44 years that I had been commissioned to create. I displayed them on the walls of the gallery's two rooms, and on tables I laid out my rough sketches, mechanicals and so on in such a way that they could be taken in hand and looked at. I think this let young people enjoy first-hand how interesting printed materials were before the digital age. Still, I think that so long as there are people who want to make posters and people who are waiting for them, posters will continue to be made.

Koichi Sato







# Raymond Savignac; At the Age of 41, Maestro Born from Poster [Monsavon au lait]

June 6 – 28, 2011

レイモン・サヴィニャック展：41歳、「牛乳石鹸モンサヴオン」のポスターで生まれた巨匠

私はレイモン・サヴィニャックという素晴らしい人物を存じ上げ、長いこと彼の作品とつきあう機会に恵まれた。本を執筆し展覧会を開催したあとも、彼の素晴らしいポスターにいつも新鮮な魅力を感じる。これは、サヴィニャックの作品が人々を当惑させ驚かせる「なにか」、すなわち作品が生き続ける「なにか」を内に秘めているからだ。綿密な準備に余念のないパートナー（ggg）が作品を自分達で選択し展示をするのを見ることは、作品の新しい見方を発見することだ。

ポスターは街の中に貼られるのが常識だが、芸術的な価値のあるポスターは、作品が対話をする絵画の展覧会と同じようにして鑑賞することができる。展覧会の成功は、来館者の反応でわかる。ギンザ・グラフィック・ギャラリーでのサヴィニャックの展覧会は長いこと私の脳裏に刻み込まれるであろう。

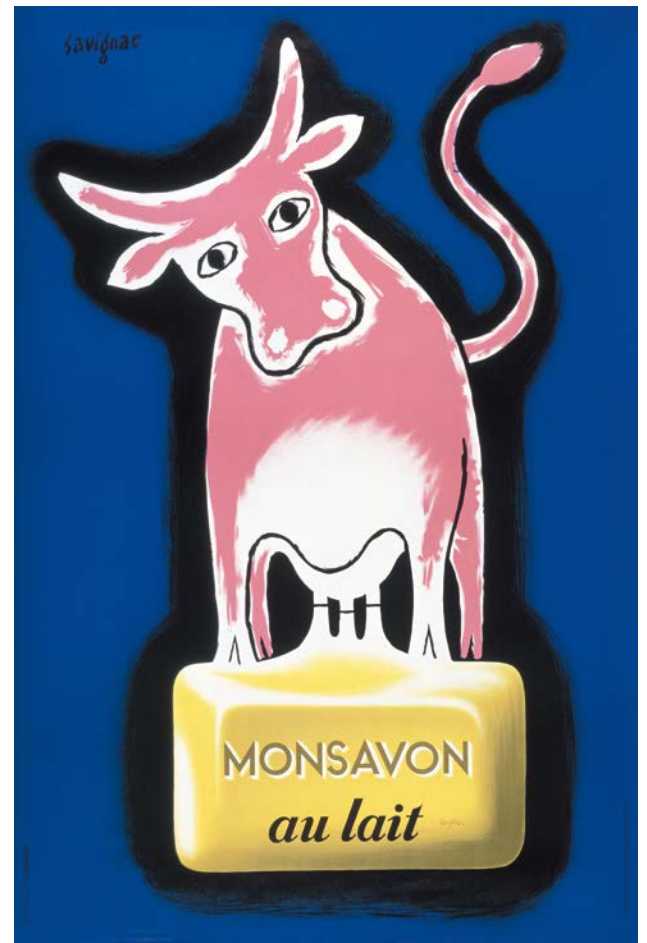
ティエリ・ドゥヴァンク

I knew Raymond Savignac, a wonderful man, personally and have long been familiar with his works. Yet even after being involved in numerous books and exhibitions about him, I always find something fresh and new in his posters. This is because there is always something disorienting and surprising in them – and this is what makes them enduring. Add in a sensitive collaborator like ggg, who selected and showed them however it pleased, and the result was the discovery of a new and different perspective on Savignac's works.

The conventional wisdom is that posters belong posted about town. But when posters have exceptional worth, they should be viewed like paintings in an exhibition, a place where they can interact. Whether or not an exhibition is a success is visible in the faces of its visitors. This exhibition at ggg has given me something all the more wonderful to remember Savignac by.

Thierry Devynck







# 2011 Tokyo Art Directors Club Exhibition

July 4 – 28, 2011

## 2011 ADC展



2011年は日本にとって、忘れられない年になりました。3月に起きた大震災、巨大津波、そして原発事故。ADCの審査が行われたのは5月中旬。震災からまだふた月しか経っておらず、みんながある種の動揺の中、審査に臨みました。震災直後はAC以外すべての広告が消え、広告制作者は無力感におそわれました。そんな中、坂本九の歌がテレビの中で流れはじめました。多くのタレントが歌いつないでいく、奇跡のようなCMでした。応募作品のほとんどが震災以前のものという状況で、異彩をはなったこのTVCMが、2011年度のグランプリに輝きました。時代を反映するのが広告であり、それを記録するのがADCの役割です。特別な年の賞に相応しい授賞となりました。 ADC展委員 副田高行

2011 was a year Japan will never forget. The earthquake, tsunami and nuclear plant disaster occurred in March. The selection of this year's Tokyo ADC Award winners took place only two months later, in mid-May. Everyone on the judging panel was somewhat shaken by the recent events, compounded by the fact that in the wake of March's calamity all advertising other than public service ads had vanished, leaving those who create ads with an overwhelming sense of inertia. Amidst all this, a TV commercial featuring two songs originally sung by Kyu Sakamoto hit the airwaves. It was a miraculous collaboration, a total of 71 celebrities singing in relay these two songs inspiring hope. While nearly all entries vying for the Tokyo ADC's coveted awards had been created before the March disaster, it was this TV commercial that outshined them all and grabbed the year's Grand Prize. Advertisements are reflections of their times, and the Tokyo ADC's role is to record them. Last year's winner could not have been more appropriate for this most unusual year.

Takayuki Soeda,  
Tokyo ADC Exhibition Committee Member







# [gggg] Groovisions Exhibition

August 4 – 27, 2011

[ジー ジー ジー ジー] グルーヴィジョンズ展



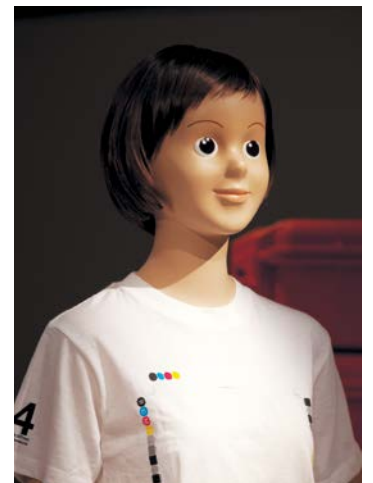
今回は、ギャラリーの床を使用した展示を強く意識しました。本来であれば天地左右のあるグラフィック作品も、ランダムに床に配置されることで方向性や輪郭が曖昧になります。大量に持ち込んだ展示物が、各フロア全体で一つの作品に見えるよう試みたのが今回の展示でした。一階ではグラフィックが白でプリントされた合板の新作を、制作進行中であるかのような雑然とした構成をイメージして配置しました。地下ではこれまでの作品紹介を目的としましたが、我々の作品は平面だけでなく立体、映像など様々な形式が混在します。地下の作品展示ではそれらを同時に展示するために、低い台座を設置してすべてを水平に配置するという方法を選択しました。

グルーヴィジョンズ

We made very strong conscious use of the floor. Through the random placement of graphic works on the floor instead of displaying them vertically, directionality and contours become indistinct. We brought in a large volume of display items and attempted to create the appearance of one work filling each floor. On the ground level, we took new works, boards on which graphics had been printed in white, and arranged them to conjure the image of a randomly configured work in progress. In the downstairs, our aim was to introduce our works to date. In order to display various forms of our work simultaneously, we elected to set up low pedestals and place the works all horizontally.

Groovisions







# Form, Color and Structure: The Sensual World of Aoshi Kudo

September 2 – 28, 2011

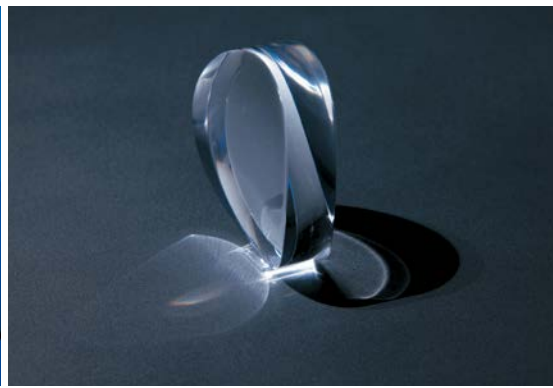
工藤青石展「形と色と構造の感情」



展覧会にあたって、自分のデザインの根幹にあるものは何か？とあらためて考えた結果、「形」「色」「構造」という言葉に集約し、それをテーマとして会場を構成しました。1階にはデザインしてきた化粧品「の形」だけを抜き出し、マーケティングから解放された純粋な状態で、「0→1存在のはじまり」を提示しました。地下には「皮膚としての信号」である「色」をまとった実際の商品と、「認知を促す装置」としてのビジュアルイメージや空間イメージによって、ブランディングにおける「構造」の一端を展示しました。ミクロとマクロの視点を通して、「感情」に何を働きかけるかがコミュニケーションデザインにおいて大切なことだと考えています。

工藤青石

I pondered what lies at the core of my design work. The answer could be summed up in the words “form, color and structure,” and this was the theme I chose for configuring the exhibition. On the ground level, I selected only the “forms” of the products I had designed, and proposed “0→1 : The Beginning of Existence” in a pure state free from the shackles of marketing. In the lower level, I displayed actual commercial products cloaked in “colors” – “skin-like signals” – and “structure” within branding achieved through visual and spatial images used as “recognition-promoting devices.” I believe that what is important in communication design is what appeal we make, through micro and macro perspectives, to our “emotions.” Aoshi Kudo



# 100 ggg Books 100 Graphic Designers

October 5 – 29, 2011

## 100 ggg Books 100 Graphic Designers

1992年に刊行が開始されたggg Booksは2011年に100冊というまとまりをもったことで、単独の書籍とは異なった意味を持ち始めた。それは、グラフィックデザインをテーマとした百科事典あるいは、デザイナーを中心にしているので、「人名辞典」というべきかもしれないが、そうした意味が出て来た。もちろん世界的にみても類書はない。

会場には、100冊つまり100人の作家の代表的な作品が展示され、20世紀以来の近代のグラフィックデザインの歴史を一望し、確認するとてもよい機会となった。ggg Booksは、グラフィックデザインという知を広め、またその文化財をゆたかなものにするには間違いない。100冊刊行を契機に、次の100冊刊行を期待したい。

柏木 博

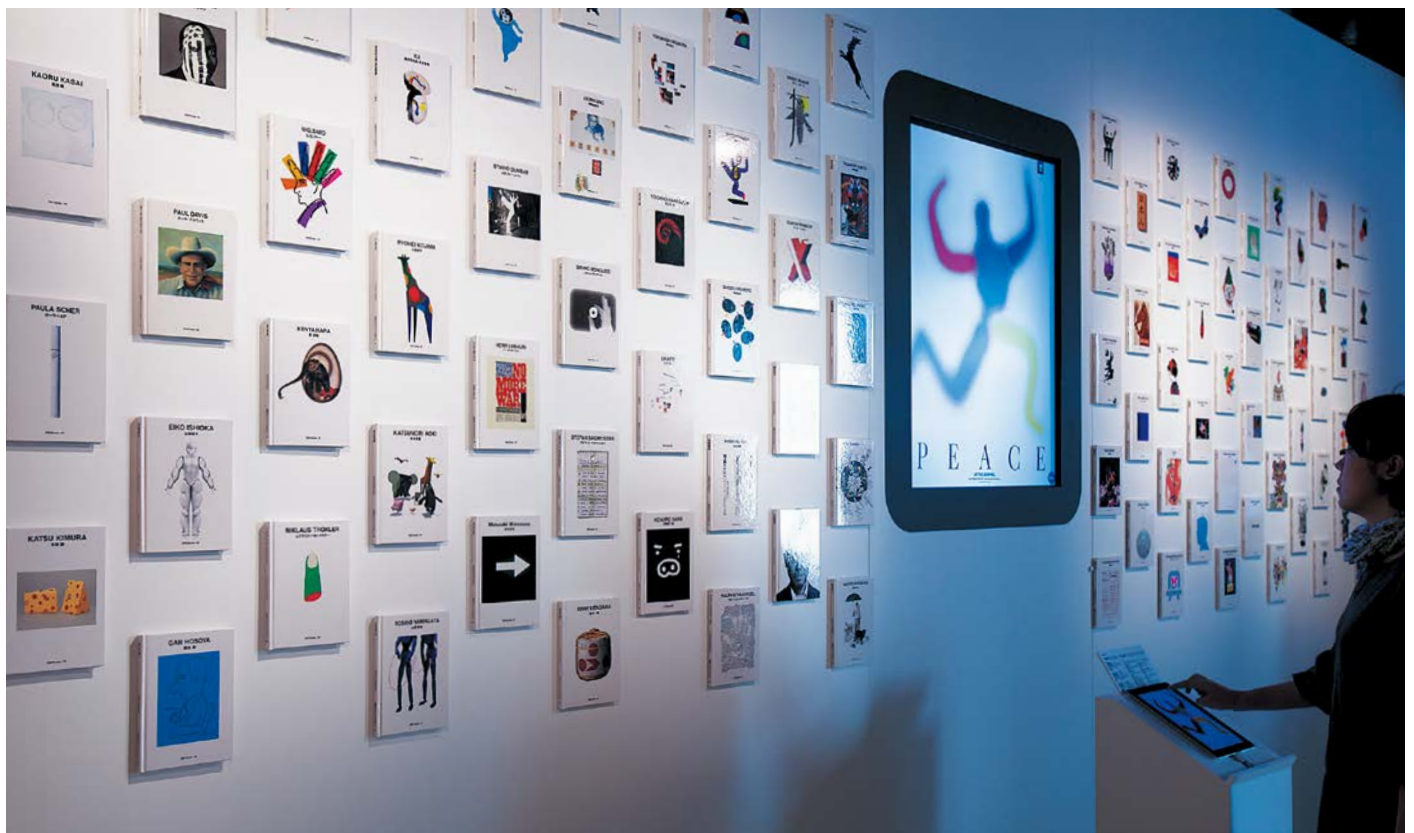
In 2011 the ggg Books series launched in 1992 reached its 100th volume, a milestone that now makes the series meaningful in a way different from that of a single volume. The newly accrued meaning is the series' new status as what might be called an "encyclopedia of graphic design" or, given its focus on the designer, as a "who's who" in graphic design. Needless to say, there is no analogous body of work in this field anywhere in the world.

This exhibition displayed representative works by the 100 designers featured in the series. In doing so, it offered a wonderful opportunity to acquire, and confirm, a broad overview of the history of modern graphic design since the 20th century. ggg Books have clearly spread knowledge about graphic design and enriched its value as a cultural asset. I now greatly look forward to the next 100 volumes.

Hiroshi Kashiwagi







# SVA MFA Design: Ideopolis-Tokyo Exhibition

November 4 – 26, 2011

イデオポリス東京：スクール・オブ・ヴィジュアルアーツ／美術学修士課程卒業制作展



本展はデジタル展覧会という意味でユニークなものでした。21のプロジェクトは実際にはそれぞれ異なるメディアで制作されましたが、本展では映像という形式で再現しました。テキストパネルと壁面グラフィックは各プロジェクトのルーツとルートを示しており、背景が見えるようにしました。また展覧会カスタマイズ版イデオポリスiPadマガジンの形でも紹介。そして学生がデザインしたカタログは展覧会のドキュメンテーションであり、課題の目的と成果をより詳細に示しています。いいアイデアで、熟考され、賢くリサーチされ、よくデザインされたものは、デジタルでもみごとに再現可能であることを、この「イデオポリス」展が証明しました。

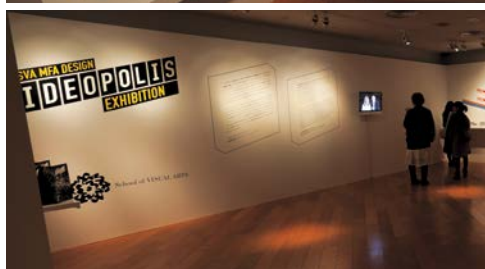
スティーブン・ヘラー&リタ・タラリコ

This event was unique because it was a digital exhibition. The 21 presentations were created using different media, but all were in the form of videos that were projected on walls. Text panels and vinyl wall graphics showed the roots and routes of the social, cultural and commercial projects and provided additional context. The exhibition included the Ideopolis custom iPad magazine featuring the projects. A catalog designed by students, further documented the exhibition and gave more details on the goals and outcomes of each product. Ideopolis proved that good ideas, well conceived, smartly researched and well designed, can be successfully presented digitally.

Steven Heller and Lita Talarico







# Luminous Mandala: Book Designs of Kohei Sugiura

December 1 – 24, 2011

杉浦康平・マンダラ発光



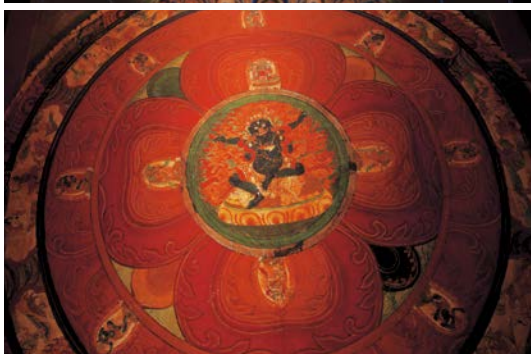
「マンダラ発光」展の主役は、中国・日本で深められた「二にして一」の仏教思想を表す「両界曼荼羅」、チベットで展開した「後期密教マンダラ」、ボッティチェリの名画に潜む「マンダラ的発想」——をテーマとする3冊の豪華本である。複合的オブジェとしてデザインされた本の内容を全面展開し、パネルや動画、音楽、照明技術を加えた総合展示が実現した。同時期に武蔵野美術大学 美術館・図書館では「杉浦康平・脈動する本」展が開かれ、50年間の本のデザインを俯瞰する、800点近い作品が展示された。それとは対照的な3冊の本による展覧会。銀座の街中に突如出現した「光と音と曼荼羅が織りなす静寂な浄土」「マンダラが呼吸する宇宙的なひろがり」に驚嘆する声が数多く聞かれたのは、望外の喜びである。

杉浦康平

My “Luminous Mandala” exhibition focused on three luxuriously bound books dealing with the following themes: the “Mandala of the Two Realms” that expresses the Buddhist philosophy of “unity in duality,” a concept taken to unprecedented profundity in China and Japan; latter-period Esoteric Buddhism as it developed in Tibet; and Mandala-like ideas lurking in the paintings of Botticelli. The exhibition presented a broad overview of the contents of books designed as compound objects. A comprehensive display was achieved incorporating panels, video, music and lighting techniques. Concurrent with this exhibition, a separate showing of my works, titled “Vibrant Book: Methods and Philosophy of Kohei Sugiura’s Design,” took place at the Musashino Art University Museum & Library. At that venue, nearly 800 of my works were on display, offering visitors a bird’s-eye view of my 50 years of involvement in book design. The exhibition at ggg, featuring only three books, was in marked contrast. I heard many people marveling at the discovery, in the heart of Ginza, of a “paradise of tranquility interwoven with light and sound and Mandalas,” a “cosmic expanse alive with Mandalas.” Such comments gave me unimagined joy.

Kohei Sugiura







# DNP Graphic Design Archives Collection IV

## Ikko Tanaka Posters 1980-2002

January 13 – February 25, 2012

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ 田中一光ポスター 1980-2002

田中一光が急逝してから、もう10年になる。2009年に田中一光アーカイブポスター展を開催し、初期から中期に至る作品を紹介したが、今回はそれ以後のポスターをセレクトした。朝日新聞でも大きく報じられたが、明快でビジュアルコミュニケーションとしての機能を確実に果たしながら美しく、これぞポスターという展示であった。この時期はグラフィックデザインの王道を歩んだ田中の円熟期となる。後期の代表作でもあるNihon Buyoのポスターは日本の伝統的な舞踊の女性の顔が、四角・三角・円・半円の造形と色彩で見事に現代的で、圧倒的な美しさが際立った。今見ても田中のポスターは全く古びることなく輝いていた。 永井一正

Ten years have now passed since Ikko Tanaka's untimely death. In 2009 ggg mounted an exhibition introducing his early to middle-period poster works; this follow-up exhibition focused on his later posters. As hailed in the press (Asahi Shimbun), the exhibition demonstrated what posters are meant to be: beautiful to look at yet simultaneously clear to understand and solidly functioning as visual communication. During this mature phase of his career Tanaka kept to the "main road" of graphic design. In "Nihon Buyo," one of his representative works from this period, using simple forms – squares, triangles, circles and semicircles – and bold colors he brilliantly created the face of a traditional dancer of overwhelming contemporary beauty. The exhibition confirmed that even today Tanaka's posters have not become antiquated; they continue to shine.

Kazumasa Nagai



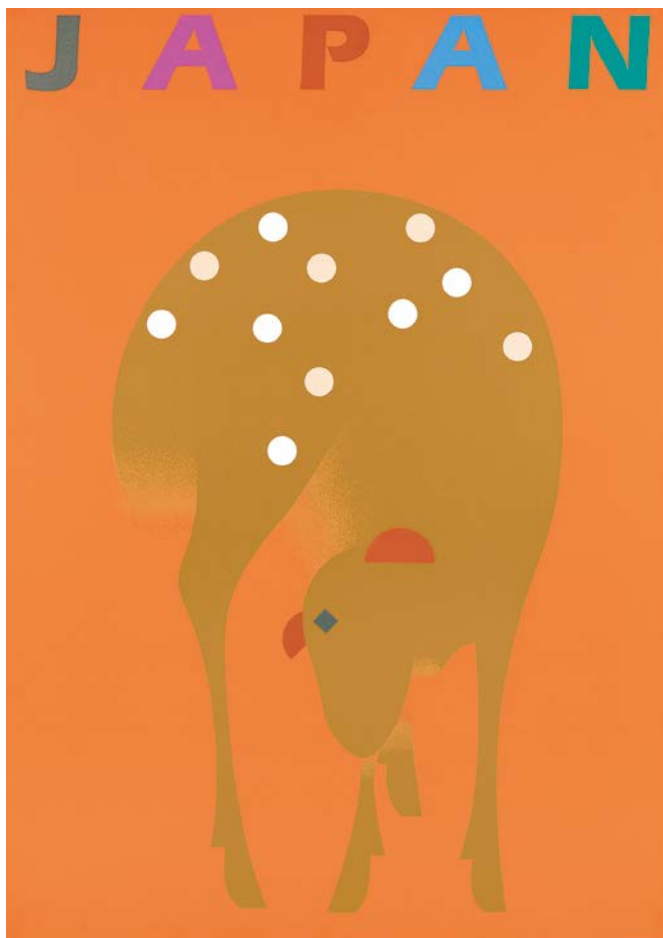
A Centennial Exhibition  
**SALVATORE  
FERRAGAMO**  
THE ART OF THE SHOE



ヒロシマア・ピールズ



# JAPAN





# Rodchenko - Innovator of Russian Avant-Garde -

March 2 – 27, 2012

ロトチェンコ ― 彗星のごとく、ロシア・アヴァンギャルドの寵児 ―



1917年のロシア革命前後から、20年代後半までの実に短い間、世界史的に見ても稀有な、様々な分野で先駆的芸術が束になって勃興したロシア・アヴァンギャルド運動。アレクサンドル・ロトチェンコは、その渦中で輝いた寵児的存在だった。ロトチェンコの孫で、監修者のアレクサンドル・ラヴレンチェフから所有しているグラフィック、写真作品を御提示いただき、わたしが副監修の立場でそれ等の作品の展示会開催を告知するポスター、それにカタログ、会場構成等を行なった。「『硬質な粋さ』の表現者」としてのロトチェンコの作品は実験精神に溢れ、現代に放射される。その放射された破片が飛び込んできて、我々に「目を醒ませ!」と教えてくれるのだった。

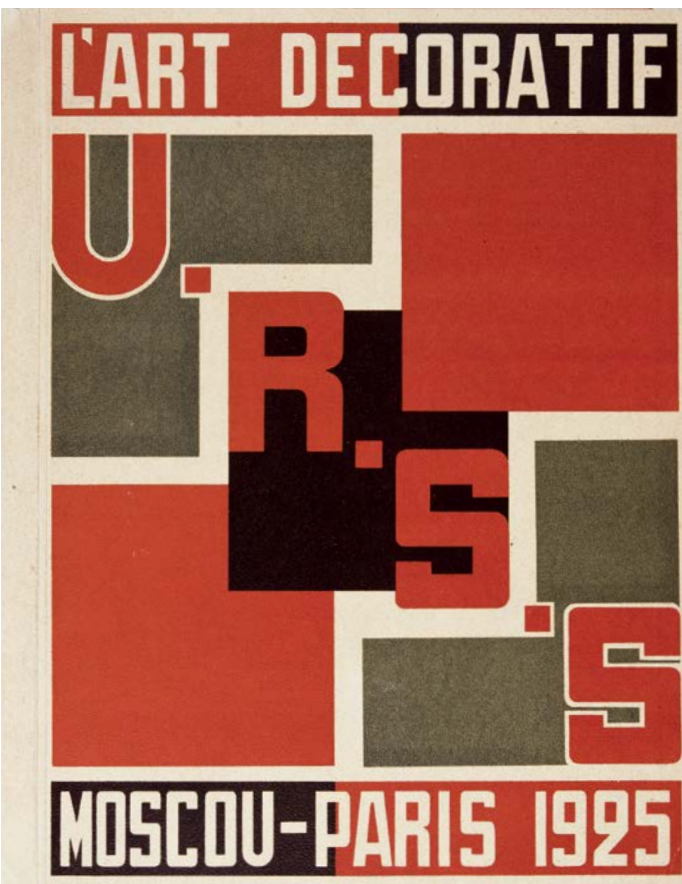
矢萩喜從郎

The Russian avant-garde – a movement of remarkable brevity, spanning only from around the time of the Russian Revolution in 1917 through the end of the 1920s – gave birth to a host of pioneering artists in various fields on a scale rarely seen anywhere at any time in history. Among the artists of this tumultuous period Aleksandr Rodchenko outshined all others. For this exhibition, Aleksandr Lavrentiev, Rodchenko's grandson, loaned graphic and photographic works in his private collection and also was in charge of assembling the exhibits. I, serving in an assisting role, created the poster announcing the show as well as the exhibition catalog and spatial layout. As a hard-edged but stylish artist, Rodchenko created works that brim with an experimental spirit and contemporary radiance – a radiance whose fragments hit us in the face and tell us to “Wake up!”

Kijuro Yahagi







## **ddd gallery 11-12**

January 18 – March 8, 2012

**GRAPHIC WEST 4**

**“Okumura Akio and Works” Exhibition**

March 22 – May 11, 2011

**Shueitai 100**

May 20 – July 2, 2011

**Tokyo Type Directors Club Exhibition 2011**

July 13 – September 2, 2011

**Kazunari Hattori Summer 2011 in Osaka**

September 14 – October 27, 2011

**2011 Tokyo Art Directors Club Exhibition**

November 9 – December 21, 2011

**100 ggg Books 100 Graphic Designers**





# GRAPHIC WEST 4

## “Okumura Akio and Works” Exhibition

January 18 – March 8, 2012

GRAPHIC WEST 4「奥村昭夫と仕事」展

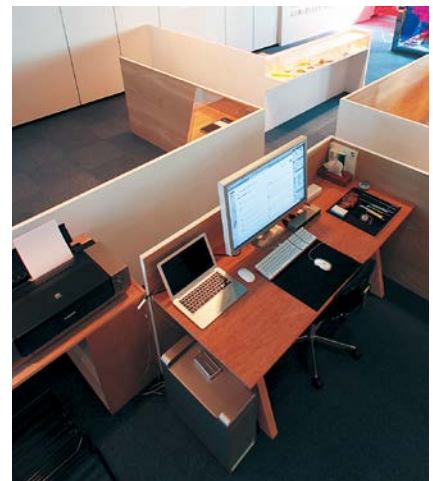


今回の展覧会では、企画、展示、広報など全てを、デザイナー原田祐馬さんに委託しました。彼の計画に従って166の質問に答えたカードを作ったり、会期の約半分を会場に創られたスタジオスペースで仕事をする「仕事します」プロジェクトも実施。来場者と会話しながら97人の名刺と7枚のポスターをその場で制作するなど、デザインの力を確認する毎日でした。映像制作の小幡信さん、原稿協力の多田智美さん有難う。おかげで多くの人とデザインの話が出来ました。

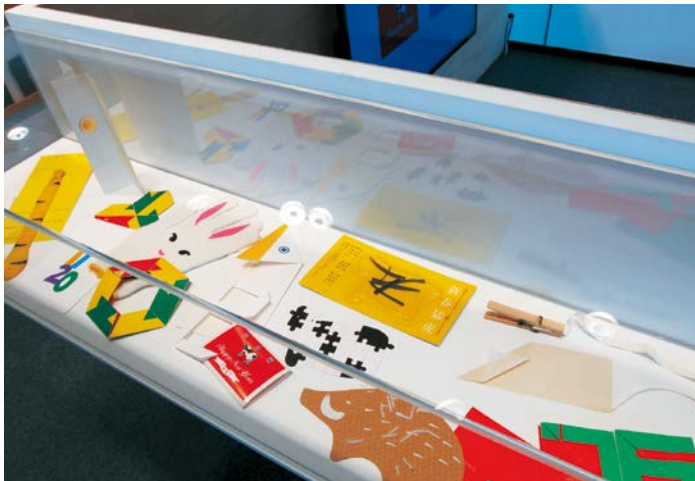
奥村昭夫

I entrusted designer Yuma Harada with all aspects of this exhibition, including planning, display and publicity. In line with his plan, I made cards featuring my responses to 166 questions, and roughly half of the exhibition space was turned into a “studio” where I actually worked. During the show’s run I designed, on site, 97 business cards and seven posters, all while conversing with visitors. In this way, every day I confirmed the power of design. I would like to thank Shin Obata for his video preparation work and Tomomi Tada for her assistance with the text. Thanks to everyone involved, I was able to talk about design with many people.

Akio Okumura





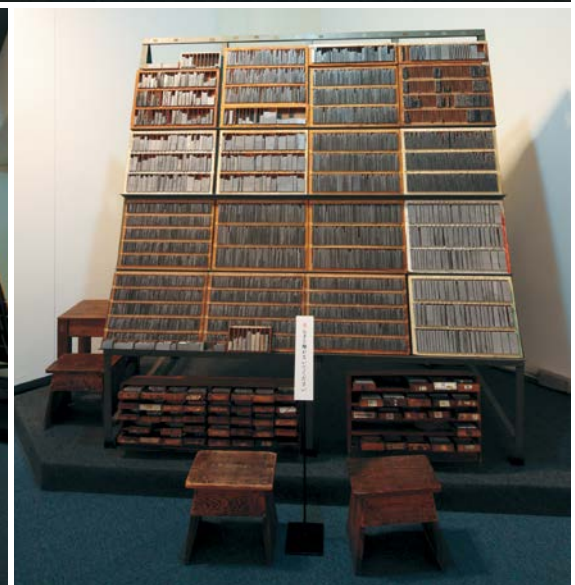
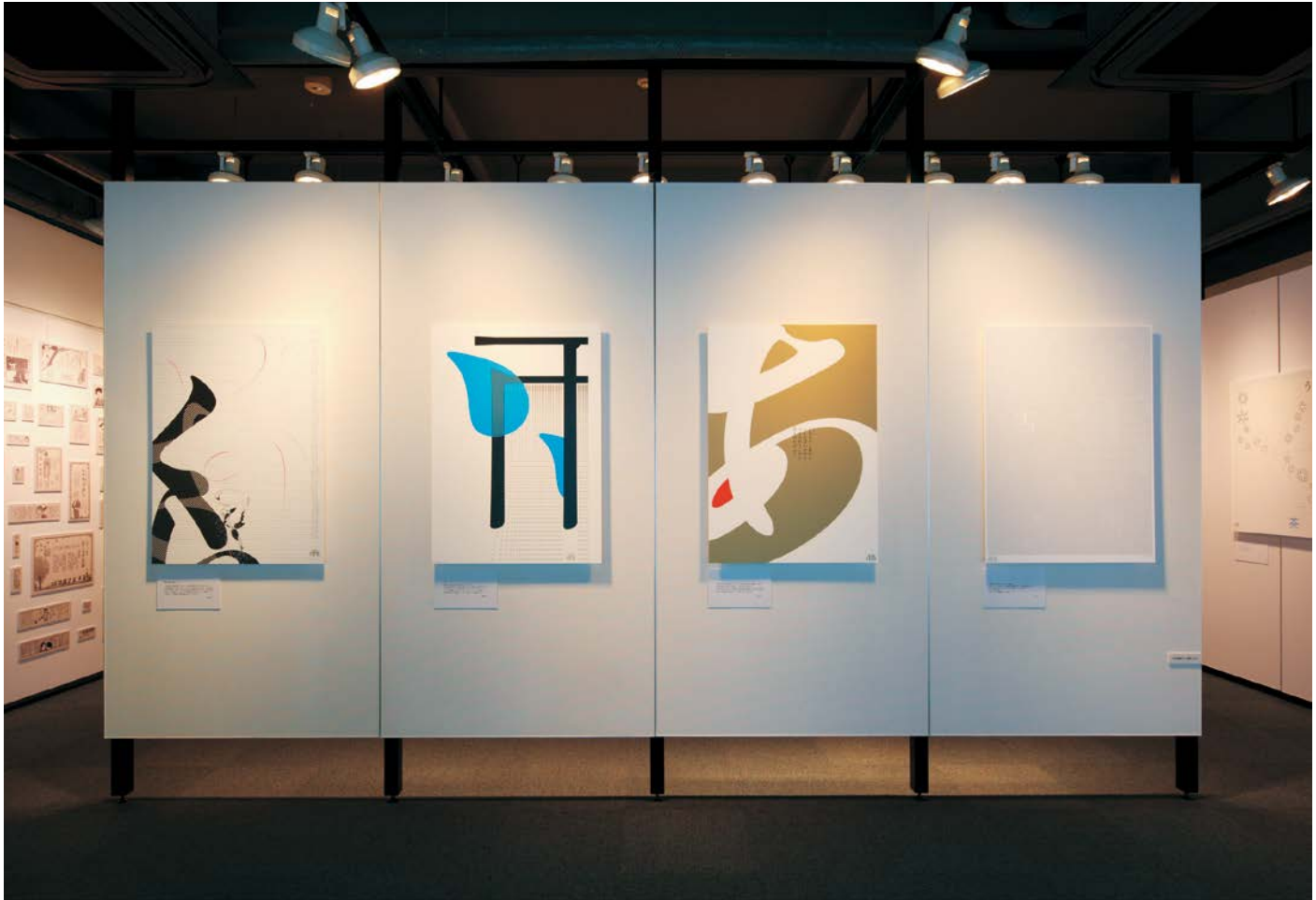




# Shueitai 100

March 22 – May 11, 2011

秀英体 100







「秀英体100」第2会場 モリサワ本社ビル1Fエントランス  
"Shueitai 100" second venue, Morisawa Head Office





# Tokyo Type Directors Club Exhibition 2011

May 20 – July 2, 2011

TDC展 2011





# Kazunari Hattori Summer 2011 in Osaka

July 13 – September 2, 2011

服部一成二十一年夏大阪





# 2011 Tokyo Art Directors Club Exhibition

September 14 – October 27, 2011

2011 ADC展

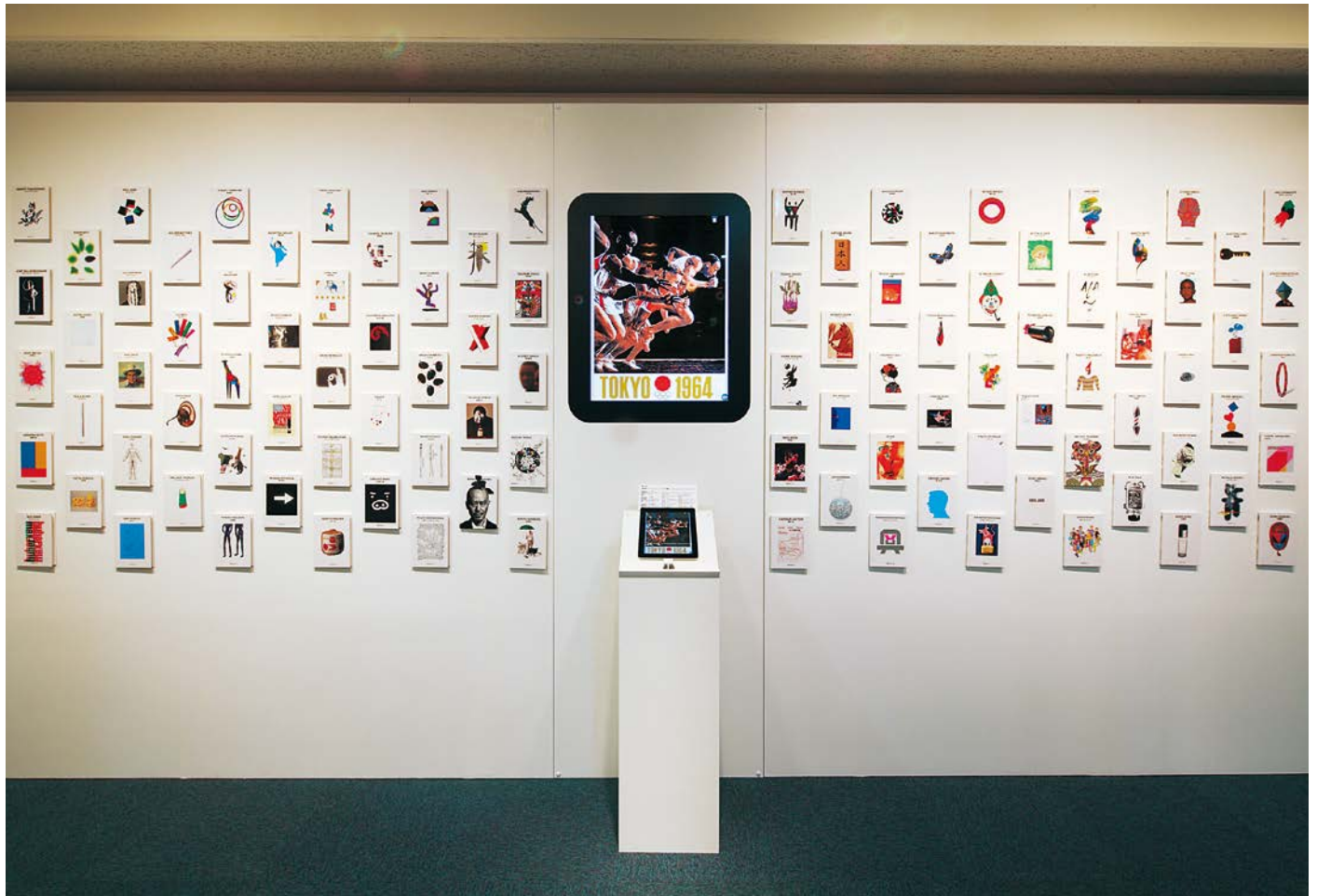




# 100 ggg Books 100 Graphic Designers

November 9 – December 21, 2011

100 ggg Books 100 Graphic Designers





**Center for Contemporary Graphic Art and Tyler Graphics Archive Collection 11**

June 11 – September 11, 2011  
Shueitai 100

September 17 – December 25, 2011  
The World of Geometric Abstraction:  
23rd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection



# Shueitai 100

June 11 – September 11, 2011

## 秀英体100

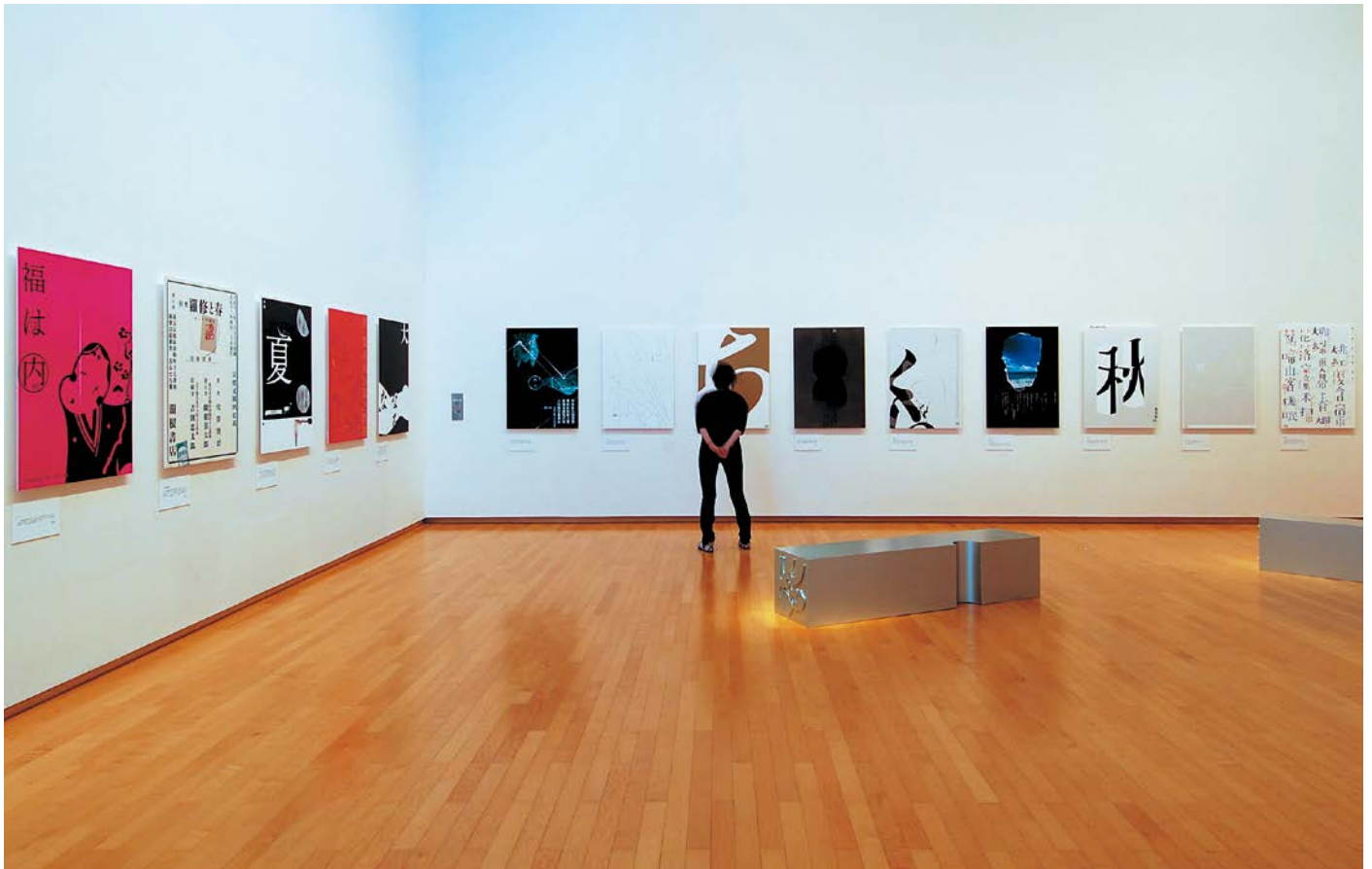


秀英体は、大日本印刷の前身である秀英舎の時代から100年以上にわたり開発が続けられている書体である。築地体とならんで「和文活字の二大潮流」と評され、現在のフォントデザインにも大きな影響を与えている。この100年、文字をめぐる環境は活版印刷からDTP、そして電子書籍へと大きく変化したが、いかに技術は変わろうとも文字はコミュニケーションの基盤であり、そのために秀英体は常に新しく生まれ変わってきた。本展は、秀英体の魅力を伝えるべく24名＋一組のグラフィックデザイナーが「四季」をテーマに作成した新作ポスターにくわえ、活字母型や書体見本帳、書籍、広告等の資料を展示し、時代とともに大きく変化してきた秀英体の100年を展望した。

Shueitai is a typeface that has been undergoing continual development for more than a century, starting from the days when Dai Nippon Printing Co. was still known as Shueisha. Along with Tsukijitai, Shueitai is considered one of the two mainstreams of Japanese type, and its influence on current font designs has been seminal. In the past century the environment surrounding the printed world has changed greatly, from letterpress to desktop publishing, and lately to e-books. But no matter how technology may change, the written word remains the basis of communication; and for this reason Shueitai has continually been reborn. To demonstrate the appeal of Shueitai, this exhibition featured poster works by 24 graphic designers and one design team on the theme of “the four seasons.” Also on display were materials including type matrices, type specimen books, books and advertisements. The exhibition thus provided an overview of how Shueitai has changed significantly in tandem with evolving times.







# The World of Geometric Abstraction: 23rd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

September 17 – December 25, 2011

幾何学的抽象の世界：タイラーグラフィックス・アーカイブコレクション展 Vol.23

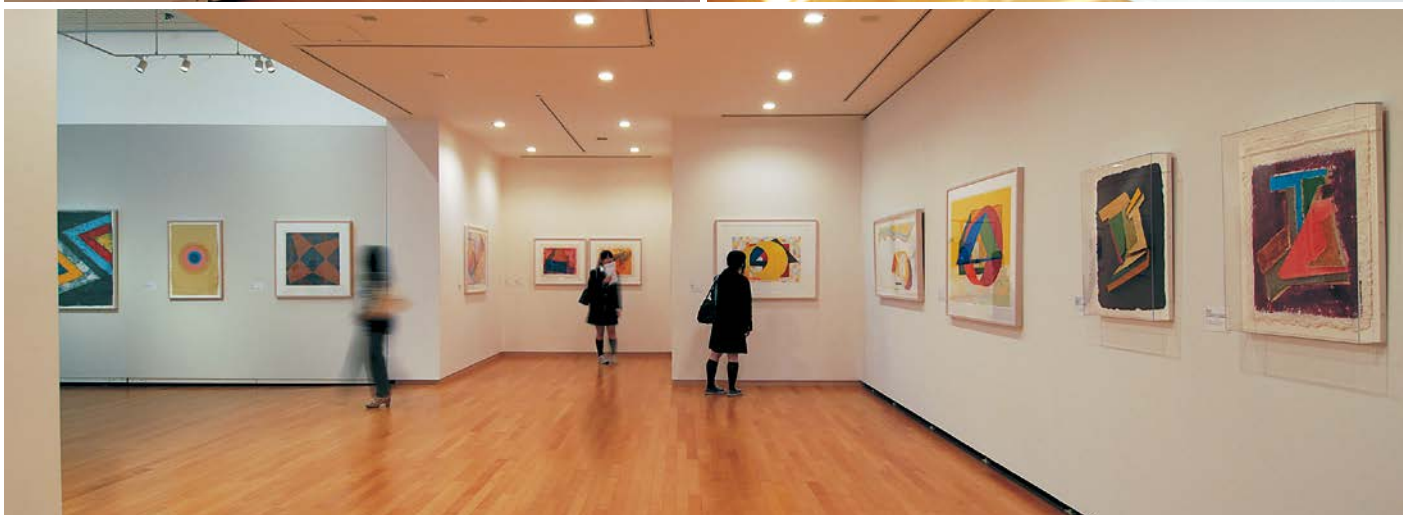


正方形や円などの単純な図形で構成される幾何学的抽象画は、20世紀初頭からさまざまな作家によって描かれ、現代絵画の世界で重要な一角を占めてきた。アメリカでは1960年代以降、多くのアーティストが版画制作に取り組むようになったが、幾何学的抽象の分野でも数々の名作が生み出されている。本展はCCGA所蔵のタイラーグラフィックス・アーカイブコレクションから、ジョセフ・アルバース、エルズワース・ケリーらによる幾何学的抽象の版画作品を展示。硬質で寡黙な印象を与えつつも、インクの質感や印刷技法の違いによって多彩で豊かな、そして雄弁ともいえる表情を見せてくれる作品を通して、幾何学的抽象と現代版画の出会いが生み出す魅力に迫った。



Early in the 20th century a wealth of artists began painting abstract works from simple geometric figures such as squares and circles, a movement that has come to occupy an important place within the realm of contemporary art. After the 1960s, many artists in the United States started delving into print production, and from this process there have emerged numerous outstanding works that incorporate geometric abstraction. This exhibition featured prints from CCGA's Tyler Graphics Archive Collection by leading exponents of geometric abstraction, including Josef Albers and Ellsworth Kelly. The works shown, while conveying a sense of stiffness and reticence, eloquently demonstrate the abundant and colorfully diverse expressions achievable through variations in ink texture and printing technique. The exhibition brought into high relief the great appeal born from the convergence of geometric abstraction and contemporary prints.









教育・普及事業

Education & Enlightenment



# ggg, ddd Gallery Talk Overviews

## ギャラリートーク概要

### TDC展 2011

出演者：渡邊良重／  
祖父江慎＋吉岡秀典（コスフィッシュ）

国内受賞者2組によるトーク。1組目はカレンダー「12 Letters」でTDC 賞受賞の渡邊良重氏。毎年魅力的なカレンダーを作り上げている渡邊氏が、一目見て渡邊良重カレンダーであるという二人が、受賞作以外にも手がける模図シリーズ「模図パーフェクション!」のブック・エディトリアルデザインを、実物を示しながら解説。造本プランから最終的な形になるまで、実現しなかったアイデアも含め、面白おかしく、しかし、いたって真面目に語り倒した。常識破りのブックデザインの真髄に触れる時間となった。



### イデオポリス東京

出演者：リタ・タラリコ／  
箭内道彦＋川村真司＋井口皓太

SVA MFA デザインプログラム「創造者／起業家（アントレプレナー）としてのデザイナー」の共同学科長の一人、リタ・タラリコ氏が展覧会のオープニングに合わせて来日、ギャラリートークを行った。同学科はもう一人の学科長スティーブン・ヘラー氏とともに15年前に設立されたが、グラフィックデザインの定義が変化してきていると感じていた当時の時代背景とニューヨークという地域の特異性の話を交えた設立意図と、プログラムの目的を、明確な言葉で説明した。続いて実際にコースを通して制作されたプロジェクトを一つ一つ解説した。また、前月に続き開催されたThe Sixとの共同企画では、箭内道彦氏、川村真司氏、井口皓太氏が、「創造者／起業家（アントレプレナー）としてのデザイナー」というテーマで小気味よい対談を展開した。どちらのトークも具体的、実践的で、若者へのエールとなる内容だった。



### 佐藤晃一ポスター

出演者：佐藤晃一＋佐藤卓

自身もデザイナーである佐藤卓氏が、「デザイナー－佐藤晃一」の魅力を引き出すという対談形式を通して、幼少時代から高校、大学へと進む過程で、デザイナーになるという確固たる信念が芽生えていった様子がつぶさに語られた。絵を描くということに対して自由な考え方を持っていた小学校時代、グラフィックデザイナーにもなりたいたけれどそれでは食べられないからあきらめたという、ちょっとませた中学時代、因数分解で数学が突然わからなくなると同時に、ランボーの詩集をくれた芸術家の先輩の影響を受けて芸大に進むことを決めた高校時代を経て、高度成長期を背景に、「車のアクセルを踏んでブーンといくあの感じ」であった世の中で、デザインの可能性を確信したという。また、佐藤晃一氏の代名詞でもあるグラデーションというスタイルが誕生したきっかけが、実は自分の欠点対策であったという興味深い話を聞くことができた。



### 杉浦康平・マンダラ発光

出演者：杉浦康平

「伝真言院両界曼荼羅」『天上のヴィーナス・地上のヴィーナス』『西藏く曼荼羅集成』だけで構成された本展。その3冊のうち日本の曼荼羅「伝真言院両界曼荼羅」と、杉浦氏が「ポッティチェルリの曼荼羅」と名づけた『天上のヴィーナス・地上のヴィーナス』について解説。密教という「二而不二」の考えを造本でいかに表現するか。本の構造自体が2つの要素で1つの思想を生かすべく計画され、同時に多でもあつと説く。さらにそのすべてが一なる曼荼羅の教え、仏教宇宙の真理を物語っている、ということとを、「一即二」「二即一」「多即一」という言葉でまとめた。一方、「ヴィーナスの誕生」と「春」を主題にしたポッティチェルリの曼荼羅。前者に描かれたヴィーナスは天界の支配者ジュピターの娘、すなわち「天の娘ヴィーナス」で、後者は春の豊穡のただ中に立つ大地の娘、「地上のヴィーナス」と呼ばれる。まさに曼荼羅のごとく、2対のヴィーナスは天と地の関係にあったのである。



### レイモン・サヴィニャック展

出演者：山下純弘（ギイ・アンティックギャラリー）＋  
北沢永志（DNP文化振興財団）

サヴィニャック作品コレクターの第一人者であるギイ・アンティックギャラリーの山下純弘氏を迎えての異色のギャラリートーク。生前のサヴィニャックに会ったことのある数少ない日本人の一人である山下氏は、サヴィニャックのことを画家、デザイナー、職人、アイデアマン、そしてビジネスマンであると評する。ユーモアとエスプリの効いた作家といわれるサヴィニャックの素晴らしさを日本語で表現するために、わびさびに喩えるというユニークさもさることながら、サヴィニャックに実際に会って会話をしているという経験に裏打ちされた作品評や制作裏話からは、パリの街並みやアトリエ、サヴィニャックが晩年に移り住んだトゥルーヴィルの港町の風景までも思い描くことができるようであった。フランスのみならず、世界中から愛されるサヴィニャックの魅力が愛溢れることばで語られた。



### 田中一光ポスター 1980-2002

出演者：伊藤弘＋佐野研二郎／  
小池一子＋原研哉

田中一光氏とは個人的には直接接点のなかった若手世代として、ブルーヴィジョンズの伊藤弘氏とMR DESIGNの佐野研二郎氏が登場。すでに確立してしまった田中一光評とは別の視点からの作品評を期待しての第1回トーク。それぞれが田中一光全作品の中からマイ・ベストテンを選び、それらの作品について彼らなりの視点で語った。意外な作品もエントリーされており、興味深い田中一光評価となった。第2回目は小池一子氏と原研哉氏という、無印良品の仕事を通じて田中氏とは深い繋がりのあるお二人。仕事と人の関係、『日本の文様』や『Japanese Coloring』を通して見る、田中氏の日本文化へのまなざしなど、じっくり話を進めた。最後に小池氏より紹介された、田中一光氏の21世紀デザインへの提言は、先見性に満ち、まさに私たちが今、直面している課題であることを改めて認識させられた。



## 2011 ADC展

出演者：佐々木宏＋森本千絵＋  
児玉裕一＋権八成裕

本年度グランプリのサントリー「歌のリレー」コマージュフィルム制作チームから、CD 佐々木宏、AD 森本千絵、FD 児玉裕一、PL 権八成裕の4氏が登壇。3.11直後に怒涛の勢いで制作され、放映に至った本作について、ADC賞への出品の是非、グランプリ受賞に対する賛否、さらには広告そのものの意義など、問題提起の多い受賞となった。ギャラリートークを通じて、このようなCMをつくることになったきっかけから実際の制作にいたる過程、制作現場の様子、クライアント、制作チーム、出演者の一体感、4氏それぞれのCMに対する思いが、真摯なことばで明かされた。日本国中の誰しもが、どうかしたいけれどどうしたらいいかわからない、そんな状況だった最中に、広告の力を信じて、一心不乱に突き進んだという、広告のプロフェッショナルたちの葛藤と達成感を窺い知る機会となった。



## ロトチェンコ ― 彗星のごとく、 ロシア・アヴァンギャルドの龍児 ―

出演者：矢萩喜俊郎

展覧会の副監修者として会場構成ほか本展全般にわたって関わっていただいた矢萩喜俊郎氏による、大学の講義のような理路整然としたトーク。デザイナー、アーティスト、彫刻家、建築家など、様々なイメージを持たれるロトチェンコ。彼は本当にいたのか？ いたとしたら何者なのか？ そしてロトチェンコは本当に死んだのか？ という観点から話を進めることで、ロトチェンコがなぜ今これほどまでに取り上げられるのかに迫った。彼が生まれ、活動した時代、それは1917年のロシア革命という、ロシアが大きく変革した時代であり、芸術が直接政治に影響を及ぼし得た時代だった。そんな時代背景の中、わずか数十年の間に勃興し衰退していったロシア・アヴァンギャルドを牽引したロトチェンコが今取り上げられる理由。それは今、失っていることがあまりにも多いことに気付かせてくれる重要人物であるから、とは矢萩氏の言葉。



## 【ジー ジー ジー ジー】 グルーヴィジョンズ展

出演者：伊藤弘＋岡本仁＋河尻亨一

「relax」や「BRUTUS」で特異な世界を編み出してきた編集者 岡本仁氏と、「広告批評」休刊前の最後の編集長で、メディアを越えた編集・キューレーションの可能性を模索する河尻亨一氏を迎え、「グルーヴィジョンズとは何か」「伊藤弘とは何者か」に迫る90分。肩書きである「編集者」や「デザイナー」「アートディレクター」という枠に収まりきらない活動をしている三者が、「relax」での突飛なアイデア満載の連載秘話、「広告批評」のアートディレクションでは、実は「箱」あるいは「パッケージ」を作っていたのだという気づき、そしてchappie誕生の真相などを語った。アウトプットされたもののあっけらかんとした抜けの良さに裏に潜む、確信犯的アイロニーが、そのまま今回の展示方法にも反映されていたことも判明。メインストリームから少しはずれたところで、時代とともに歩むグルーヴィジョンズの魅力を再確認できる対談となった。



## ネヴィル・プロディ トーク@ggg

出演者：ネヴィル・プロディ

FUSEが産声をあげたのが1990年のこと。そして翌91年の「FUSE」創刊から早20年。これまでに発行された20号分をまとめた本が出版されることを記念しての緊急ギャラリートークとなった。今あらためて、FUSEとは何だったのか、FUSEでネヴィル・プロディ氏がやりたかったことを、FUSEを代表する、あるいは特徴的な作品を数多く見せながら語った。タイポグラフィを抽象化することで言語の可能性を探るFUSEという実験場が、いかにデザイナー、タイポグラフィにとって可能性に満ちた場であったか。テクノロジー、メディア、ネットワークと、デザイナーをとりまく環境が大きく変わった現在、これまでと同様の形態で継続させるべきかどうかは疑問だが、FUSEというアイデア自体は新たな形で続いていくだろうと締めくくった。今こそリスクを顧みずに行動するべきであると、リスクを恐れずに挑戦して新しい文化をつくっていくと繰り返した。



## 工藤青石展「形と色と構造の感情」

出演者：工藤青石＋平野敬子

コミュニケーションデザイン研究所のワーキングパートナーである工藤青石氏と平野敬子氏との対談。2005年の同社設立以前から、資生堂の仕事を中心にいくつかのプロジェクトと一緒に仕事をしている両氏だが、二人そろってトークの場に出演することはなく、希少な機会となった。「形と色と構造の感情」という少し変わったタイトルにこめられた意味を語る平野氏からは、工藤氏の造形に対する感度の鋭さや、仕事に対する姿勢など、公私ともに常に最も近い立場から見つめ、支え続けてきた存在ならではの、工藤氏の仕事に対する敬意が感じられた。また、「Shiseido Professional」の仕事はフィーチャーし、それをプロジェクトの立ち上がりから追いかけることで、ものがゼロからイチになる過程——あるテーマが形になり、流通していくまでの制作プロセス——を掘り下げることで、工藤氏の目指すブランド作りの世界に迫った。



## 「奥村昭夫と仕事」展

出演者：奥村昭夫＋塚田歩＋宮崎賢二／  
奥村昭夫＋いしいしんじ

ローテ製菓の塚田歩氏と牛乳石鹸の宮崎賢二氏を迎えての第1回目のトーク。奥村昭夫氏が手がけたローテ製菓の新しいシンボルマークや、牛乳石鹸のリニューアルプロジェクトの制作過程を通して、「コンセプトではなく、そのビジュアルに対するアイデアを出すことがデザイナーとして求められている」あるいは、リニューアルに際して大事なものは「今までとあまり変わっていないけれども何か新鮮だ」というあたり、という奥村氏の信念の真意を語った。第2回目のゲストは小説家のいしいしんじ氏。まず、即興でその場所と関わりのある話を人前で書きながら読む、あるいは読みながら書く「その場小説」を披露。犬となった奥村氏を主人公に、デザインの豊かさを物語る少しシュールで温かい世界を読んだ。その後の対談では、小説家とデザイナーという職業の垣根を越えて、物事の本質を見ようとする二人の姿勢がうかがえた。



## 100 ggg Books 100 Graphic Designers

出演者：永井一正＋服部一成＋柏木博／  
佐藤達郎＋須田和博＋川上俊＋寒川裕人

ggg Books100号刊行、ggg開設25周年を記念するトーク。ggg開設、ggg Books創刊当初のことや、ギャラリーとggg Booksの成り立ちを、当時すでに第一線で活躍していた永井一正氏に語っていただき、そのころ学生だった服部一成氏がどう見ていたかを語る。そしてggg Books別冊に掲載された100組個々の代表作を見ていくことで、グラフィックデザインの転換期や、目指してきたこと、デザイナーの役割や可能性などが見えてくる対談となった。全国の美大生の総合展覧会およびその活動メンバー The Six との共同企画となったもう1本のトークでは、50代、40代、30代、20代をそれぞれ代表する4名が登壇。この25年間で大きな出来事の一つである「アナログからデジタルへの変換」をテーマに、クリエイティブにたずさわる4氏の自分史を軸に、25年を振り返った。



## 秀英体100

出演者：南部俊安＋高橋善丸＋杉崎真之助＋三木健

## TDC展2011

出演者：祖父江慎＋吉岡秀典

## 服部一成二十一年夏大阪

出演者：服部一成＋金氏徹平

## 2011 ADC展

出演者：佐々木宏

## 100 ggg Books 100 Graphic Designers

出演者：柏木博

## Tokyo Type Directors Club Exhibition 2011

**Speakers :** Yoshie Watanabe /  
Shin Sobue + Hidenori Yoshioka

Yoshie Watanabe won a TDC Prize for her calendar "12 Letters." Watanabe, who creates attractive calendars every year, demonstrates consistency enabling her calendars to be recognized at a single glance; yet she says that every year she takes pains to achieve change within that consistency. She explained the story, drawing method, printing specifications and format of each year with gentle but forceful words. Shin Sobue and Hidenori Yoshioka won a Special Prize for their book design of *My Name Is Shingo*. Besides their prize-winning work, the pair, who are both great fans of Kazuo Umezu, also spoke about their book design for the *Umezumi Perfection!* series. With great seriousness embellished by witty humor, they described their creative process from the planning stage through to the final product, including plans that were never realized. The session offered the audience an opportunity to glimpse at the very essence of unconventional book design.



## Sato Koichi Poster Exhibition

**Speakers :** Koichi Sato + Taku Satoh

A dialogue between two designers: Taku Satoh posing questions of the other, Koichi Sato. Sato spoke in detail about how his strong conviction to become a designer progressively blossomed. In primary school, he was a completely free thinker when it came to drawing things. In his somewhat precocious junior high school years, he says he longed to become a graphic designer but gave up the notion because he believed it wouldn't provide him with a sufficient livelihood. In high school, he suddenly lost interest in math when the topic turned to factoring – something he was unable to fathom; but simultaneously he made up his mind to go to Tokyo National University of Fine Arts under the influence of an older artist who gave him a collection of the poems of Arthur Rimbaud. After that, against the backdrop of Japan's period of high-paced economic growth, he became convinced of the possibilities of design. He also described how the style he is best known for, gradation, came about as a way to cope with his own shortcomings – a revelation of great interest to everyone present.



## Raymond Savignac Exhibition

**Speakers :** Sumihiro Yamashita + Eishi Kitazawa

This was an unusual gallery talk that featured Sumihiro Yamashita, president of Guy Antique Gallery and one of the foremost collectors of the works of Raymond Savignac. Yamashita is one of the few Japanese to have personally met Savignac, and he describes Savignac as an artist, a designer, an artisan, a man of ideas, and a businessman. To convey Savignac's brilliance as an artist of great humor and wit, Yamashita used unique comparisons to the Japanese concepts of wabi and sabi. And as someone who actually met and conversed with Savignac, Yamashita offered critiques of his works and little known stories behind their production – enticing tidbits that gave the audience a sense of being able to imagine the streets of Paris and Savignac's studio there, as well as the scenery of the port city, Trouville-sur-Mer, where he spent his later years. The posters created by Savignac are loved by the masses. With words filled with love, Yamashita spoke of Savignac's appeal and the reasons why he is so admired not only in France but around the world.



## Ideopolis-Tokyo Exhibition

**Speakers :** Lita Talarico / Michihiko Yanai +  
Masashi Kawamura + Kota Iguchi

Lita Talarico, co-founder and co-chair of the MFA Design Program at the School of Visual Arts in New York City, came to Japan for the opening of this exhibition and presented a talk about the designer as author and entrepreneur. The MFA Design Program was established 15 years ago together with its other co-founder, Steven Heller, and Talarico spoke in clearly defined terms about the aims in establishing the program and the program's objectives, supplemented by her perceptions of how the definition of graphic design was changing in those days and the unique setting provided by its location in New York. She then explained the individual projects that the program had produced. Another talk, following a similar one the previous month, was a joint event with The Six. Here, a lively discussion on the same theme – the designer as author and entrepreneur – was held by Michihiko Yanai, Masashi Kawamura and Kota Iguchi. Both gallery talk sessions were specific, practical and encouraging to young designers and students.



## Luminous Mandala: Book Designs of Kohei Sugiura

**Speaker :** Kohei Sugiura

Sugiura presented explanations of *Den Shingon-in Ryokai Mandala: the mandalas of the two worlds at the Kyoto Gokokuji in Kyoto*, which features Japanese mandalas, and of *Venus: Urania-Pandemos*, which he has called "Botticelli's Mandala." He said he mulled how to express a concept in Esoteric Buddhism referred to as "mini-funi" – literally, "two and not two," i.e. two sides of the same coin – in putting together his books. A book's structure itself is planned to bring to life one philosophy from two elements, and it simultaneously is many. He further stated that it bespeaks the teachings of a mandala that everything is one, the truth of the Buddhist cosmos. He next turned to "Venus: Urania-Pandemos" and "Primavera," Botticelli's mandala. Venus is the daughter of Jupiter, ruler of the heavens, while the figure depicted in "Primavera" is referred to as "Venus of the Earth" standing amidst the rich harvests of spring. The two Venuses are in a relationship of heaven vs. earth, a correspondence similar to the Mandalas of the Two Worlds.



## Ikko Tanaka Posters 1980-2002

**Speakers :** Hiroshi Ito + Kenjiro Sano /  
Kazuko Koike + Kenya Hara

The first gallery talk featured two designers of the young generation who personally had no direct contact with Ikko Tanaka: Hiroshi Ito of Groovisions and Kenjiro Sano. They were invited to participate in the hope that they would critique Tanaka's works from a perspective different from the assessments already firmly established. Ito and Sano each selected and discussed what they consider to be Tanaka's best 10 works. Some of their choices were truly surprising, and their comments about them were of great interest. The second one featured two individuals with close ties to Tanaka, through their work for Muji: Kazuko Koike and Kenya Hara. They spoke at length about the relationship between Tanaka the man and his work, and about his approach to Japanese culture as seen through his *Nihon no monyo* [Japanese Patterns] and *Japanese Coloring*. Finally, Koike introduced Tanaka's suggestions for design in the 21st century: proposals brimming with foresight and reconfirming the very issues we confront today.





## 2011 Tokyo Art Directors Club Exhibition

**Speakers :** Hiroshi Sasaki + Chie Morimoto +  
Yuichi Kodama + Naruhiro Gomba

Four members of the creative team that won this year's Grand Prize – for the singing relay featured in a Suntory commercial – participated. The award of the top prize to this work, which was created and broadcast in the immediate aftermath of the disastrous events of March 11, raised numerous controversies: concerning the propriety of whether or not it should have been entered in the ADC competition, the both positive and negative reactions to its winning the Grand Prize, and the significance of the ad itself. The members revealed how a commercial of this kind came to be made and its production process, how unified the sense of mission of the client, the production team and the featured singers had been, and how each of the four now felt toward the commercial. The talk provided an opportunity to learn of both the emotional conflict and the sense of accomplishment felt by these professional ad makers, who followed their instincts with a single mind.



## Rodchenko – Innovator of Russian Avant-Garde –

**Speaker :** Kijuro Yahagi

This gallery talk took a form akin to a university lecture by Kijuro Yahagi, who, as assistant supervisor to the exhibition, was involved in all aspects. He described how Rodchenko is perceived in various ways: as a designer, artist, sculptor, architect, etc. But did Rodchenko really exist? And if he did, just who was he? And did he truly die? Posing these questions, Yahagi attempted to invite understanding of why Rodchenko is taken up to the extent he is today. The period when he was born and active was the era of the Russian Revolution of 1917, a period when Russia changed dramatically and when the arts were able to have a direct impact on the political scene. Rodchenko became a leading force within the Russian avant-garde, a movement that, against that political backdrop, arose and declined within only a few decades. So why is there such interest in Rodchenko today? In Yahagi's view, it is because Rodchenko is a major figure who makes us realize just how much has been lost in the interim.



## gggg: Groovisions Exhibition

**Speakers :** Hiroshi Ito + Hitoshi Okamoto +  
Koichi Kawajiri

Hitoshi Okamoto – an editor who had fashioned his inimitable world in *Relax* and *Brutus* – and Koichi Kawajiri – the final editor-in-chief of *Kokokuhiho*, who continues to probe the possibilities of editing and curation transcending media – attempted to probe what Groovisions and Hiroshi Ito are all about. The three, whose activities do not fit snugly into the categories of editor, designer and art director, spoke about their serialized contributions, packed with unconventional ideas, to *Relax*; about their realization that in doing art direction for *Kokokuhiho* they had actually been creating “boxes” or “packaging”; and about how Groovisions' mascot character Chappie was actually born. It also came to light that the “premeditated” irony lurking within the nonchalant lucidity of their output had been directly reflected in the display method they employed for this exhibition. Their repartee enabled the audience to reconfirm Groovisions' appeal, slightly off the mainstream, always in step with their times.



## Neville Brody Talk @ggg

**Speaker :** Neville Brody

The Fuse project came into being in 1990. The magazine *Fuse* was launched the following year, meaning that it has already been in production for 20 years. This special talk was arranged to mark the publication of a book incorporating the content of the magazine's first 20 issues. Neville Brody spoke about what, in retrospect, *Fuse* has been and about what he wanted to accomplish with it, all the while illustrating his remarks by showing many of *Fuse*'s representative or characteristic works. It has been a base, he stated, for experimenting with the possibilities of language through the abstraction of typography – a base replete with possibilities for designers and typographers. Today the environment surrounding designers has changed greatly, in terms of technology, media and networking, and Brody concluded his remarks saying the idea behind *Fuse* itself will likely continue in a new form. He said that now is precisely the time when action should be taken without fear of risks, and he urged the audience to take up the challenge, free of such fear, and create new culture.



## Form, Color and Structure: The Sensual World of Aoshi Kudo

**Speakers :** Aoshi Kudo + Keiko Hirano

A dialogue between Aoshi Kudo and Keiko Hirano, working partners at Communication Design Laboratory. Although they have been working together since even before the establishment of CDL in 2005 – most notably, on a number of projects for Shiseido – their joint appearance at a talk session was virtually unprecedented and thus a rare occasion. Hirano spoke of the meaning imbued in the somewhat unusual exhibition title: “Form, Color and Structure: The Sensual World of Aoshi Kudo.” From her close position to Kudo in both their professional and private lives, she described his acute sensitivity to form and his posture toward work, in the process manifesting her deep respect for the work of her partner. Kudo spoke about his work for the “Shiseido Professional” brand and explained how it could be compared to a progression from zero to one: a creative process that begins with a given theme and then proceeds to gradually take shape. His comments provided the audience with insight into the realm of branding to which he aspires.



## “Okumura Akio and Works” Exhibition

**Speakers :** Akio Okumura + Ayumu Tsukada +  
Kenji Miyazaki /  
Akio Okumura + Shinji Ishii

In the first gallery talk with Ayumu Tsukada of Rohto Pharmaceutical and Kenji Miyazaki of Cow Brand Soap, Akio Okumura spoke about his beliefs, referring to his new logo created for Rohto and the project to update Cow Brand's image. He stated that what is demanded of a designer today isn't to come up with a concept, but rather to produce ideas for a given visual. The second gallery talk was with novelist Shinji Ishii. To begin, he extemporaneously demonstrated what he calls “writing a story on the spot”: creating a story, impromptu, in front of an audience, about something that has to do with the place where they are. The story he fabricated on this occasion was a tender, if somewhat surrealistic, depiction of a world rich in design – with Okumura as protagonist in the role of a dog. In the dialogue that followed, Ishii and Okumura allowed a glimpse into their commonly shared stance, transcending their professions, to always attempt to see through to the true essence of things.



## 100 ggg Books 100 Graphic Designers

**Speakers :** Kazumasa Nagai + Kazunari Hattori +  
Hiroshi Kashiwagi /  
Tatsuro Sato + Kazuhiro Suda +  
Shun Kawakami + Eugene Kankawa

Kazumasa Nagai spoke of the early years when ggg was founded and the first volume of ggg Books was published; as someone who was already a leading force in graphic design in those days, he described how the gallery and book series came about. Kazunari Hattori, who was still a student at the time, spoke of his personal reaction to those events. This session became a discussion of how, by looking at the representative works of the 100 artists featured in the special edition of ggg Books, one could see the various turning points in graphic design, what it has aimed to achieve, and the roles and possibilities of designers. A joint event with “The Six” by art college students invited four guests in their 20s, 30s, 40s or 50s, all engaging in creative pursuits, looked back over the past 25 years and discussed one of the period's biggest occurrences: the shift from analog to digital.



## Shueitai 100

**Speakers :** Toshiyasu Nanbu +  
Yoshimaru Takahashi +  
Shinnoske Sugisaki + Ken Miki

## Tokyo Type Directors Club Exhibition 2011

**Speakers :** Shin Sobue + Hidenori Yoshioka

## Kazunari Hattori Summer 2011 in Osaka

**Speakers :** Kazunari Hattori + Teppei Kaneuji

## 2011 Tokyo Art Directors Club Exhibition

**Speaker :** Hiroshi Sasaki

## 100 ggg Books 100 Graphic Designers

**Speaker :** Hiroshi Kashiwagi

# Gallery Talk

イデオポリス東京：スクール・オブ・ヴィジュアルアーツ／美術学修士課程卒業制作展

## リタ・タラリコ

リタ・タラリコ 15年前のことになりますけれども、スティーブン・ヘラーと私はグラフィックデザインの定義が変化していることに気付きました。そこで私たちは従来型の問題解決法ではなく、もっとも広い意味での起業家(Entrepreneur:アントレプレナー)を育成する指導法のほうが良いと結論づけました。残念ながらヘラーは今回ここにいません。「今日は来られなくて本当にすみません」というメッセージを預かってきております。ニューヨークはインスピレーションに事欠かない、起業の街でもあります。思いもかけないところからビジネスが生まれてくる。そういったビジネスの周りに住宅地が発展し、さらなる起業家たちが生まれてくるわけです。そのニューヨークにありますSVA(スクール・オブ・ヴィジュアルアーツ)の私どもMFA(Masters of Fine Arts:美術学修士)デザインプログラムはこの起業家活動に対応する形で生まれたものです。デザイナーが制作物やコンテンツをもっとコントロールできるようにしたかったのです。

グラフィックデザイナーは今日、他のデザイン分野とより統合された存在になってきています。そして起業家としてのデザイナーは、そういったものを創造する存在であるわけです。そのために私たちは、デザイナーが自分の境界を飛び出ることができるようなプログラムを設けました。製品づくりの基礎となる彼ら自身のストーリーを育成していくこと、そして本当の意味での起業家にさせることを目標に掲げたわけです。その卒業制作の成果がこの展覧会「イデオポリス」(IDEOPOLIS:アイデアのまち)であります。

私どものプログラムには海外からの関心も高く、通常、学生の半数は留学生です。とても国際的なミックスで、これまでに3人の日本人の学生さんを教える機会に恵まれました。3人ともとても能力の高い人たちでした。

では、デザイン起業家とは何なのでしょう？ 実はこの概念は19世紀の後半、自分たちがつくり出した本や壁紙、家具その他の製品を市場に投入するというウィリアム・モリスの活動と、そこから波及したアーツ・アンド・クラフツ運動に始まります。また、パウハウスからも、教育学的な面での影響というよりも、起業家精神の育成という意

味においてアメリカの美術学校の多くはインスピレーションを得ています。

アメリカにおきましてはチャールズとレイのイームズ夫妻が20世紀半ばに多分野横断的デザイナーとして活躍しました。アメリカのデザイン界を変えたのがこの二人です。夫妻は家具や映画を制作し、展覧会を行い、グラフィックを作成し、パッケージング、ディスプレイ、そして「ハウス・オブ・カード」(積木タイプのカード)、さらには、建築や雑誌のデザインにも携わっていました。活動は1950、60年代のことですからパソコンもなく、すべてを手作業で行っています。特にアイコン的な存在になっているプラスチック製の椅子は、椅子の世界を変えました。上に積み上げることができるようになり、ここから例えば講堂や飛行機の中の椅子などが新しく進化していったわけです。また、合板をモールディングするという手法も使われました。夫妻の作品はパウハウス由来の製品と同じように世界各国で今も流通しています。

では、どのようにしてデザイン起業家は生まれるのでしょうか。私たちの受講生は、プロジェクトを組み立てるという課題を与られます。それは、自分が情熱を持って取り組んでいることに加え、まず第一にニーズを満たすものでなければなりません。オーディエンス(エンドユーザー)とその人たちにどう届けるかも必要。そして、その製品を開発・制作し、キャンペーン活動を行う必要があります。また、学生たちは製品とキャンペーンが実際にニーズを満たすかどうか、再評価する必要があります。さらに販売戦略を考え、最終的に、その製品を実際にニーズのある人々すなわちエンドユーザーに届けなければいけません。

では、これに基づいたプロジェクトをいくつか紹介しましょう。これはデボラ・アドラーによる処方薬のボトルとラベルのデザインです。ご存知のように処方薬のボトルはたいへん小さいにもかかわらず、たくさんの情報が含まれています。混乱することがしばしば。多くの受講生がそうですが、彼女の場合にも個人的なストーリーがこの作品を生み出す背景にあります。祖母が誤って祖父の薬を飲んでしまい、危うく死にかけたという出来事がありました。彼女のデザインはクリアで、どの



ような薬をどう服用すべきかが分かりやすく、そして首のところに色ゴムのリングがついていて、家族それぞれが違う色のものを持ってくることができ。そのことで薬を間違えないことが達成されました。彼女は卒業後、このアイデアを小売業であるターゲット社に売り込みました。そして、主要なデザイン賞をたくさん受賞するなどの反響を全米で呼び、処方薬のパッケージを恒久的に変えることへと導きました。

これはアリージ・カーンというサウジアラビア出身の学生のプロジェクト。サウジアラビアにおいては、女性は運転をすることができません。彼女はこれに異をとえ、女性が運転できないことについて議論を始めたいと考え、ソーシャル・ネットワークキングのキャンペーンを始めたわけです。これによってかなりの注目を集め、いろいろなところで報道がなされました。

次はアン・ヴァン・ワグナーが競走イヌの非人道的な扱いをやめさせたいと願い、その啓蒙キャンペーンを行ったものです。イヌたちが置かれている悲惨な状況を世界の人たちに知ってもらい、最終的には過酷なレース自体をやめさせようと考えたわけです。彼女はキャンペーンに合わせていくつかの製品もつくり、その収益金の一部を、救出活動作業をしている団体に寄付しています。

プロジェクトの一部を紹介しましたが、デザイン起業家になるためには情熱が必要です。デザイン起業家は、一般的にこれはいい、あれは悪いと言われているだけの、さしたる根拠のない領域が、伝統的にデザイナーの役割とされていることに安住してはいけません。良いアイデアをもってのならば、決してあきらめないでください。

# Gallery Talk

SVA MFA Design: Ideopolis-Tokyo Exhibition

## Lita Talarico

**Lita Talarico** Fifteen years ago Steve Heller and I realized that the definition of graphic design was changing. So we decided, rather than teaching the old methods of problem solving, we would harness the skills and talents that designers have through their training and develop entrepreneurs in the broadest sense.

This is Steve Heller. He wanted me to say that he's very sorry he was unable to be here this evening.

There's no lack of entrepreneurialism in New York. In fact, there's no lack of entrepreneurialism everywhere. You can see inspiration everywhere. New York is certainly one of those entrepreneurial cities. There are small businesses that pop up where you least expect it. Around these businesses grow neighborhoods and more entrepreneurs. Our MFA Designer as Author and Entrepreneur program was in part a response to this entrepreneurial activity. We wanted to enable designers to take more control of production and content.

Graphic designers are now more integrated with other design fields. So you can see the Designer as Entrepreneur is an author of all those things. We've built an MFA program that encourages designers to push those boundaries. They develop their narratives as a basis for products and they become entrepreneurial in the real sense.

Although it varies, generally half of our students are from other countries. It is a very international mix and we have had three Japanese students in the program, all of whom were very good.

So what is and what makes a design entrepreneur? In fact, it's not a new idea. Entrepreneurship goes back to the late 19th century, starting with William Morris and his arts and crafts movement, where artisans and designers created products for the market. They did books and wallpaper and products and furniture. Also, the Bauhaus is an inspiration for us, as it is for most design schools in America. But rather than following the pedagogy, we took it as a source of entrepreneurialism. The inventions of the Bauhaus faculty and students are still in the marketplace and what began as an

exploration of how art and industry could benefit each other has evolved into a common practice.

Close to home, in America, Charles and Ray Eames were multidisciplinary designers in the mid-twentieth century who changed the landscape of design in America. The Eameses designed furniture; they produced movies, exhibitions and graphics. They were also involved in architecture and magazine design. Remember, this is in the 1950s and 60s. There are no computers. There are no cell phones. There is no Apple. All their work was done by hand, and they were totally multidisciplinary. They are famous for their chairs, including this iconic lounge chair and these plastic chairs that really changed seating. Seats became stackable, so you could have auditorium seating and airport seating. It all started from molding plywood. These chairs are still in production today. They're still being sold around the world.

Again, the question: how does one become a design entrepreneur? Students in our MFA design program have to develop a project that is not only something that they are passionate about but it must fill a need, first of all. Then it must have an audience for that need and a way to deliver it to that audience. They then have to develop the product or the campaign. They have to produce it. Then they have to assess that product or campaign to make sure that it meets the audience's need. Then comes some fine-tuning of that end product; then develop strategies to promote and sell it, and finally find a way to deliver it to the audience or end user. Here are some examples of projects created by our students. We'll start with this prescription medicine bottle and labeling system which was redesigned by Deborah Adler. As you can see, it's a small bottle with a lot of information on the label, sometimes very confusing. Deborah Adler forever changed how prescription drug packaging is designed in the United States. It started with a personal story, as most thesis projects do, when her grandmother took her grandfather's medication by mistake and almost died. As a result Deborah created a new labeling system and bottle.



She wanted to make sure that, when you open your medicine chest, you can tell what the medication is, who it's for, and how to take it. Then, after she graduated, she brought her idea to the Target corporation. They bought it, and then together she worked with an industrial designer to finish the product.

This is the bottle that they developed from her original thesis project. But it maintained the same objective of clarity on the label. It includes rubber rings around the neck of the bottle so that each member of the family could have a different color, and not mistakenly take someone else's medicine. There's an information card that's inserted in a sleeve behind the label, which keeps the information close at hand.

When the product was launched, there was a national campaign, and it won almost every major design award that year.

This next project is by Areej Kahn, a student from Saudi Arabia, where women are not allowed to drive. She didn't really like this notion and she wanted to start a conversation about this, so she created a social networking campaign to bring together a community. It generated a lot of publicity in the New York Times and on television.

The next project is called Greyhound Guardians designed by Anne Van Wagener. Anne wanted to see the inhumane treatment of these racing dogs stop, and created an awareness campaign. She wanted to educate the public about the plight of these racing dogs worldwide and she wanted to support and promote rescue efforts and ultimately seek an end to this inhumane sport. She also created products, and a certain percentage of the money that is collected for the products goes back to the rescue organizations.

In conclusion, there are many rigors involved with being a design entrepreneur. The design entrepreneur must take the leap away from the safety of the traditional designer role into the precarious territory where the public decides what works and what doesn't. Lots of people have good ideas. If you have a good idea, then don't give up.



# Gallery Talk

GRAPHIC WEST 4「奥村昭夫と仕事」展

奥村昭夫、塚田歩、宮崎賢二

**奥村昭夫** 本日は僕が仕事でかかわっているロート製薬(株)の塚田歩さんと牛乳石鹸共進社(株)の宮崎賢二さんにお越しいただいています。ロート製薬は新しいシンボルマークを僕が担当させていた

だいた。  
**塚田歩** はい、2003年からプロジェクトを立ち上げて奥村さんとお仕事させていただいて、翌04年にロゴを完成して発表しました。当時社内で新しい社をつくらうというプロジェクトがありました。弊社は目薬とか胃腸薬とかメンソレータムを持っている会社なのですが、当時からスキンケアの化粧品が伸びていて、売上の中心の比重が変わっていくタイミングでした。創業以来の社是として「和協努力」というカチッとした四字熟語があったのですけれども、社員発で新しい社をつくるプロジェクトの公募があった。面白いなと思って手を挙げたところ、「じゃあ、リーダーをやれ」みたいなことになった。社内ですべての検討を済まして、「よろこびっくり誓約会社」という製薬会社らしくらめ、ちょっと駄じゃれっぽい言葉をまず決めました。次はその言葉を表現した新しい会社のロゴマークをつくらうということになったんです。

実は私はそれまで奥村さんを知りませんでした。同僚が奥村さんのセミナーがあるというので一緒に付いていったのが始まりです。お話を聞いて僕は良い意味でショックを受けました。そのときのノートに赤字で書いているのが、「コンセプトではなくて、そのビジュアルに対するアイデアを出すということがデザイナーとして求められている」というメッセージ。確かに僕はそれまでに「コンセプトはいいのだけれども、デザインがこれなの？」みたいなギャップを感じたことがあって、「ああ、この方は非常にいいことをおっしゃるな」と。興奮した勢いで押しかけて、「会社のロゴを変えないといけない。予算もないんですけども、やってもらえませんか」とお願いしたのが最初でした。その時は、実はけんもほろろに断られて。奥村

いえ、丁寧にお断りしたと思います(笑)。  
**塚田** 翌日も連続して奥村さんのセミナーがありました。そのとき、江崎グリコさんのロゴも奥村さんはデザインされていますが、そのお話があった。たくさん案をつくったけれども、結局最後の

最後で「Glico」という手書したものをスキャナーに取り込んで拡大したらそれが一番良かった、と。それを聞いてまた感動して、その日も押しかけたんです。

**奥村** ですから、仕事というのは1回断ってみるものですよね。ちょっとやりたそうな顔だけ残しておく、と、また来ていただける(笑)。

**塚田** それで4社によるコンペにさせていただいたんですが、多い社で20点ぐらいのプレゼンがあるなかで、奥村さんは2点しか持ってこれなかった。

**奥村** いやいや、それは「ビックリ」ものですよ(笑)。それで2週間後ぐらいに「決まりませんでした」という電話をもらったんです。

**塚田** 社内で検討したのですが「やはりロートらしさが無い」ということになりました。

**奥村** それを聞いて「もう一度チャンスがある」と思いましたね。そこで最初に出したマークの下に線を引いたのです。「安心感とか伝統とはこういうものだ」と。電話で「もうできました」と伝えたら、「冗談言わないでくださいよ」と怒られたのを覚えています(笑)。もうひとつディテールにちょっと工夫を加えています。丸が正円ではなく、平体をかけている。そのことで伸びようとする若々しいロート製薬のイメージを表現しました。「最初のアイデアが重要で、ディテールはあとでいい」というのはこういうことなのです。僕は2回目ではこの1案出しましたが、幸い採用されるわけです。  
**塚田** そのロゴを踏まえたVI(ヴィジュアル・アイデンティティ)のマニュアルも奥村さんにデザインしてもらいましたが、ガチガチに決めるのではなく、柔軟な対応ができるシンプルなもの。僕にとっても実に楽しい仕事でした。

**奥村** 牛乳石鹸さんの赤箱をリニューアルさせてもらったのはいつでしたっけ？

**宮崎賢二** 1994年ですね。ですからもう18年たちますが現在もよく売れ続けております。

奥村さんに初めてお会いしたのは、男性用のシャンプーのデザインをお願いしたときなのですが、そのときに奥村さんが「牛乳石鹸さんには赤箱、青箱という商品がありますよね。赤いあの色、それに牛がいてその左にCOWと入っている。そのバランスも申し分ない」と褒めてくださった。



そのときはシャンプーのデザインをもちろん仕上げていただき、発売しました。ところがそのあと奥村さんから「実はプレゼンしたいことがある。赤箱のリニューアルですが……」ということでした。「なんだ、言うてることと違うやん」と(笑)。

**奥村** 単に赤箱のデザインをすることだけではなく、企業ブランドの確立ということを考えてリニューアルしたらどうかと提案したんですね。COWと牛を中心の上下に置いて、乳が流れている古いパターンをいっぽう下に持ってきたのも「ミルク成分がある」という製品特性をもう一度確認することで、良いイメージをきちんと伝達する目的からでした。

**宮崎** そうですね。それまでの生々しくてリアルだった牛を、良い意味で軽いイメージに仕上げていただいています。姉妹ブランドの液体ボディソープのポスターと新聞広告もつくっていただきましたが、このときは「母は牛乳石鹸です。」というキャッチコピーが大きく入っています。歴史あるわが社の製品の特徴を表した印象的なもので私も感動しました。

**奥村** 言葉は重要ですね。言葉を探すのがアイデアだし、その言葉が決まれば自然にデザインができると思っています。あと、リニューアルで重要なのは「今までとあまり変わっていないけれども何か新鮮だ」というあたりですね。良いものは継承して、要らないものは削る。そして、そこに新しくプラスするものは何かを考えるということですね。  
**塚田** そうですね。デザインは課題を解決できて、なおかつシンプルなものが一番だと思います。

**奥村** 今回「奥村昭夫と仕事」展としたのも、「僕がつくった」では意味がないからです。企業なり商品なりの情報を正確に伝達できていることがデザインの仕事だと思っています。

# Gallery Talk

GRAPHIC WEST 4 “Okumura Akio and Works” Exhibition

## Akio Okumura, Ayumu Tsukada, Kenji Miyazaki



**Akio Okumura** Today I am joined by two people from companies I have designed for: Mr. Ayumu Tsukada of Rohto Pharmaceutical Company and Mr. Kenji Miyazaki of Cow Brand Soap. First, for Rohto Pharmaceutical, I was responsible for designing the company's new logo.

**Ayumu Tsukada** We launched the project in 2003, working with Mr. Okumura, and the new logo was unveiled the following year. In those days Rohto was looking to create a new corporate slogan for itself. Our main product lines had long been eye drops, digestive medicines and Metholatum products, but we were also marking sales growth in skincare cosmetics and we expected this segment to eventually become a core sales driver. Ever since the company's founding, the company slogan had been a somewhat stuffy four-character compound: *wakyo-doryoku*, meaning “harmonious and cooperative effort.” The newly launched project was aimed at choosing a new slogan that would come from our own employees. The whole concept sounded interesting to me, and I found myself volunteering to take part. Then I was asked to serve as project leader. We took many suggestions under consideration and ultimately selected a play on words in Japanese and its near equivalent in English: “Happy Surprise.” As you can see, it's not the kind of slogan you would expect from a pharmaceuticals company. Once we'd decided on the new slogan, our next step was to create a new logomark befitting the new slogan. Quite frankly, at the time I didn't know anything about Mr. Okumura. One of my colleagues mentioned that he would be holding a seminar, so I decided to go along.

Hearing him speak that day came as quite a shock to me – in a positive way of course. In the notes I took at the seminar I wrote down, in red, something that especially struck me in what he said. He said that a designer is called on to come up not with a concept but with an idea for the visual to express a given concept. On many occasions I had often come across examples where I admired the underlying concept but puzzled over the design used to express it. There always seemed to be a gap between the two. So hearing what Mr. Okumura said that day, I thought, “Now here's someone who's got it just right.” And very excitedly I ran up to him and made my request. “My company's in need of a new logo,” I burst out. “We don't have a big budget, but would you be willing to do it?” His answer was a brusque

“No.” That was our first encounter.

**Okumura** Oh, c'mon. I think I turned you down quite politely. (laughter)

**Tsukada** You were giving another seminar the next day, and there you talked about how you had created the logo design for Ezaki Glico. I remember you saying that you had worked up any number of proposals, but then in the end, as your very last idea, you took the word “Glico,” handwritten, and scanned and enlarged it, and that, you said, was the best of all your suggestions. And as I listened to you describe how this all came to pass, again I became quite moved – and when you were finished that day, again I rushed up to talk to you.

**Okumura** Well, you see, with every job offer, it's always good to say no the first time. So long as you leave the impression that you might be interested, the person will usually come back again. (laughter)

**Tsukada** Ultimately we had four companies compete for the job, and while some presented as many as 20 proposals, you came with only two.

**Okumura** Talk about “surprises”! (laughter) About two weeks later I received a phone call saying that no decision had been made yet.

**Tsukada** We considered your proposal, but people felt it wasn't appropriate for a company like Rohto.

**Okumura** When I heard that, I thought I still had one more chance. So I took the logo I'd originally submitted and added a line underneath it. “That gives it a sense of assurance, a nuance of tradition,” I told myself. Then I immediately phoned you and told you my new proposal was already finished. I remember you getting angry. “Stop joking with me,” you said. (laughter)

Actually, I also made one other modification in the details. Instead of perfectly round circles, I made them a bit wider in the horizontal direction, sort of squat, by which I meant to express the image of an energetic company that was poised to grow. What's always most important in coming up with a design is the initial idea; the details can be worked out later. For my second presentation, I submitted only this one proposal. Fortunately, it's the one that got chosen.

**Tsukada** We also asked Mr. Okumura to design the visual identity manual to go with the new logo. The design you came up with was simple, a design allowing for flexibility rather than strict rigidity. For me, the whole experience turned out to be quite enjoyable.

**Okumura** When was it that I was asked to update the red box for Cow Brand's beauty soap?

**Kenji Miyazaki** That was back in 1994. Eighteen years have passed since then, and it's still selling well. The first time I met you was when we asked you to design the packaging for a men's shampoo. I remember your commenting on our red and blue box packaging for our soap. You were very complimentary. “The red color, the illustration of a cow, and the word ‘COW’ set off to its left – the balance is perfect,” you said.

At any rate, you went on and completed the package design for the shampoo, and we put it on the market. Then not long after that, you contacted me and said you wanted to make a presentation – about changing our red box soap packaging. “Isn't this the guy who just complimented on how ‘perfect’ our packaging was?” I peevish. (laughter)

**Okumura** What I proposed wasn't just simply changing the design of the red box but of updating it in such a way that it would establish Cow's corporate brand. I suggested putting the English word ‘COW’ at top center, the picture of the cow below it, and the earlier pattern of flowing milk below that. By reaffirming what makes this product different – its milk content – I aimed to convey a positive image.

**Miyazaki** Up until then, the picture of the cow had been very realistic and lifelike, and you lightened up that image, in a positive sense. We also asked you to create posters and newspaper ads for our liquid body soap brand. They prominently featured the catchcopy “Haha wa gyunyu-sekken desu”: “Cow Soap is my mother.” I was quite moved by it, for the impressive way it expressed what differentiates our company, with its long history, from others.

**Okumura** Words are important. Searching for the right words means coming up with ideas; and once you've hit upon just the right wording, the design comes to you almost automatically, I think. In the case of updating an existing package, what's important is injecting something new but without changing what has come before too much. You keep what's good and trim off what's unnecessary. And you mull what new element would be best added.

**Tsukada** I agree. The best design is one that resolves the issue at hand – and is simple as well.

**Okumura** The reason I chose the title of this exhibition – “Okumura Akio and Works” – was because it would be meaningless if I had said “works made by me.” To my thinking, the job of a designer is to convey information, accurately, about a company or product.

# Gallery Talk

ネヴィル・プロディ トーク@ggg

## ネヴィル・プロディ



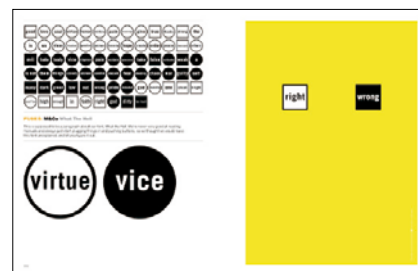
1

くといったエモーショナルな変化が生まれるということ。

毎号違ったテーマがあって、8号に関しては宗教でした。この最初のは「信仰の喪失」(図1)という名の書体です。タイプすると自分がタイプしたものではないアルファベットが出現してくるというものです。3番目のものは、どのキーボードを押しても“g”しか出てこないというものです。こちらは大文字を打つと全部いい言葉が出てきて、小文字で打つとすべて悪いことばが出てくるというものです(図2)。つまり、このキーボードがひとつの楽器のような役割を果たしているわけです。ジャズのような感じにもとれるかもしれません。つまり、楽器の演奏法を学び、楽譜を学び、そして即興演奏ができるという意味でジャズっぽい感覚に通じます。

『FUSE』10号においてはアルファベット自体の形は一切忘れて、抽象的な形のみにフォーカスしています。「フリーフォームのタイポグラフィ」とわれわれは名付けました。文字はこういう形の羅列となります。カーニング設定がコントロール不可能というか、レタースペースがランダムに打ち込まれるので、これも音楽的な仕上がりになっています。これは私の作品です。新聞から切り取った物語をキーボードに当てており、アメリカの作家ウィリアム・バロウズからの影響が強いものです。バロウズがテキストをつくる時にとった“カット・アップ”という手法、既存のある文章をランダムに切ってそれをつなぎ合わせて構成するという偶然性のある手法から格別の啓示を受けています。これはジェイソン・ブライリーの作品(図3)で非常に重要なものだと思っています。彼の母親の手書きの文字をベースにタイポグラフィをつくりました。お母さんは多発性硬化症(MS)で、これは彼女が一番上手に書いた文字。彼女は自分の息子のために、世の中に対して自分の思いが伝わるようにライティングしたわけです。

ここ数年、私は教育に非常に興味を持って積極的にかかわっています。というのは、RCA(ロイヤル・カレッジ・オブ・アート)のデザイン学部長を今務めているのです。RCAというところはまことにおもしろいのですが、研究所を内部に設置して、より実験的な作品研究ができるようにしたい



2

と思っています。そのために異業種とのコラボレーションを奨励していき、コミュニケーションデザインを専門にやっている人間が、たとえば生命科学の研究者と協働してプロジェクトを進めるようなクロスボーダー的な研究をたくさんしていきたいと思っています。

ところで最近のデザイナーにはアンチ・デジタルのような傾向が強くなります。ハンドメイドでアマチュア的なプライベートなものを1冊つくり、ガラスケースに入れて楽しんでいるような感覚です。デジタルデザインをクリエイティブなものとは思わないのです。だからデジタルを拒み、量産デザインを拒み、クラフトに戻ろうとするのです。そういう傾向もたしかにありますが、このRCAの異業種間コラボレーションのように、現在は非常にエキサイティングな時期だと思います。

さて、FUSEの役割は言語の冒険であり、言語の可能性を開くことにありました。ですから私は当然ラディカルな作品もつくりませんが、私自身の中には非常にピュアなモダニストとしての姿勢も兼ね備えているつもりです。ショックを受ける方がいるかもしれませんが、私は非常に伝統的で古風なタイプの人間なのです。

デザイナーは時として前面に出る必要のあるときもあるし、また別の場合はデザイナー自身の存在をアピールしないほうがいいときもあります。私が学生のときは、デザイナーは前面に出るものではないと教わりましたが、それに納得できませんでした。時と場合に応じて臨機応変に対応できるようなスタンスが健康的なのではないでしょうか。プロとしてきっちりと問題を解決しなければいけないことがあるということです。

昨今、銀行への信認が揺らいで国際的な金融システムが破綻するなど、われわれが確かであろうと信じていたさまざまなシステムが崩壊してきています。もう一度、何が本当に必要なのか、正しいのかを考えなければいけない。私は今こそ大きな危険を顧みずに行動し、挑戦する必要性を強く感じています。ここにいる皆さんにも、リスクを恐れずに挑戦して人間性を高め、新しい文化をつくってもらいたい。一緒に戦っていきましょう。この状況下にある現時点での可能性を有効に活用すべきです。



# Gallery Talk

Neville Brody Talk@ggg

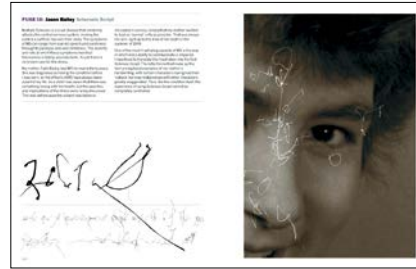
## Neville Brody

**Neville Brody** Coming from doing punk record covers to the Times newspaper was a big shock. My mom was really proud of me. The project was huge. We had to redesign the newspaper. The brief was to redesign the newspaper so that no one would notice. So we completely started again and rebuilt everything from the beginning. We changed about 300 things in the whole paper.

I brought a lot of *FUSE* pages to show you, because I think it's quite shocking how modern it feels now, even though it's twenty years old. It's really interesting to look at the *FUSE* stuff again, because we started it in 1990, 22 years ago. The *FUSE* book is being published next month. I think *FUSE* in the future will be something else. It will explore language, but in a different space. But *FUSE* as an idea will continue. *FUSE* is a laboratory for experimenting. We've done twenty issues of *FUSE*, and for each issue we invited four designers to create an experimental typeface around a theme. We liked the idea that we could now have abstract form in typographic language. See, typography or language is a contract between two parties. We agree that certain elements, when we put them together in a certain way, mean something. So maybe you don't need 26 characters. Maybe you need 10 or maybe you need many thousands. So this is a space for experimentation. *FUSE* was like a laboratory.

Abstraction was really important for us. How could typography say something more than just the words? This is Rick Vermeulen. His whole alphabet is based on Morse code. Every typeface tells you what to think about the word before you've even understood what the word is. It manipulates your thinking. The way it says "Coca Cola," the way it's designed, is supposed to give you an emotional response that you recognize before you even read it.

Each issue had a different theme. For *FUSE* 8, the theme was religion. The top typeface was called "Loss of Faith" (fig.1), which means when you type a letter you got a different letter on the screen. The third one down, every letter you type was a "g". It didn't matter. It was a comment about obedience and religion. This type-



3

face from Tibor Kalman (fig.2), each uppercase letter was a good word and every lowercase letter was a bad word. So now we're moving beyond the idea of typing letters. We're now thinking that the keyboard is like a musical instrument. The way you can use this is like a performance or like an artist using a paintbrush. It becomes more like playing jazz, where you learn the instrument and you learn the notes and then you improvise.

With *FUSE* 10, we decided to get rid of letter-form completely and just have abstract shapes. We called this "freeform typography." The letters would look like this. The kerning and letter space sometimes was negative. So you would type one letter and the next letter would appear before. The way the space worked, as you typed, letters would be in different places. It had a very musical feeling.

I did this typeface by cutting out pieces of stories in newspapers. I was very influenced by William Burroughs. You know Burroughs' cut-up technique?

This one, I think, is probably the most important one. This was by Jason Bailey (fig.3). The writing is from his mother. She had MS, multiple sclerosis, a degenerative disease. This was her best attempt to write. She wanted to show the world how she felt by showing how she could write.

And I just want to say that, I've got really involved in education recently. I'm heading the visual communication space at the Royal College of Art now. The Royal College is interesting because we want to make a new big laboratory there for experimenting with language and technology and engineering. So we want, for instance, communication designers to work with bioengineering and nanotechnology and light-smart materials.

A lot of designers reject digital completely. They want to make books. But not many books. They want to make one book. They want the book to be gold embossed, hand-bound, in a glass box, letterpress. They don't think of digital design as a creative space now. So they reject digital and they reject mass design and they want to craft again.



Everyone is working across disciplines. You have product designers working with communication designers. They work with scientists and engineers who are working with philosophers who work with furniture makers. Everything is crossing now. I mean, I think it's a really exciting time. It's amazing. Even at the Royal College, now, we're going to build an RCA lab that will be completely cross-discipline.

*FUSE* was to explore new languages. So we make very radical posters but I'm actually a very traditional designer. I'm a modernist. Modernists were very radical but very pure, in a way. I'm a traditionalist. It's a shock, but it's true.

Sometimes a designer has to be very visible. Sometimes a designer has to be invisible. When I was in college, they were teaching that designers should be invisible, which I hated. But now, you know, I think it's a very wide spectrum, which is healthy. The thing is, we are graphic designers and graphic artists. We have a professional service. We're not just painters in a gallery, so sometimes we have to be really professional and choose the right solution. Sometimes we have to be problem solvers.

I think now is an interesting time because I think everything we believed in, like the banking system, collapsed. So then we have to think where is meaning? Where is creativity? I think now is the time to take big risks again, to really experiment and challenge ideas. Be dangerous with your ideas again. Be human again. Take risks. Be courageous. Let's build a new culture. We have to take this opportunity right now.



# Gallery Talk

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ：田中一光ポスター 1980-2002

伊藤 弘、佐野 研二郎／  
小池 一子、原 研哉

**佐野 研二郎** 僕がJAGDAの新人賞を取ったのが2002年ですけど、その年に田中さんがお亡くなりになった。だからまったくお会いしたこともなかったのです。お仕事を最初に見たのは美術の教科書で、UCLAの「Nihon Buyo」のポスターでした。こういう道もあるのかみたいなことで、すぐにではないけれど今に至るきっかけになったところはあります。

**伊藤 弘** 僕もそうです。たぶん中学の教科書で日本のグラフィックデザインの名作みたいなものの中に一光さんのポスターがあった。中学生だとやはりまだ、グラフィックデザインというよりもイラストレーションのほうが引くかかる。それでもいろいろ知識がついてくるにつれ、だんだんグラフィックデザインそのものや、一光さんのデザインに興味を持つようになりました。

**佐野** まとまった展示を見て、無印良品やロフトのロゴも一光さんがつくっていたのかと初めて気づく若い人も多いと思う。知らず知らずのうちに田中一光体験をしている。

**伊藤** そうですね。僕はセゾンカード。初めて持ったカードで今でも使っているんです。そのセゾングループのクリエイティブディレクター的な役割ってとても影響力が大きかったと思います。1990年ぐらいにロンドンにいる友達のデザイナーのところに遊びに行ったら、なぜかみんなコム・デ・ギャルソンを着て、無印の製品を使っていた。MUJIは新しい時代のある種日本的なミニマリズムの象徴としてとらえられていたようです。そうした意味でも一光さんは日本の新しいスタイルを世界に発信していたんだと思っています。

**佐野** しかも実に幅広い仕事をしながら、料理が好きだったということもあって、鮮度が落ちないうちにつくってしまうスピード感があることに引かれます。

**伊藤** サカサカッと仕上げる。その抜けのよさというのは僕らもグラフィックデザインの仕事でいつも心がけている大事なことですよね。あと、一光さんの時代だとやはりほぼ版下作業。いろいろな紙焼きとかフィルムとかを手で動かしながら版下を作っていた。逆に僕らはほぼデータ。AdobeのIllustratorで、全体のコンポジションというよりは、部品を置きながらつくっていくということ

ろがある。でも、会場の映像を見て思ったのだけれど、一光さんのやり方は、オブジェクト同士の関係性を探りながら絵をつくっている感じがして、時代は違うけれどもデジタル的な処理とちょっと似ているところがあると思いました。

一光さんは奈良出身、京都で学んで、日本の伝統文化を意識しながらそれをモダンデザインと融合させている。でも佐野さんにしても僕にしても、日本の伝統的な何かにアプローチするときにちょっと足元が覚束ないところがあると思うんですけど。何かうまいコンタクトが握めればいいのだけれど。  
**佐野** そう。無理をやると、ちょっと唾っぽくなる。普段つくっているものは、意外とそれまでの人生で経験したものが出ているということですね。

ここで僭越ですが、一光さんの作品ベスト10を僕と伊藤さんがそれぞれ独断で選ばせていただきましたので見てください。先ほど触れた「Nihon Buyo」は僕にとってのナンバーワンですが、ほかに僕が選んだひとつであるモリサワの「Street」は現物も見ると、とても強いと思いました。シンプルですが、まさに漢字の偏の“しん”が道のようにになっている。一光さんの作品をひと通り見てみると、フラットに、造形的に見られるところが面白い。モンドリアンなどに通じる軽やかさもある。そこが新鮮ですね。

**伊藤** 僕のベスト10は「Nihon Buyo」もそうですが、佐野さんと結構ダブっています。たとえばこれは展示にはない『流行通信』というファッション雑誌のロゴタイプです。こういうロゴタイプなどをつくるときにひとつひとつ漢字を設計してつくっていったものがたくさん集まって、それがひとつの書体に発展していった。モリサワから出た「光朝」という書体です。アルファベットの「ボドニー」をモデルにしているようですが、デザイナーがつくった書体が生まれ、しかも長く使われ続けるというのはほんとうにすばらしいことだと思います。

**佐野** 展覧会を見て思ったのは、メディアはどんどん広がっていますが、「やっぱりポスターっていいんだ」と。本当に機能するものをつくれればポスターそのものの価値はすごい。

**伊藤** グラフィックデザインの力というのは今でも変わらずにあるんですね。そういういろいろなこ



とを一光さんは気づかせてくれたんだと思います。

**小池 一子** 原さんと私がこのように一緒にお仕事ができるようになったのは、田中さんと私が始めた無印良品のアートディレクターを、今後どなたに託したらよいかと田中さんの青山の事務所でお話していたときに、原さんをお願いしようと意見が一致したのが始まりです。その場ですぐに田中さんは原さんに電話をかけたのです。

**原 研哉** 僕は世代も違うのであまり田中さんご本人と話をしたことがなかった。田中さんから急に電話がかかってきたときはびっくりしました。小池さんとふたりで銀座にいらした。その場では答えられなくて一晩考え、「World MUJI」という着眼を持つことで未来を構想できるかもしれないと、ファクスでお返事をしたのです。

**小池** そうです。2001年の夏のことでしたね。

**原** 当時の無印良品はあまりしっかりしたポスターをつくっていないから、僕にそのあたりから手をつけてほしいというようなお話でした。来年になると僕は時間ができるから、それからゆっくりお手伝いさせてくださいということになったんです。無印良品は製品数が増えてくると「NO DESIGN」だけではすまないと考え、プロダクツを強化するには、深澤直人さんが適任だと思ってご推薦し、その深澤さんを紹介するために年明けの1月9日に青山のオフィスにうかがったんです。亡くなられたのが翌10日でした。

**小池** 仕事と人の関係というのは本当に劇的なものがあります。私も田中さんが原さん、その原さんが深澤さんを連れてきてくださって、ワクワクしながら時間が経過しています。

私の場合は、アートディレクターの堀内誠一さんの秘書の仕事に就いていろいろ学んだ後、印刷インキ工業会に移ってその新しい印刷メディアづくりにあたり、アメリカ帰りの田中さんにお会いしたのが最初。好奇心が似ていて、たくさんのことを教わりました。

そして田中さんは66年から『日本の文様』全4巻という本づくりに没頭します。アノニマスな植物図絵や花鳥風月などの図版の掘り起しを吉田光邦さんとともにされて、地味だけれど見事な本に構成しました。田中さんが日本のビジュアルな伝統



# Gallery Talk

DNP Graphic Design Archives Collection IV: Ikko Tanaka Posters 1980-2002

Hiroshi Ito, Kenjiro Sano /  
Kazuko Koike, Kenya Hara

世界に見出した真髄が網羅されていると思います。

原 DICの色見本帳『日本の伝統色』は小池さんも関与されているかもしれませんが、すごい仕事だと思います。色の世界を全部言葉に置き換えた。梶子(くちなし)とか鉄錆、灰白、灰桜…。単なるマンセルとオストワルトの表色系を並べた色票とはまったく違う本当にポエティックなものだと思います。この仕事を僕はすごく尊敬しています。

小池 ついで80年代初めに『Japanese Coloring (日本の色彩)』という本と一緒につくったのです。アムステルダムのJapan dayに合わせた展覧会企画でスタートしたのですが、私たちは本づくりも是非したかった。田中さんは「キュレーションと編集は似ているよね」と。これは大事な言葉です。また吉田さんがブレーンに入ってくださったのですが、日本の色彩に対する田中さんの目の行方は私にはとても勉強になりました。

原 田中さんはそうにオランダやアメリカといった国で日本文化を紹介する展覧会をすると同時に、海外の素晴らしさを堪能されている。日本を再発見するのはまさにそういう機会ではなかったかと思います。外国に行ってモダニズムの洗練を目のあたりにする時に、自分の尾てい骨のあたりにある日本を再確認する。田中さんはそういう風に日本と出会われたのではないかな。今のデザイナーもそのような姿勢は継承していきたいと思っています。

小池 田中さんは21世紀ということをしごく考えていたのに2002年の正月に亡くなってしまいます。でも「私の21世紀」というみごとな文章を残されている。

「……これからは傷ついた地球の再生を考えるデザイン、非西欧文明の再認識、コンチネンタルスタイルからの脱出、快適追求の後退、きれいでない国際交流、地球人認識から発生するさまざまな思想の衝突、新品のツルツルピカピカでない美意識の復興、それらが21世紀デザインの最大の課題ではないかと思う」。

最後の部分を読みましたが、今日の課題を見事に整理してくださっているんです。

原 先見性に満ちた言葉です。ここにいらしている皆さんにはこの言葉をお土産に帰っていただくのが僕は一番いいと思います。

Kenjiro Sano 2002, the year Mr. Tanaka died, is the year I received the JAGDA New Designer Award, so I never met him at all. The first time I saw his work was in an art textbook: his “Nihon Buyo” poster for UCLA. It made me aware that here was a path I could perhaps follow, and – not immediately but some time later – it was partly behind the path I’ve taken until now.

Hiroshi Ito It’s the same with me. In a school textbook – junior high school, I think – there was an introduction to famous works of Japanese graphic design, and Ikko’s poster was among them. When you’re in junior high school, you’re more attracted to illustration than to graphic design. But as I came to know more and more, gradually I got interests in graphic design and Ikko’s designs.

Sano I think that for many young people, it’s only when they see a comprehensive exhibition of his works that they realize that logos for MUJI and Loft were also made by Ikko. Without their knowing it, they’ve become familiar with the works of Ikko Tanaka.

Ito You’re right. In my case it was Saison Card. It was my very first credit card, and I’m still using it even now. That he served as creative director for the Saison Group had a great influence. Around 1990 I went to visit a designer friend who was living in London, and everybody wore *Commes des Garçons* and was using MUJI products. MUJI seemed to be thought to represent a kind of Japanese minimalism of a new era. So, I think Ikko launched a new Japanese style to the whole world.

Sano Moreover, even as he worked in so many different areas, he worked with great speed, always completing something while it remained completely fresh. Maybe it had something to do with his fondness for cooking. Anyway, it’s his speed that I find so attractive.

Ito He finished things swiftly, without fussing. That lack of fussiness is something very important, something we’re always aiming for in our graphic design work. One other thing is that in Ikko’s time, almost all work was done by paste-up. The paste-up was prepared by manually moving different photostats and films. Today, we work almost exclusively with data. Using

Adobe Illustrator, rather than composing something as a whole, in a way we proceed by placing the various parts. But watching the video in the gallery, it struck me that though he was working in a different time, the way Ikko worked, how he created a picture while probing the relationships between objects, is a bit like digital processing.

Ikko was born in Nara and studied in Kyoto. Remaining conscious of Japan’s traditional culture, he blended it with modern design. But with you or me, when we attempt to do something in a traditional Japanese way, we’re a bit unsure of ourselves. We need something handy to grab hold of.

Sano I agree. If we attempt to do something beyond us, there’s something fake about it. Without our realizing it, what we create every day is a product of what we’ve experienced in our life up till that point.

Mr. Ito and I have taken it upon ourselves to each select what we consider to be Ikko’s best 10 works, and now we’d like you to see our choices. My No.1 choice is the “Nihon Buyo” poster we mentioned earlier. Another of my selections is Morisawa’s “Street,” which on seeing the actual work struck me as being extremely powerful. The left-hand stroke in particular, which is the core element of the kanji character for “street,” actually looks like a street here. An overview of Ikko’s works is interesting in the way they look flat or modeled. They also have a light touch suggestive of Mondrian or such. There’s something fresh about that.

Ito My best 10 overlaps with Mr. Sano’s quite a bit, including the “Nihon Buyo” poster as he just mentioned. Another example is Ikko’s logotype for the fashion magazine *Ryuko Tsushin*, which isn’t included in this exhibition. In creating such logotypes, he designed the characters one by one, and then when he had a lot of them, he developed them into a font: the “Kocho” font released from Morisawa, which he apparently modeled on the Bodoni alphanumeric font. It’s really great that a font made by a designer is used for a long time.

Sano One thing that occurred to me seeing this exhibition was that in spite of how rapidly



# Gallery Talk

## DNP Graphic Design Archives Collection IV: Ikko Tanaka Posters 1980-2002

the media are expanding, I still like posters. When you create one that truly works, the value of the poster itself is amazing.

**Ito** The power of graphic design remains unchanged, even today. This is something Ikko has made us realize.

---

**Kazuko Koike** To start, let's explain to everybody how you and I came to work together. I was talking with Mr. Tanaka in his office in Aoyama one day, discussing who should be entrusted to take over art direction of MUJI, which he and I had begun together. We both agreed that the best choice would be to ask you, at which point Mr. Tanaka telephoned you on the spot.

**Kenya Hara** Given the generation gap between us, I hadn't spoken with Mr. Tanaka very much up until that time, so I was really taken by surprise when I suddenly received his phone call. Soon after that, he came to Ginza together with you. I wasn't able to give you an immediate answer, so I thought about it overnight and then sent my response by fax the next day. I said yes because I could envision a future in which a "World MUJI" approach might have exciting possibilities.

**Koike** I remember. That was in the summer of 2001, wasn't it.

**Hara** What I was told was that MUJI wasn't making any solid posters in those days, and he wanted me to join in to start from doing that. We agreed that I would do what I could to help out the following year, when I expected to have more time available.

As the number of MUJI's products increased, I felt it wouldn't do to rely only on "No Design," so to strengthen the company's products I recommended Naoto Fukasawa, who I thought was perfect for the job. Shortly after New Year's, on January 9th I visited Mr. Tanaka's office in Aoyama to introduce Mr. Fukasawa. The following day, the 10th, he died.

**Koike** Relationships between work and people can be truly dramatic. In my case, Mr. Tanaka brought you on board, then you brought Mr. Fukasawa on board. It's been a very thrilling ride since then.

I started out doing secretarial work for Seiichi Horiuchi, the art director, where I learned a lot of different things. After that I changed to working for the Japan Printing Ink Makers Association, and it was during my involvement in creating new printing media there that I met Mr. Tanaka for the first time. He had recently returned from the United States, and we had similar brands of curiosity. I learned a great deal from him.

Starting in 1966 Mr. Tanaka began devoting himself to the creation of a four-volume set of books on Japanese patterns. Together with Mitsukuni Yoshida he unearthed anonymous botanical drawings and illustrations on natural and other themes, putting it all together into a brilliant, if somewhat esoteric, compendium. To my mind it contains the very essence of Japan's traditional visual realm.

**Hara** Another amazing work of his was the color guide of traditional Japanese colors he made for DIC Corporation, a work you may also have been involved in. He transposed the world of colors entirely into words: gardenia, for example, or iron rust, ashen white, ashen sakura. The result is something truly poetic, completely different from color chips arranged merely by their place in the Munsell or Ostwald color system. I admire it greatly.

**Koike** In the early 1980s we worked together on a book called *Japanese Coloring*. It began as an exhibit planned for Japan Day in Amsterdam, but we were intent on also making a book of it. Mr. Tanaka said curation and editing are similar – an observation of great importance. Mr. Yoshida also joined and added his input, but it was from Mr. Tanaka's approach to Japanese colors that I learned a great deal.

**Hara** Mr. Tanaka, as you've pointed out, took part in exhibitions introducing Japanese culture abroad – in the Netherlands and U.S., for example. At the same time, he also became thoroughly enamored of other countries, and I think it must have been on such occasions that he made rediscoveries about Japan. It's when we go abroad and see its modernism, so refined, first-hand that we reconfirm Japan that resonate to our very core. Mr. Tanaka may have



made an encounter with Japan in that way. It's the type of stance we, designers today, would like to carry on.

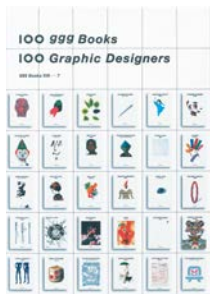
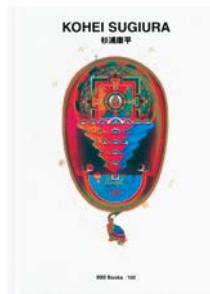
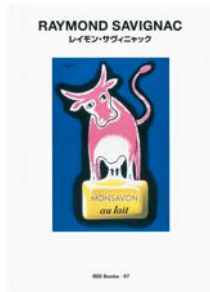
**Koike** Mr. Tanaka thought a lot about the 21st century, yet he passed away just after the start of 2002. Fortunately he left a wonderful essay called "My 21st Century," in which he suggested what he thought would be the foremost topics in the design realm during the 21st century. He projected design attuned to restoring our damaged planet, renewed appreciation of non-Western European culture, escape from continental style, regression of the pursuit of comfort, frank global exchanges, clashes of various philosophies arising from self-awareness as a global citizen, and a return to an appreciation of beauty that isn't squeaky clean, shiny and new.

That's the message with which Mr. Tanaka closed his essay, and I think he has concisely set down the very topics we face today.

**Hara** What he said is brilliantly visionary, yes. What I hope is that everyone here today will take Mr. Tanaka's message home with them.

# Publications 2011-2012

## 出版活動



■ Graphic Art & Design Annual 10-11

- ggg Books 97 レイモン・サヴィニャック
- ggg Books 98 グルーヴィジョンズ
- ggg Books 99 工藤 青石
- ggg Books 100 杉浦 康平
- ggg Books 別冊7  
100 ggg Books 100 Graphic Designers
- 佐藤 晃一のYES EYE SEE 1982-83
- イデオポリス東京
- DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ  
田中一光ポスター 1980-2002
- マンダラ発光 杉浦 康平のマンダラ造本宇宙
- ロトチェンコ  
一彗星のごとく、ロシア・アヴァンギャルドの寵児ー



- ggg Books 97 Raymond Savignac
- ggg Books 98 Groovisions
- ggg Books 99 Aoshi Kudo
- ggg Books 100 Kohei Sugiura
- ggg Books Special Edition-7  
100 ggg Books 100 Graphic Designers
- Yes Eye See 1982-83, Koichi Sato
- Ideopolis-Tokyo
- DNP Graphic Design Archives Collection IV  
Ikko Tanaka Posters 1980-2002
- Luminous Mandala: Book Designs of Kohei Sugiura
- Rodchenko – Innovator of Russian Avant-Garde –







アーカイブ事業

Archiving

# DNP Graphic Design Archives

## DNP グラフィックデザイン・アーカイブ

青葉 益輝 AOBA Masuteru	蝦名 龍郎 EBINA Tatsuo	木村 恒久 KIMURA Tsunehisa	杉浦 康平 SUGIURA Kohei	中村 誠 NAKAMURA Makoto	宮田 識 MIYATA Satoru
秋田 寛 AKITA Kan	太田 徹也 OHTA Tetsuya	清原 悦志 KIYOHARA Etsushi	鈴木 八朗 SUZUKI Hachiro	灘本 唯人 NADAMOTO Tadahito	森本 千絵 MORIMOTO Chie
秋月 繁 AKIZUKI Shigeru	大橋 正 OHASHI Tadashi	K2 K2	副田 高行 SOEDA Takayuki	新島 実 NIIJIMA Minoru	矢萩 喜從郎 YAHAGI Kijuro
秋山 育 AKIYAMA Iku	葛西 薫 KASAI Kaoru	小島 良平 KOJIMA Ryohei	タイクーングラフィックス Tycoon Graphics	野田 凧 NODA Nagi	矢吹 申彦 YABUKI Nobuhiko
秋山 具義 AKIYAMA Gugi	勝井 三雄 KATSUI Mitsuo	佐藤 可士和 SATO Kashiwa	田名網 敬一 TANAAMI Keiichi	服部 一成 HATTORI Kazunari	山形 季央 YAMAGATA Toshio
浅葉 克己 ASABA Katsumi	上條 喬久 KAMIJOYO Takahisa	佐藤 晃一 SATO Koichi	田中 一光 TANAKA Ikko	早川 良雄 HAYAKAWA Yoshio	山口 はるみ YAMAGUCHI Harumi
新井 苑子 ARAI Sonoko	亀倉 雄策 KAMEKURA Yusaku	佐藤 卓 SATO Taku	タナカ ノリユキ TANAKA Noriyuki	日比野 克彦 HIBINO Katsuhiko	山本 容子 YAMAMOTO Yoko
粟津 潔 AWAZU Kiyoshi	河村 要助 KAWAMURA Yosuke	U.G.サトー SATO U.G.	戸田 正寿 TODA Seiju	平野 甲賀 HIRANO Kouga	湯村 輝彦 YUMURA Teruhiko
五十嵐 威暢 IGARASHI Takenobu	河原 敏文 KAWAHARA Toshifumi	佐野 研二郎 SANO Kenjiro	永井 一史 NAGAI Kazufumi	福島 治 FUKUSHIMA Osamu	横尾 忠則 YOKOO Tadanori
伊藤 憲治 ITOH Kenji	木田 安彦 KIDA Yasuhiko	澤田 泰廣 SAWADA Yasuhiro	永井 一正 NAGAI Kazumasa	福田 繁雄 FUKUDA Shigeo	吉田 カツ YOSHIDA Katsu
井上 嗣也 INOUE Tsuguya	北川 一成 KITAGAWA Issay	下谷 二助 SHIMOTANI Nisuke	中島 英樹 NAKAJIMA Hideki	松永 真 MATSUNAGA Shin	若尾 真一郎 WAKAO Shinichiro
宇野 亜喜良 UNO Akira	木村 勝 KIMURA Katsu	新村 則人 SHINMURA Norito	仲條 正義 NAKAJO Masayoshi	三木 健 MIKI Ken	

アン・サンスー AHN Sang-Soo	ボジダル・イコノモフ IKONOMOV Bojidar	イ・ソンピョ LEE Sung-Pyo	ミン・ビョンゴル MIN Byung Geol	ヤン・ライリッヒ・Jr RAILICH JR. Jan	フランチšek・スタロヴェイスキ STAROWIEYSKI Franciszek
バラリンジ・デザイン Balarinji Design	メルヒオール・インボーデン IMBODEN Melchior	ヤン・レニツツァ LENICA Jan	エム/エム (パリス) M/M(Paris)	リュウ・ミュンシク RYU Myeong-Sik	ヴァルデマル・シュヴェジ SWIERZY Waldemar
チョン・ビョンギョ CHUNG Byoung-Kyu	キム・ドゥソプ KIM Doo-sup	ウーヴェ・レシュ LOESCH Uwe	ヘルマン・モンタルボ MONTALVO German	ステファン・サグマイスター SAGMEISTER Stefan	ニクラウス・トロックスラー TROXLER Niklaus
ロマン・チスレヴィッチ CIESLEWICZ Roman	キム・ジュソン KIM Joo-Sung	ルーバ・ルコーバ LUKOVA Luba	ラファル・オルピンスキ OLBIŃSKI Rafał	ポーラ・シェア SCHER Paula	ウン・ヴァイメイ UNG Vai-Meng
スタシ・エイドゥリグヴィチウス EIDRIGEVIČIUS Stasys	アンジェイ・クリモウスキー KLIMOWSKI Andrzej	ビクトル・ヒューゴ・マレイロス MARREIROS Victor Hugo	ヴォン・オリバー OLIVER Vaughan	ゲルヴィン・シュミット SCHMIDT Gerwin	ヴィエスワフ・ヴァウクスキ WALKUSKI Wiesław
ミェチスワフ・グロフスキー GOROWSKI Mieczysław	ザビーネ・コッホ KOCH Sabine	オルガー・マチス MATTHIES Holger	イシュトバン・オロス OROSZ Istvan	ラルフ・シュライフォーゲル SCHRAIVOGEL Ralph	ヴォルフガング・ワインガルト WEINGART Wolfgang
グラフィック・ソート・ファシリティ Graphic Thought Facility	クロード・カーン KUHN Claude	チャズ・マヴィヤネ・デイヴィス MAVIYANE-DAVIES Chaz	パク・クムジュン PARK Kum-Jun	シー・リンホン SHIH Ling-Hung	イエ・クオソン YEH Kuo-Sung
ハン・ジェジュン HAN Jae Joon	フリーマン・ラウ LAU Freeman	ピエール・メンデル MENDELL Pierre	カリ・ピッポ PIIPPO Kari	ソ・ギフン SHUR Ki-Heun	

#### ◆ポスターアーカイブ (2012年3月現在)

- ① 収蔵作家：118名 (国内作家71名、海外作家47名)
- ② 総点数：約9,500点
- ③ 2011年4月～2012年3月の受入れ状況

・タナカ ノリユキ	112点
・野田 風	201点
・杉浦 康平	85点
・田名網 敬一	71点
・横尾 忠則	498点
・メルヒオール・インボーデン	23点 *
・ヤン・レニツァ	5点 *
・フランチェク・スタロヴェイスキ	5点 *
・ヴァルデマル・シュヴェジ	4点 *
・ロマン・チスレヴィッチ	7点 *
・ミェチスワフ・グロフスキー	6点 *
・アンジェイ・クリモウスキー	6点 *
・ラファル・オルピンスキ	6点 *
・ヴィエスワフ・ヴァウクスキ	6点 *
・スタシス・エイドゥリゲヴィチウス	6点 *

\* ポズナン国立美術館 ポスター&デザイン・ギャラリーより寄贈

#### ◆アーカイブ作品寄贈

- ① アン・グラフィックス (韓国・ソウル)  
2011年9月  
福田 繁雄ポスター 58点
- ② ITSP (劇場ポスター国際トリエンナーレ ソフィア・ブルガリア)  
2011年10月  
田中 一光ポスター 70点  
永井 一正ポスター 70点  
福田 繁雄ポスター 70点

#### ◆ Poster Archives (as of March 2012)

- ① Artists represented: 118  
(71 domestic, 47 from overseas)
  - ② Items in collection: Approx. 9,500
  - ③ Items received between April 2011 and March 2012:
- |                         |      |
|-------------------------|------|
| ・Noriyuki Tanaka        | 112  |
| ・Nagi Noda              | 201  |
| ・Kohei Sugiura          | 85   |
| ・Keiichi Tanaami        | 71   |
| ・Tadanori Yokoo         | 498  |
| ・Melchior Imboden       | 23 * |
| ・Jan Lenica             | 5 *  |
| ・Franciszek Starowieysk | 5 *  |
| ・Waldemar Swierzy       | 4 *  |
| ・Roman Cieslewicz       | 7 *  |
| ・Mieczysław Gorowski    | 6 *  |
| ・Andrzej Klimowski      | 6 *  |
| ・Rafał Olbiński         | 6 *  |
| ・Wiesław Walkuski       | 6 *  |
| ・Stasys Eidrigėvičius   | 6 *  |

\* Donated by Poster and Design Gallery,  
The National Museum in Poznań

#### ◆ Donation of Archived Works

- ① Ahn Graphics (Seoul, Korea)  
September 2011  
58 Shigeo Fukuda posters
- ② International Triennial of Stage Poster (Sofia, Bulgaria)  
October 2011  
70 Ikko Tanaka posters  
70 Kazumasa Nagai posters  
70 Shigeo Fukuda posters



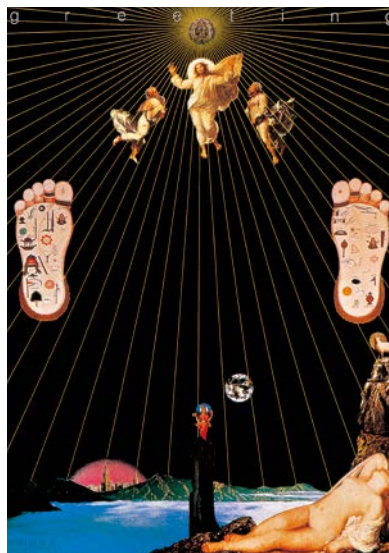
タナカ ノリユキ Noriyuki Tanaka

1995



杉浦 康平 Kohei Sugiura

1959



横尾 忠則 Tadanori Yokoo

1972



田名網 敬一 Keiichi Tanaami

1967



野田 風 Nagi Noda

2001





1 1992



2 1991



3 1972



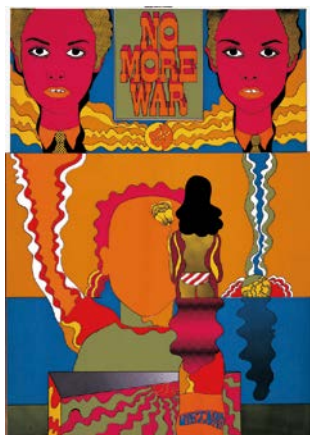
4 1992



5 1989



6 1984



7 1968



8 2002



9 1988



10 1984



11 2003

- |          |          |                 |
|----------|----------|-----------------|
| 1, 4.    | 杉浦 康平    | Kohei Sugiura   |
| 2, 5, 9. | タナカ ノリユキ | Noriyuki Tanaka |
| 3, 6.    | 横尾 忠則    | Tadanori Yokoo  |
| 7, 10.   | 田名網 敬一   | Keiichi Tanaami |
| 8, 11.   | 野田 侃     | Nagi Noda       |





Andrzej KLIMOWSKI Londyn  
Współczesne / More Than The Poster: May 2006. Wytwórnia zaangażowania i sztuki krytycznej  
artyści: "Abel Golewicz" Galeria Miejska "Sztuka", Poznań, 19.02 - 12.03. 2006.  
Franciszek Sztuka Sztuki Wydział, Olsztyn, 1.02 - 30.02. 2006.

12 2006



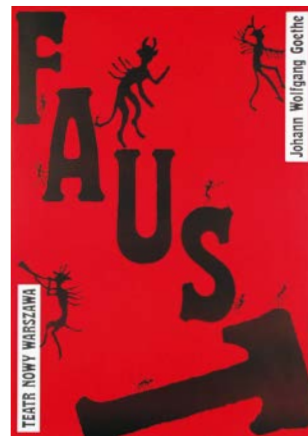
13 2004



14 1991



15 1974



16 1988



17 1981



18 1991



19 1976



20 1982



21 1988

- |                      |                        |
|----------------------|------------------------|
| 12. アンジェイ・クリモウスキー    | Andrzej Klimowski      |
| 13. メルヒオール・インボーデン    | Melchior Imboden       |
| 14. ヴィエスワフ・ヴァウスキ     | Wiesław Walkuski       |
| 15. ヤン・レニツァ          | Jan Lenica             |
| 16. ロマン・チスレヴィッチ      | Roman Ciesiewicz       |
| 17. ラファル・オルピンスキ      | Rafal Olbiński         |
| 18. スタシス・エイドゥリゲヴィチウス | Stasys Eidrigevičius   |
| 19. フランチシェク・スタロヴェイスキ | Franciszek Starowieysk |
| 20. ヴアルデマル・シュヴェジ     | Waldemar Świerzy       |
| 21. ミェチスワフ・グロフスキー    | Mieczysław Gorowski    |





国際交流事業

International Exchange

# ggg Traveling Exhibition in China “Push Pin Paradigm”

CAFA Art Museum (Beijing): March 5 – 31, 2011

The OCT Art & Design Gallery (Shenzhen): July 9 – August 5, 2011

ggg 企画展中国巡回「プッシュピン・パラダイム」展



プッシュピンの黄金時代を築いた4氏（シーモア・クワスト / ボール・デイヴィス / ミルトン・グレイザー / ジェームズ・マクミラン）の代表作や貴重な原画などを展示し、好評を博したggg第290回「プッシュピン・パラダイム」展は、wx-design代表、王序（ワン・シュ）氏の動きかけにより、中国への巡回が実現した。はじめに、北京のCAFA アート・ミュージアムで展覧会を開催した後、深圳のOCTアート&デザイン・ギャラリーへ巡回。古い倉庫を改築した本施設は、中国本土でデザインを取り扱う初のギャラリーとして、2008年に創設された。2,000m<sup>2</sup>という広大な展示空間を有し、プッシュピンの大型ポスターから多数の詳細な資料まで、ゆったりと見やすく展示することが可能であった。深圳の展覧会オープニングには、ボール・デイヴィス、マーナ・デイヴィス御夫妻と財団のスタッフが招かれ、3名によるレクチャーと、関係者を集めたレセプションが開催された。デイヴィス氏は、プッシュピン・メンバーの紹介と展示作品の解説、マーナ夫人は、長らく役員を務めたニューヨークADCの活動紹介、財団はggg展示事業を中心とした財団の活動と展望について、それぞれ講演した。300席の会場に600名ほどの聴講者が

集まり、トーク後の質疑応答も活発に行われ、中国の若者たちのデザインに対する積極性に圧倒されるイベントとなった。

主催：OCT Art & Design Gallery / CAFA Art Museum / wx-design

企画：DNP文化振興財団

後援：Shenzhen Overseas Chinese Town Co., Ltd. 華僑城

“Push Pin Paradigm,” ggg’s widely acclaimed 290th Exhibition, traveled to China thanks to the efforts of Wang Xu, president of WX-Design. The exhibition showcased representative works and rare original artwork by the four designers who forged the Push Pin Studio’s golden era: Seymour Chwast, Paul Davis, Milton Glaser and James McMullan. After the initial run at CAFA Art Museum in Beijing, the exhibition traveled to The OCT Art & Design Gallery in Shenzhen. The latter facility, renovated from an old warehouse, was opened in 2008 as the first gallery on the Chinese mainland with a focus on design. The entire exhibition space, an expansive 2,000m<sup>2</sup>, was used to full advantage, offering visitors an opportunity to see a broad array of items related to Push Pin, from large-size posters to nu-

merous finely detailed materials.

Paul Davis, his wife Myrna, and a staff member from the DNP Foundation were invited to attend the opening in Shenzhen. They each presented a lecture, and a reception was held for all involved in mounting the show in China. Paul Davis introduced the studio’s members and presented a commentary on the exhibited works; Myrna Davis spoke about the activities of the New York ADC, where she long served on the Board of Directors; and the Foundation staff member gave an overview of the organization’s activities, especially the exhibitions held at ggg. The venue, with a seating capacity of 300, drew an audience of approximately 600, and the follow-up question & answer session generated lively discussions. The entire event was an overwhelming display of the enthusiasm of young Chinese toward design.

Organizers: The OCT Art & Design Gallery, CAFA Art Museum, WX-Design

Planning: DNP Foundation for Cultural Promotion

Support: Shenzhen Overseas Chinese Town Co., Ltd.

# Typojanchi 2011 Seoul: International Typography Biennale Show and Donation of Works from the Ikko Tanaka Archives

August 30 – September 14

タイポジャンチ 2011 ソウル 田中一光アーカイブより出品と寄贈

韓国・ソウルで開催された東アジアの文字文化をテーマとしたタイポグラフィのイベント「TYPOJANCHI 2011 SEOUL」に田中一光アーカイブよりポスター「人間と文字」シリーズ15点を出品。本展は、韓国、中国、日本から代表的な作家99名が作品を出展し、漢字、ハングル、英語、ひらがな、カタカナなどさまざまな文字を使ったタイポグラフィの魅力を伝えるもの。会期は8月30日から9月14日まで、ソウル芸術の殿堂・書芸博物館が会場となり、オープニング時のイベントでは、数々のシンポジウムも開催された。

当財団から出展した作品は、会期後、15点追加し合計30点を財団と田中一光遺族との連名で書芸博物館に寄贈し、韓国でのグラフィック文化の振興、発展に活用される。今回の事業は、タイポジャンチの推進役であるアン・サンスー氏の仲介により実現したもので、今後、韓国グラフィックデザイン界との交流を一層深めてゆききっかけとなった。

Fifteen posters in Ikko Tanaka's "Man and Writing" series, today part of the Ikko Tanaka Archives, were exhibited at "Typojanchi 2011 Seoul," a biennale event focused on East Asian typography held in the Korean capital. The event exhibited works by 99 leading artists from Korea, China and Japan conveying the appeal of typography involving Chinese characters, hangul, hiragana and katakana scripts, and English. It took place from August 30 through September 14 at the Seoul Arts Center, one of the city's prime art venues. A full program of symposiums was also conducted in conjunction with the event.

Upon completion of the biennale, the DNP Foundation and the family of Ikko Tanaka jointly donated the artist's fifteen exhibited posters, along with an additional fifteen, to the Seoul Arts Center, as a way of promoting the development of graphics culture in Korea. The participation of Mr. Tanaka's works at Typojanchi 2011 Seoul was facilitated by Ahn Sang-Soo, the organizer of the event. The display and donation of Mr. Tanaka's posters has further raised the level of exchanges with Korea's graphic design realm.



## “Shigeo Fukuda Exhibition” and Event Commemorating the Publication of *Fukuda Shigeo Design Saiyuki*

September 27 – October 6

福田繁雄展 & 『福田繁雄 DESIGN 才遊記』出版記念

韓国・ソウルのThe Galleryにて、『ggg Books別冊一6 福田繁雄 DESIGN 才遊記』の韓国版出版を記念して、福田繁雄展が開催された。主催は、アン・グラフィックス。展覧会では、DNP文化振興財団が寄贈した福田繁雄の58点のポスター作品の内の28点と過去の出版物や映像が展示された。初日のオープニングパーティには、福田繁雄氏のご遺族や公益大学のアン・サンスー教授ほか、韓国のグラフィックデザイン界の主要メンバーが一堂に会し、韓国をはじめ、世界のデザイン界に与えた福田氏の偉大な功績が称えられた。会期中には公益大学の百瀬博之氏によるレクチャーも開催。10日間で約700人の入場者を迎え、日本と韓国の文化交流を深めた。

An exhibition of the works of Shigeo Fukuda was held at The Gallery in Seoul to commemorate the publication of the Korean version of *Fukuda Shigeo Design Saiyuki*, the 6th Special Edition in the *ggg Books* series. The event, organized by Ahn Graphics, featured 28 of the 58 posters by Mr. Fukuda donated by the DNP Foundation for Cultural Pro-

motion, as well as his previous publications and video presentations. The opening party was attended by members of the Fukuda family, Professor Ahn Sang-Soo of Hongik University, and numerous leading members of Korea's graphic design realm, all of who approved Mr. Fukuda's great achievement and influence on the international design scene including Korea. During the show's run a lecture was presented by Hiroyuki Momose of Hongik University. During its 10-day run the exhibition attracted some 700 visitors, thereby elevating the level of cultural exchange between Japan and Korea.





# Support of Japan Office of AGI

## AGI日本事務局サポート

AGI (国際グラフィック連盟)は、5名のデザイナーの発案によりヨーロッパを起点にはじまった歴史ある連盟で、創立当初から現在まで、社会に影響を持つ個性溢れるグラフィックデザイナーが、会員として名を連ねてきた。AGI日本会員の事務局支援を行っている財団は、毎年秋に開催されるAGI総会に参加し、世界各国の会員が交流する様子や総会で話し合われた内容などを報告している。本年の総会は、2011年10月4日から5日間、スペインのバルセロナで開催された。砂浜のバルセロナ・タビエラでのウェルカムパーティを皮切りに、最近の作品やプロジェクトを紹介する各国会員によるレクチャーが、丸2日間かけて行われた。計33名の会員による発表のほか、特別ゲストとして、FCバルセロナのジョゼップ・グアルディオラ監督、元エル・ブジの料理長、フェラン・アドリア氏、プロダクト・デザイナーであり建築家、アーティストでもあるロン・アラッド氏等、他分野で活躍する著名人も講演者として招かれた。

毎年最終日の総会では、収支報告や懸案事項などが話し合われるが、全会員がもっとも注目するのは、新会員の発表である。AGIは会員による推薦という方法で、新しい会員を招いている。各国から推薦されたデザイナーは、10名の審査委員による審査を経て入会が決定され、この総会で発表される。日本からは新たに、服部一成氏、平野敬子氏、永井一史氏、佐藤可士和氏が入会し、日本のAGI会員数は27名となった。

Alliance Graphique Internationale (AGI) is an association with a long history tracing back to its formation in Europe on a proposal by five designers. Since its inception AGI's membership has consisted of graphic designers who each possess unique individuality and powerful social impact. The DNP Foundation for Cultural Promotion is a strong supporter of the Japan Office embracing AGI's local members, and it participates in the organization's annual Congress each autumn and reports on exchanges between AGI's members worldwide and on the content of discussions conducted at the annual meetings. In 2011 the AGI Congress took place for five days, starting October 4, in Barcelona, Spain. The event kicked off at a welcome party at Barceloneta Beach, and for the next two days members from all over the world gave lectures introducing their latest works and projects. A total of 33 members spoke, complemented by a number of speakers renowned in other fields who were invited as special guests. The latter group included Barcelona Football Club manager Pep Guardiola; Ferran Adria, former head chef of the famed El Bulli restaurant; and Ron Arad, who is a product designer, architect and artist in his own right. The final day is dedicated to discussions of the organization's earnings report, pending matters, etc.; but the center of attention for all members is the announcement of the organization's newly selected members. AGI invites new members based on recommendations made by its current members. Designers put forward as candidates by their respective countries all go through a screening process by a panel of 10 members, and the final results are announced at the Congress. This year four new members were added from Japan: Kazunari Hattori, Keiko Hirano, Kazufumi Nagai and Kashiwa Sato, bringing the total number of Japanese members to 27.



### AGI日本会員 [2012年4月現在：現役会員] (入会年)

永井 一正 (1966)	三木 健 (1998)	澤田 泰廣 (2001)
五十嵐 威暢 (1981)	中島 英樹 (1998)	杉崎 真之助 (2001)
勝井 三雄 (1984)	新島 実 (1998)	松下 計 (2003)
中村 誠 (1985)	UGサトー (1998)	葛西 薫 (2006)
浅葉 克己 (1987) *日本代表	佐藤 卓 (1998)	立花 文穂 (2006)
松永 真 (1988)	蝦名 龍郎 (2001)	服部 一成 (2011)
佐藤 晃一 (1988)	原 研哉 (2001)	平野 敬子 (2011)
サイトウ マコト (1994)	北川 一成 (2001)	永井 一史 (2011)
松井 桂三 (1997)	長友 啓典 (2001)	佐藤 可士和 (2011)

### Japanese members of AGI [as of April 2012] (listed by date of induction)

Kazumasa Nagai (1966)	Tatsuo Ebina (2001)
Takenobu Igarashi (1981)	Kenya Hara (2001)
Mitsuo Katsui (1984)	Issay Kitagawa (2001)
Makoto Nakamura (1985)	Keisuke Nagatomo (2001)
Katsumi Asaba (1987) *Japan representative	
Shin Matsunaga (1988)	Yasuhiro Sawada (2001)
Koichi Sato (1988)	Shinnoske Sugisaki (2001)
Makoto Saito (1994)	Kei Matsushita (2003)
Keizo Matsui (1997)	Kaoru Kasai (2006)
Ken Miki (1998)	Fumio Tachibana (2006)
Hideki Nakajima (1998)	Kazunari Hattori (2011)
Minoru Nijima (1998)	Keiko Hirano (2011)
UG Sato (1998)	Kazufumi Nagai (2011)
Taku Satoh (1998)	Kashiwa Sato (2011)

## “Tokyo Art Directors Club Award 2011” Traveling Exhibition in Frankfurt, Germany

February 9 – April 15, 2012

### Tokyo ADC Award 2011 ドイツ・フランクフルト巡回

ggg、クリエイションギャラリー G8、dddギャラリーで開催された「2011 ADC展」が、ドイツのフランクフルト市立応用芸術博物館に巡回された。ADC展のドイツ巡回は1960年(ミュンヘン)、2009年(フランクフルト)に続き今回3回目となる。

会期中は、約50の日刊及び週刊新聞、雑誌、インターネット、ラジオやTVなど代表的なメディアで取り上げられ、最新の日本のデザインのクオリティに対する高い評価を得た。2月15日付けフランクフルトザクセンハウゼン週刊新聞は、「興味深くそして刺激的である」と述べ、同日付けフランクフルトノイエブレッセ(FNP)新聞は、「卓越したデザイン性」、「傑出した展示作品」と賞賛。2月14日、SWR第2放送では、「美の多様性という点においても観賞価値が十分ある」とコメントされた。

この展覧会での集客数は、約2ヶ月間で約14,000人(2009年は12,000人)。この後、2011 ADC展は、2012年4月26日―6月3日までベルリンのゲシュタル・スペースに巡回された。

The “2011 Tokyo ADC Exhibition”, following its runs at ggg, Creation Gallery G8 and ddd, traveled to Germany for a showing at Frankfurt's Museum für Angewandte Kunst (Museum of Applied Art). This was the third time the Tokyo ADC exhibition was mounted in Germany, following previous shows in 1960 (Munich) and 2009 (Frankfurt).

During its run in Frankfurt the exhibition was featured in roughly 50 of Germany's leading media. This wide media coverage was characterized by high acclaim toward the quality of the newest achievements in Japanese design. In its edition of February 15, for example, Frankfurt Sachsenhausen, a weekly newspaper, described the show as both “interesting and stimulating,” while Frankfurter Neue Presse (FNP) lavished praise in speaking of “outstanding design” and “masterful works on exhibit.” On February 14, the radio channel SWR2 reported on the exhibition saying it “fully merited to be seen for its diversity of beauty.”

In its near two-month run the exhibition drew approximately 14,000 visitors. After Frankfurt, the exhibition next traveled to Berlin, where it was mounted at Gestalten Space from April 26 to June 3.

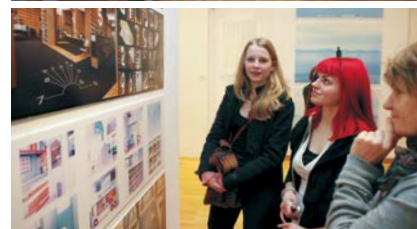


Photo : Axel Stephan

# “Ikko Tanaka・Kazumasa Nagai・Shigeo Fukuda – Great Poster Masters from Japan”

October 24 – November 6

田中一光・永井一正・福田繁雄展 – 日本ポスター界による不滅の教え –



ブルガリアの首都ソフィアにあるUBA Raiko Alexiev Art Galleryにて、「田中一光・永井一正・福田繁雄展 – 日本ポスター界による不滅の教え –」が、ブルガリアの日本交流月間に合わせ、10月24日から11月6日まで開催された。ソフィアのITSP（劇場ポスター国際トリエンナーレ）の要請により、DNP文化振興財団より計210点（各作家70点）のポスターを寄贈。財団スタッフによる国立芸術アカデミーでの講演や、図録の印刷などの協力も行い、日本のポスター文化の真髄を紹介した。ブルガリアは、ブルガリアヨーグルトや琴欧州関でもおなじみ、大変親日なお国柄。この展覧会は地元のTVやFMラジオでも紹介され、2週間で約3,000人以上の入場者を記録、ブルガリアと日本の文化交流をさらに深める機会となった。

主催：ITSP（劇場ポスター国際トリエンナーレ）、  
ブルガリア共和国大使館  
共催：ブルガリア外務省、ブルガリア日本大使館  
企画：DNP文化振興財団  
監修：ボジダル・イコノモフ  
作品選定：永井一正 + DNP文化振興財団  
協賛：国立芸術アカデミー、ソフィア大学

An exhibition of works by Ikko Tanaka, Kazumasa Nagai and Shigeo Fukuda, subtitled “Great Poster Masters from Japan,” took place from October 24 through November 6 at the Union of Bulgarian Artists’ (UBA) Raiko Alexiev Art Gallery in Sofia, the capital city of Bulgaria. At the request of the International Triennial of the Stage Poster (ITSP) in Sofia, the DNP Foundation for Cultural Promotion selected 210 posters (70 for each of the three featured designers) from among works placed into its custody and donated them to ITSP. The Foundation also cooperated in a lecture by a Foundation staff at National Academy of Arts and printing of exhibition catalog. The show introduced visitors to the quintessence of Japan’s poster culture. Bulgaria is well known to the Japanese for its famed yoghurt and for Kotooshu, a sumo wrestler from that country who holds the high rank of ozeki. The people of Bulgaria on their part are extremely friendly toward Japan. The exhibition, which was introduced on local TV and FM radio, attracted some 3,000 visitors during its two-week run, deepening the ties of cultural exchange between Bulgaria and Japan.

Organizers: ITSP (International Triennial of the Stage Poster), Embassy of the Republic of Bulgaria (Tokyo)  
Co-sponsors: Ministry of Foreign Affairs of the Republic of Bulgaria, Embassy of Japan in Bulgaria  
Planning: DNP Foundation for Cultural Promotion  
Supervision: Bojidar Ikonov  
Selection of Works: Kazumasa Nagai + DNP Foundation for Cultural Promotion  
Support: National Academy of Arts, Sofia University







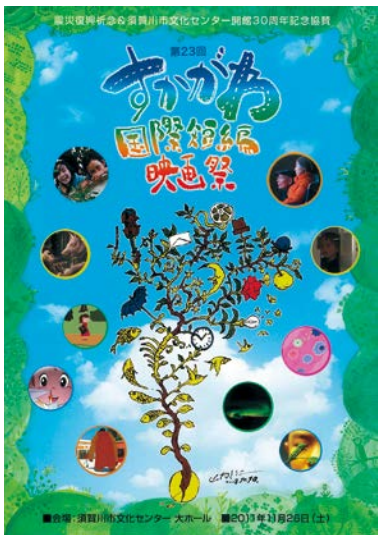
研究助成事業

Research Support

# 2011-2012 Financial Support Activities

## 2011-2012年度助成実績

1	対象 第23回すかがわ国際短編映画祭 主催 すかがわ国際短編映画祭実行委員会／ 須賀川市教育委員会 年月 2011/5 金額 30,000円 備考 短編映画フェスティバルおよびコンペ	Target 23rd Sukagawa International Short Film Festival Organizers Sukagawa International Short Film Festival Executive Committee, Sukagawa Board of Education Date May, 2011 Amount JPY30,000 Remarks Short film festival and competition
2	対象 第23回田善顕彰版画展への協賛 主催 須賀川商工会議所青年部／ 須賀川市教育委員会後援 年月 2012/2 金額 30,000円 備考 須賀川出身の江戸期の銅版画家、亜欧堂田善（あおう どうでんぜん）顕彰を目的とする市内小中学生対象の版 画コンクール	Target “23rd Denzen Print Exhibition” Organizers Sukagawa Chamber of Commerce Youth Division, Sukagawa Board of Education Date February, 2012 Amount JPY30,000 Remarks Print contest for Sukagawa elementary and junior high school students aimed at spreading recognition of copper plate print artist and Sukagawa native Aodo Denzen (1748-1822)



# Reveiw of ggg 2011-2012

## ggg 展覧会概要

### TDC展 2011

会期＝2011年4月1日ー25日  
受賞作家＝○グランプリ＝ソニア・ダヤコヴァ  
○TDC賞＝渡邊良重・リー・シビン＋ヤオ・イエー、  
ニコラウス・トロックスラー、アディ・スターン  
○特別賞＝井上嗣也、祖父江慎＋吉岡秀典  
○TDC RGB賞＝エヴァン・ロス＋クリス・サグ  
リュ＋テオ・ワトソン＋ジェイミー・ウィルキン  
ソン ○タイプデザイン賞＝エミリー・リゴー  
○ブックデザイン賞＝フォームデュシェ  
展示概要＝先端的なタイポグラフィ作品が一堂  
に会する国際コンペティション「東京TDC賞」  
（東京タイプディレクターズクラブ主催）の成果  
を紹介するTDC展。2010年秋の公募に寄せら  
れた3,146作品（国内2,191、海外26カ国955）  
を数える応募作品の中から選ばれた「東京TDC  
賞2011」。この受賞11作品をはじめ、ノミネー  
ト作品、優秀作品を合わせた121作品を展覧。  
東日本大震災直後の開催であったため、海外受  
賞者は来日できず、デザインフォーラムも中止  
となってしまったが、会場には例年のごとく国  
内外からのエネルギー溢れる作品や、美しい文  
字組みの書籍、実験精神に富んだグラフィティ  
とテクノロジーの融合が見られる作品などが所  
狭しと並び、見ごたえのある内容となった。

### Tokyo Type Directors Club Exhibition 2011

Dates = April 1–25, 2011  
Award Winners = Grand Prix: Sonya Dyakova TDC  
Prize: Yoshie Watanabe, Li Xibin + Yao Ye, Niklaus  
Troxler, Adi Stern Special Prize: Tsuguya Inoue,  
Shin Sobue + Hidenori Yoshioka TDC RGB Prize:  
Evan Roth + Chris Sugrue + Theo Watson + Jamie  
Wilkinson Type Design Prize: Émilie Rigaud Book  
Design Prize: Formdusche  
Exhibition Overview = The exhibition introduced  
the results of the annual Tokyo TDC Awards, an  
international competition sponsored by the Tokyo  
Type Directors Club that attracts works represent  
ing the latest advances in typography. The awards  
have been garnering increasingly higher acclaim.  
In the 2011 competition, the call for entries in autumn  
2010 attracted a total of 3,146 works, including  
2,191 from Japan and 955 from 26 other countries.  
The exhibition introduced 121 works, including the  
11 award-winning entries as well as other works  
nominated for the awards and works of outstand  
ing merit. As the exhibition took place shortly after  
the Great East Japan Earthquake, none of the  
overseas winners was able to come to Japan,  
resulting in cancellation of the design forum.  
Nevertheless, this year's show, as always, was filled  
with impressive works from around the world  
brimming with energy, including books with beau  
tifully laid-out text and richly experimental fusions  
of graffiti and technology.

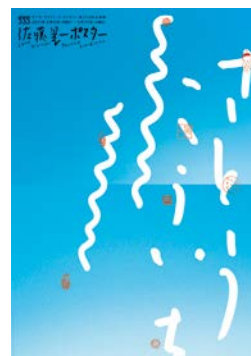


### 佐藤晃一ポスター

会期＝2011年5月9日ー31日  
作家略歴＝グラフィックデザイナー。多摩美術  
大学教授。1944年群馬県高崎市生まれ。東京  
芸術大学美術学部工芸科ビジュアルデザイン専  
攻卒業。資生堂宣伝部を経て71年に独立。85  
年東京ADC最高賞。91年毎日デザイン賞。97  
年芸術選奨文部大臣新人賞受賞。ニューヨーク  
近代美術館（MoMA）ポスターコンペ席をはじ  
め、多数の国際ポスターコンペで受賞。国内外  
の多数の美術館に作品所蔵。「超東洋的」と評さ  
れる独自の表現で知られるが、近年はそれにと  
らわれない自由な表現を展開している。  
展示概要＝空色に様変わりしたギャラリーの壁  
に、学生時代から現在までに制作されたポスター  
130点を展示。佐藤氏の制作の原点とも言える  
「箱」をモチーフとした「ニュー・ミュージック・  
メディア」(74年)から、「空」をモチーフにした  
「東京フロンティア'96」(93年)を経て今日まで、  
日本的なものと未来的イメージを融合させた、  
独創的な表現を堪能できる展示となった。ま  
た、それらのポスターの制作プロセスを物語る、  
今では目にする機会の少なくなった印刷指定原  
稿を合わせて紹介し、佐藤晃一ポスターの魅力  
と秘密にせまった。

### Sato Koichi Poster Exhibition

Dates = May 9–31, 2011  
Artist Profile = Graphic designer Koichi Sato was  
born in Takasaki City in 1944. Currently a professor  
at Tama Art University. After initially working in the  
advertising division of Shiseido, he went freelance  
in 1971. In 1985 he received the Tokyo ADC's Grand  
Prix; in 1991, the Mainichi Design Award; and in  
1997, the Education Minister's Prize for Outstanding  
New Artists. Sato has also won numerous prizes  
in international poster competitions, and his works  
are in the permanent collections of many art muse  
ums both in Japan and overseas. Although he is  
known for his unique style of expression hailed for  
its Oriental character, in recent years he has been  
pursuing freer ways of expressing himself artisti  
cally.  
Exhibition Overview = 130 of Sato's posters,  
spanning from his student days to the present, were  
displayed on the transformed sky-blue walls of the  
gallery. From his box-themed "New Music Media"  
of 1974 – the starting point of his career – through  
"Tokyo Frontier '96," his sky-motif poster of 1993,  
to his latest works, the exhibition enabled visitors  
to thrill to Sato's unique blend of Japanese touches  
and futuristic imagery. Also on display were his  
originals with printing instructions, giving insight – so  
rare today – into his poster production processes.  
In this way, the exhibition presented both the appeal  
and the secrets behind Sato Koichi's brilliant achieve  
ments in poster creation.

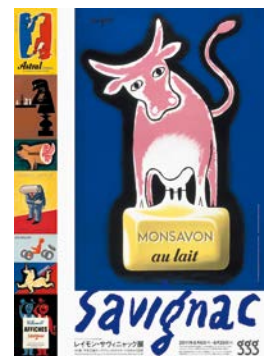


### レイモン・サヴィニャック展： 41歳、「牛乳石鹸モンサヴォン」の ポスターで生まれた巨匠

会期＝2011年6月6日ー28日  
監修＝矢萩喜俊郎  
協力＝パリ市フォルネ図書館、サントリホールディ  
ングス株式会社、川崎市市民ミュージアム、ギ・ア  
ンティックギャラリー  
後援＝在日フランス大使館  
作家略歴＝1907年パリ生まれ。パリのエコール・ラ  
ボアジエで学んだ後、35年アールデコの巨匠カッサ  
ンドルに学ぶ。49年ベルナル・ヴィルモとの二人展  
で、モンサヴォン石鹸のポスターを展示していたこ  
ろ、同社社長の目にとまり正式採用、本格デビュー。  
以後は瞬く間にファンを生みだし、エールフランス、  
ミシュラン、ペリエなどのフランス企業をはじめ、日本  
やアメリカの企業からの依頼も数多く受ける。2002  
年10月永眠。  
展示概要＝41歳でポスター作家として本格デビュー  
という異色な経歴を持つサヴィニャックの、デビュ  
作・代表作である「牛乳石鹸モンサヴォン」をはじめ、  
「ランクハム」の原画など、初期から中期の作品50点  
を紹介。戦後のパリで、大戦の苦しい時代を乗り越え  
た人々の心の飢えを癒したサヴィニャックのポスター  
が、時代を越えて、不安定で未来が見えにくい現代  
に暮らす私たちの心をもしっかりと捉え、その魅力が  
不動のものであることが確認できる展覧会となった。

### Raymond Savignac; At the Age of 41, Maestro Born from Poster [Monsavon au lait]

Dates = June 6–28, 2011  
Supervision = Kijuro Yahagi  
Cooperation = Bibliothèque Forney, Suntory Holdings  
Ltd., Kawasaki City Museum, Guy Antique Gallery  
Support = Ambassade de France au Japon  
Artist Profile = Raymond Savignac was born in Paris  
in 1907. He studied at Ecole Lavoisier in Paris, and in  
1935 began studying under A.M. Cassandre, titan of  
Art Deco. In 1949, during a joint exhibition with Bernard  
Villermot, his Monsavon soap poster caught the eye of  
that company's president, and he was formally hired,  
leading to his full-fledged debut. Thereafter he quickly  
amassed a wealth of admirers and received work  
assignments not only from French companies such as  
Air France, Michelin and Perrier, but also from  
numerous Japanese and American companies like  
Suntory, Life and Dumlop. He passed away in 2002.  
Exhibition Overview = As a poster artist, Raymond  
Savignac had an unconventional biography, not getting  
a full-fledged start until 1949 at the age of 41. This  
exhibition introduced 50 of Savignac's works from his  
early to middle periods, including originals of his iconic  
"Monsavon Soap" poster that marked his debut and  
his "Ranque" ham poster. In postwar Paris, Savignac's  
posters brought comfort to the hearts of all those who  
had survived the harsh war years. Today, in an age of  
instability and an opaque future, the same posters  
continue to captivate us; and this was an exhibition that  
enabled us to affirm their unchanging appeal.





## 2011 ADC展

会期＝2011年7月4日―28日

受賞作家＝○ADCグランプリ＝佐々木宏＋森本千絵＋児玉裕一＋権八成裕 ○ADC特別賞＝Sプロジェクト制作委員会と出演者のみなさん ○ADC会員賞＝渡邊良重＋宮田織、佐野研二郎＋佐々木宏 <以下G8にて展示>○ADC賞＝正親篤＋田中嗣久＋東畑幸多、多田琢＋麻生哲朗＋岡康道、小杉幸一、長崎りかこ、柿木原政広＋トゥルーリ・オカモチェク、本村耕平、立花文穂、白井陽平、加藤建吾＋数井啓介、後智仁 ○原弘賞＝大黒大悟  
展示概要＝ADC（東京アートディレクターズクラブ）は、1952年の創立以来日本の広告・デザインを牽引する活動を続けており、会員により選出されるADC賞は、その年の日本の広告・デザイン界の最も名誉あるものの一つとして注目を集める。2011年度ADC賞は、10年5月から11年4月までの1年間に発表された多ジャンルにおよぶ約8,500点の応募作品の中から、76名のADC会員によって厳正な審査が行われ選出された。本展ではこの審査会で選ばれた受賞作品と優秀作品を、ggg[会員作品]、G8[一般作品]の2会場で紹介。グラフィック、広告作品の最高峰に輝く作品の数々が勢ぞろいした。

## 2011 Tokyo Art Directors Club Exhibition

Dates = July 4–28, 2011

**Award Winners** = Grand Prize: Hiroshi Sasaki + Chie Morimoto + Yuichi Kodama + Naruhiro Gomp Special Award: S-Project Production Committee and the Performers Members' Award: Yoshie Watanabe + Satoru Miyata, Kenjiro Sano + Hiroshi Sasaki ADC Award (shown at Creation Gallery G8): Atsushi Oogi + Tsuguhisa Tanaka + Kota Tohata, Taku Tada + Tetsuro Aso + Yasumichi Oka, Koichi Kosugi, Rikako Nagashima, Masahiro Kakinokihara + Trúlie Okamockč, Kohei Motomura, Fumio Tachibana, Yohei Shirai, Kengo Kato + Kelsuke Kazui, Tomohito Ushiro Hara-Hiromu Prize: Daigo Daikoku  
**Exhibition Overview** = Since its founding in 1952, the Tokyo Art Directors Club (ADC) has continuously undertaken activities to promote advertising and design in Japan. The Tokyo ADC Awards garner attention as one of the highest honors presented in Japan's advertising and design fields each year. The 2011 award winners were chosen, by 76 club members, from roughly 8,500 entries in numerous genres released between May 2010 and April 2011. The award-winning and other outstanding works were shown at two venues: ggg (works by ADC members) and G8 (works by non-members). Together they offered visitors a rich panorama of the year's most brilliant achievements in graphics and advertising.



## [ジー ジー ジー ジー] グルーヴィジョンズ展

会期＝2011年8月4日―27日

作家略歴＝1993年に京都で設立。PIZZICATO FIVEのステージビジュアルなどを中心に活動。97年に拠点を東京に移動。以来グラフィックとモーショングラフィックを中心に、様々な領域、クライアントのデザインを手がけている。94年にオリジナルキャラクター chappieを開発。99年に3枚のシングル、1枚のアルバムを発表し、京都高島屋、NTTドコモ、富士フイルム、JTBなどのブランドイメージキャラクターとして活動する。作品集、展覧会多数。  
展示概要＝国内外の現代美術展などに出品されてきた chappieをはじめ、音楽のためのグラフィック、パッケージ、雑誌のデザイン、モーショングラフィック、VI、CIなど、グルーヴィジョンズの多岐にわたる代表的デザインワーク200点と、本展のために新たに作り出されたオリジナル作品のインスタレーションにより構成。アートとデザインの境界などものともせずに軽々と行き来しつつ、まさにグルーヴィジョンズという表現の中にもグラフィックの普遍性が潜むという、ユニークなスタンスを持つ彼らの世界が再現された、パワフルな展覧会となった。

## gggg: Groovisions Exhibition

Dates = August 4–27, 2011

**Artist Profile** = Groovisions was formed in Kyoto in 1993, and its early activities centered on the creation of stage visuals for the pop music group Pizzicato Five. In 1997 they shifted their base to Tokyo, and since that time, working as a design studio, they have developed designs, notably graphics and motion graphics, for clients in diverse fields including the music group Rip Slyme, the Nishi-Nippon City Bank, Nike and Expo 2005. In 1994 they developed the original mascot character "chappie." In 1999 chappie released three singles and an album, and the character has served as brand image for NTT DoCoMo, Fujifilm and JTB. Groovisions has published numerous collections and held many exhibitions.  
**Exhibition Overview** = The exhibition featured 200 of Groovisions' representative design works spanning numerous fields, including their "chappie" character widely shown at contemporary art exhibitions, etc. worldwide, their graphics for musicians, package designs, magazine art direction and editorial design, motion graphics, VI, CI, etc. Also on show was an original installation newly created for this exhibition. The exhibition was a powerful re-creation of Groovisions' unique world, a demonstration of how they move with light-footed ease across the boundaries separating art and design, and of the universality lurking in the graphics realm.



## 工藤青石展「形と色と構造の感情」

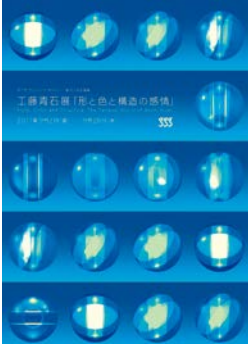
会期＝2011年9月2日―28日

作家略歴＝1964年東京生まれ。88年東京芸術大学卒業。同年資生堂入社。92-96年パリ勤務。2005年に独立し、デザイナー平野敬子と共にコミュニケーションデザイン研究所(CDL/Communication Design Laboratory)設立。「コミュニケーションをデザインする」という視点に立ち、プロダクトデザインからブランドイメージのディレクションまで、分野を横断的に活動を行う。  
展示概要＝工藤青石氏の創りあげるパッケージデザインは、パッケージという概念を超えて、まるでアートオブジェのように美しい。その実、消費者との関係性を徹底的に考え抜いた、コミュニケーションデザインの集約でもある。本展では自身のクリエイションを「形と色と構造」という視点から捉えた。より直感的で素直な感性から生まれる「形」を出発点に、そこから実際の商品へと「色」付け、つまりブランディングされ、さらにはその世界観をどう展開し、人々に認知してもらうか、その「構造」を考える。そんな工藤氏のデザインプロセスを表現した展示構成となった。1階はアートインスタレーションのような趣で、そのインパクトある美しさが際立った。

## Form, Color and Structure: The Sensual World of Aoshi Kudo

Dates = September 2–28, 2011

**Artist Profile** = Aoshi Kudo was born in Tokyo in 1964. In 1988 he graduated from Tokyo National University of Fine Arts and Music and joined Shiseido. From 1992 to 1996 he was posted in Paris. In 2005 he left Shiseido and established Communication Design Laboratory together with designer Keiko Hirano. He is active across a broad spectrum of fields, from product design to brand image direction, always maintaining his perspective of "designing communication."  
**Exhibition Overview** = The package designs created by Aoshi Kudo transcend the concept of packaging; they are beautiful enough to stand as objects of art. What they truly also are encapsulations of communication design derived from exhaustive consideration of the relationship between the product and the consumer. For this exhibition Kudo approached his creations from the perspective of "form, color and structure." He begins from the "form" born from his more intuitive and unforced sensibility; next he adds "color," i.e., branding, to the actual product; and then he considers how to manifest his worldview and get people to recognize it. The exhibition was configured to express this design process. The ground floor of the gallery served as an art installation, and its powerful beauty was truly outstanding.



## 100 ggg Books 100 Graphic Designers

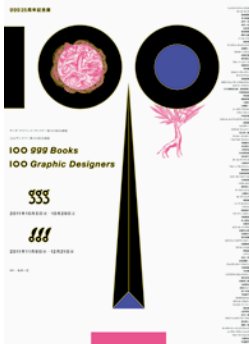
会期＝2011年10月5日―29日

監修＝永井一正  
展示作家＝H.トマシェフスキ、P.ランド、亀倉雄策、早川良雄、田中一光、永井一正、松永真、福田繁雄、勝井三雄、S.J.ス、栗津潔、I.チャマイエフ、佐藤晃一、H.マチス、仲條正義、奥村敬正、B.ムナリー、浅葉克己、中村誠、M.グレイザー、サイトウマコト、青葉益輝、J.ミューラー＝ブロックマン、L.ドーフスマン、K2、宇野重吉、和田誠、横尾忠則、大橋正、山城隆一、S.クワスト、A.チャン、戸田正寿、S.エイドリッグヴィチウス、葛西薫、U.G.サト、スタジオ・ドゥンパー、河口洋一郎、G.ランボー、H.ロイビン、河原敏文、木村恒久、大貫卓也、日比野克彦、松井桂三、P.デヴィス、小島良平、B.モングッツィ、岡本滋夫、矢萩喜從郎、P.ベルナル、木田安彦、I.ルビ、渡本唯人、U.レシュ、上條喬久、P.シェア、原研哉、H.ルビン、ドワット、副田高行、P.アーナルディ、河野愚忠、井上嗣也、佐藤卓、P.メンデル、佐藤可士和、石岡謙一、青木克憲、S.サグマイスター、佐藤雅彦、タナカノリコ、野田皿、シアン、永井一史、田中頼敬一、A.グルマン、中島英樹、木村勝、N.トロックスラー、廣村正彰、佐野研二郎、中島信也、前田ジョン、佐々木 宏、平野敬子、M/M(Paris)、N.プロディ、M.フーバー、細谷融、山形孝史、北川一成、R.シュライヨウグ、新村則人、服部一哉、ゼダイナース・リッパリックス、R.サヴィニャック、グルーヴィジョンズ、工藤青石、杉浦康平  
展示概要＝ggg開設25周年と「ggg Books(世界のグラフィックデザインシリーズ)」(1992年創刊)100号刊行を記念しての展覧会。ggg Booksに登場した100組の代表作100点(1組1作品)を通じて世界のグラフィックデザインを展望した。また電子書籍版ggg Booksをお披露目。百花繚乱、100組の個性を窮尽した展覧会。

## 100 ggg Books 100 Graphic Designers

Dates = October 5–29, 2011

**Supervision** = Kazumasa Nagai  
**Featured Artists** = H. Tomaszewski, P. Rand, Y. Kamekura, Y. Hayakawa, I. Tanaka, K. Nagai, S. Matsunaga, S. Fukuda, M. Katsui, S. Bass, K. Awazu, I. Chernyayeff, K. Sato, H. Matthies, S. Nakajo, Y. Okumura, B. Munari, K. Asaba, M. Nakamura, M. Glaser, M. Saito, M. Aoba, J. Muller-Brockmann, L. Dorfsman, K2, A. Uno, M. Wada, T. Yokoo, T. Ohashi, R. Yamashiro, S. Chwast, A. Chan, S. Toda, S. Eidrigevicius, K. Kasai, U. G. Sato, Studio Dumber, Y. Kawaguchi, G. Rambow, H. Leupin, T. Kawahara, T. Kimura, T. Onuki, K. Hibino, K. Matsui, P. Davis, R. Koijima, B. Monguzzi, S. Okamoto, K. Yahagi, P. Bernard, Y. Kida, I. Lupi, T. Nadamoto, U. Loesch, T. Kamiyaji, P. Scher, K. Hara, H. Lubalin, Draft, T. Soeda, P. Arnaldi, T. Kono, T. Inoue, T. Satoh, P. Mendell, K. Sato, E. Ishioka, K. Aoki, S. Sagmeister, M. Sato, N. Tanaka, N. Noda, C. Yan, K. Nagai, K. Tanaami, A. Gelman, H. Nakajima, K. Kimura, N. Troxler, M. Hiromura, K. Sano, S. Nakajima, J. Maeda, H. Sasaki, K. Hirano, M/M(Paris), N. Brody, M. Huber, G. Hosoya, T. Yamagata, I. Kitagawa, R. Schraivogel, N. Shinmura, K. Hattori, The Designers Republic, R. Savignac, Groovisions, A. Kudo, K. Sugira  
**Exhibition Overview** = The exhibition commemorated both the 25th anniversary of ggg's founding and the publication of the 100th volume in the ggg Books series ("World Graphic Design") launched in 1992. One representative work by each of the 100 featured artists or groups was shown, giving visitors a broad and kaleidoscopic overview of graphic design around the world, along with a glimpse into the unique individuality of each featured artist or group. The very first e-book version of the series was also unveiled.



## イデオポリス東京：スクール・オブ・ヴィジュアルアーツ／美術学修士課程卒業制作展

会期＝2011年11月4日－26日

SVA MFA デザインプログラム＝スクール・オブ・ヴィジュアルアーツ美術学修士課程デザインプログラム「創造者／起業家（アントレプレナー）としてのデザイナー」：スティーヴン・ヘラーとリタ・タラリコが共同設立（1997年）、共同学科長。実際のデザインコンセプトを実用レベルで具現化するため、商業ベースで制作、販売するなどして授業を展開している。このように焦点を絞ることで、その後の即戦力を身につけることを目的としている。

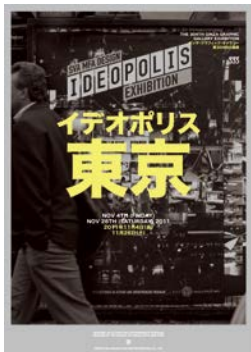
展示概要＝2011年度のSVA MFA デザインプログラム卒業生による卒業制作展をggg用にアップグレード。2年間のコースで院生たちは、さまざまな実際のクライアントワークを進めるかのように、リサーチ、構想、開発、制作、マーケティングを行い、独創的な製品の開発とキャンペーン展開に切磋琢磨する。その成果の結集が「イデオポリス」＝アイデアのまち。本展では、キャンペーン、立体作品、映像、パフォーマンス、アプリケーションなど、様々な方法・メディアで実現されたそれらの成果を、映像とiPadによるプレゼンテーション形式で紹介。

## SVA MFA Design: Ideopolis-Tokyo Exhibition

Dates = November 4–26, 2011

SVA MFA Design Program = School of Visual Arts Master of Fine Arts Design Program “The Designer as Author + Entrepreneur” was co-founded in New York in 1997 by Steven Heller and Lita Talarico. Faculty members include Milton Glaser and Stefan Sagmeister. In a quest to achieve international design concepts of a commercially viable level, classes include production and marketing on an entrepreneurial basis. This focus is aimed at enabling students to acquire the ability to go right to work after graduation.

Exhibition Overview = The exhibition showed works created as graduation thesis projects by students of the SVA MFA Design Program class of 2011, fine-tuned for their showing at ggg. The students of this two-year graduate program undertake research, conceptualization, development, production and marketing just as though they were developing a real product for a real client, assiduously applying themselves to the development and promotion of an original work. The results were put together as “Ideopolis,” a city of ideas. The exhibition used video and iPad presentations to introduce the works the 2011 class of graduates produced using diverse methods and media, including campaigns, three-dimensional works, video, performance, applications, etc.



## 杉浦康平・マンダラ発光

会期＝2011年12月1日－24日

展示構成＝中沢仁美

作家略歴＝1932年東京生まれ。グラフィックデザイナー。神戸芸術工科大学名誉教授および同大アジアデザイン研究所所長。50年代後半からポスター、雑誌、レコードジャケット、展覧会カタログなどのデザインを手がけ、70年頃よりブックデザインに力を注ぐ。アジアの図像研究の第一人者としても知られ、アジア文化を紹介する展覧会の企画・構成や造本を数多く手がける。日宣美賞、芸術選奨新人賞、毎日芸術賞などを受賞。97年紫綬褒章受賞。

展示概要＝多彩な活動の中でも、とりわけ杉浦氏が尋常ならざる情熱を傾けるブックデザイン。中でも格別の光彩を放ち、その系譜の頂点に位置するのが、「マンダラ」を主題にした豪華限定本。本展では、「伝真言院両界曼荼羅」、「天上のヴィーナス・地上のヴィーナス」、「西藏曼荼羅集成」の3冊を、異なる3つの様式で、3つの空間に展開した。パネル展示と映像作品により、「日本の密教＋イタリア（ルネッサンス）＋チベット仏教」という3つのマンダラの響き合いと、「二にして一」、「多にして一」の理念から創り出された壮麗な造本宇宙の魅力を紹介。

## Luminous Mandala: Book Designs of Kohei Sugiura

Dates = December 1–24, 2011

Display Design = Hitomi Nakazawa

Artist Profile = Graphic designer Kohei Sugiura was born in Tokyo in 1932. He is currently Professor Emeritus of Kobe Design University and Director of the university's Research Institute of Asian Design (RIAD). In the late 1950s he began design work primarily with cultural overtones, including posters, magazines, record jackets and exhibition catalogs. Then starting around 1970 he began focusing on book design. Recognized as an authority on Asian iconography, Sugiura has undertaken the planning and design of numerous exhibitions and books introducing Asian cultures.

Exhibition Overview = Among all his activities of remarkable breadth, Kohei Sugiura devotes his talent most passionately to book design; and standing at the apex are his dazzling limited-edition luxuriously bound books having to do with Mandalas. This exhibition was a showing of three such works. Each work was displayed in its own space and in its own way. Through panel displays and videos, he demonstrated the mutual resonances between Japanese Esoteric Buddhism, the Italian Renaissance and Tibetan Buddhism. The exhibition was a heralded introduction to the appeal of his lavish bookmaking cosmos created from the belief in “unity in duality” and “unity in plurality.”



## DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展 IV 田中一光ポスター 1980-2002

会期＝2012年1月13日－2月25日

監修＝永井一正

作家略歴＝1930年奈良市生まれ。50年京都市立美術専門学校（現・京都芸大）卒業。鐘淵紡績、産経新聞等を経て、60年日本デザインセンター創立に参加。63年田中一光デザイン室主宰。日宣美会員賞、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ銀賞、毎日デザイン賞、NYADC金賞、東京ADC会員最高賞など受賞多数。紫綬褒章受賞、文化功労者表彰。ミラノ市現代美術館他、国内外で個展開催。02年1月10日永眠。

展示概要＝2010年1月に開催した、DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵の田中一光作品による巨星回顧展「田中一光ポスター1953-1979」に続く第二弾。1980年から晩年期2002年までのポスター作品約920点の中から150点を選抜。世界屈指のポスター作家としての評価を揺るがないものとしたこの後半期を物語る代表作、「Nihon Buyo」や「サルヴァトーレ・フェラガモ展[華麗なる靴]」、あるいはカリグラフィックな要素を取り入れ新たな境地を拓いた「舞踏花伝」など、生涯を通じて旺盛な創作活動に邁進した軌跡を明らかにした。

## DNP Graphic Design Archives Collection IV Ikko Tanaka Posters 1980-2002

Dates = January 13 – February 25, 2012

Supervision = Kazumasa Nagai

Artist Profile = Ikko Tanaka was born in Nara City in 1930. He graduated from Kyoto City College of Arts (now Kyoto City University of Arts) in 1950. After working at Kanegafuchi Spinning Co. (now Kanebo) and Sankei Shimbun (newspaper), in 1960 he was a founding member of Nippon Design Center. In 1963 he established Ikko Tanaka Design Studio. Solo exhibitions of his works have been held at Seibu Museum of Art, Padiglione d'Arte Contemporanea (PAC) in Milan, and Museu de Arte de Sao Paulo. Tanaka passed away on January 10, 2002.

Exhibition Overview = This exhibition was a follow-up to a retrospective of Ikko Tanaka's early posters (1953-1979) held at ggg in January 2010. This time, 150 works were selected from his output of roughly 920 poster works created between 1980 and 2002. This, his later period includes representative works that secured his acclaim as one of the world's foremost poster artists: including “Nihon Buyo,” “Salvatore Ferragamo: The Art of the Shoe,” and “Butoh Kaden,” a work that opened up new artistic territory with its incorporation of calligraphic elements. The exhibition shed light on Tanaka's robust pursuit of creative activity through to the end of his life.



## ロトチェンコー彗星のごとく、ロシア・アヴァンギャルドの寵児ー

会期＝2012年3月2日－27日

監修＝アレクサンドル・ラヴレンチエフ

副監修・展示構成＝矢萩喜徳郎

後援＝在日ロシア連邦大使館、ロシア連邦交流庁  
作家略歴＝1891年サンクトペテルブルグ生まれ。ロシア構成主義を代表する芸術家。絵画、建築、舞台美術や衣装をはじめ、グラフィックデザインも数多く手がけた。パリ万国博覧会（1925）ではソ連部門の展示「労働者クラブ」のデザインを担当、グラン・パレでの展示構成も行う。1956年没。

展示概要＝20世紀初頭、革命ロシアの前衛芸術運動の強力な推進力となったロシア構成主義の時代に、彗星のごとく現れたのが、アレクサンドル・ロトチェンコ。本展は彼の孫にあたるアレクサンドル・ラヴレンチエフ氏の収蔵作品から、原画、広告ポスター、コラージュ、写真など、グラフィックデザインと写真に焦点を当て約160点を紹介。後世のグラフィックにも大変な影響力を持つ芸術家であるロトチェンコの、いまなお新鮮でエネルギッシュな作品の数々が会場を彩った。矢萩氏によるロシア構成主義の精神を表現した会場構成も注目された。

## Rodchenko – Innovator of Russian Avant-Garde –

Dates = March 2–27, 2012

Supervision = Aleksandr Lavrentiev

Supervisory Assistance & Exhibition Design = Kijuro Yahagi

Support = Embassy of the Russian Federation in Japan, Rossotrudnichestvo

Artist Profile = Aleksandr Rodchenko, born in St. Petersburg in 1891, was a leading exponent of Russian Constructivism. His areas of endeavor broadly encompassed. At the Paris Exposition of 1925, He was in charge of the design of the USSR Pavilion “Workers’ Club”, performed display layout design at the Grand Palais. Rodchenko died in 1956. Exhibition Overview = Rodchenko came into sudden prominence in the era of Russian Constructivism, a powerful force that propelled the avant-garde movement during the days of the Russian Revolution in the early 20th century. This exhibition introduced some 160 of his works with a focus on graphic design and photography, including both original and printed graphics, advertising posters and collages all from the collection of Aleksandr Lavrentiev, Rodchenko's grandson. Rodchenko had a profound influence on later graphics, and here numerous of his works, still fresh and overflowing with artistic energy, filled the gallery. The gallery layout by Kijuro Yahagi, created to express the spirit of Russian Constructivism, was also brilliant.



# Review of ddd 2011-2012

## ddd 展覧会概要

### GRAPHIC WEST 4 「奥村昭夫と仕事」展

会期＝2012年1月18日－3月8日  
作家略歴＝1943年東京生まれ。堀川高校商業科卒業後、62年第一紙行に入社、65年退社。アドラ、ユービーブレンを経て72年バックー・ジグクリエイト設立。2001年に解散後、インターメディアラボ内に研究室開設。07年より京都大学客員教授、08年西北大学（西安）客座教授就任。主な仕事に京都大学iPS細胞研究所、江崎グリコ、ロート製薬VI、月桂冠、牛乳石鹸共進社、ハウス食品、近鉄百貨店のパッケージ等。著書に「デザイン発見」（六耀社）、「干支の本」（アムズアートズプレス）、「奥村昭夫の平面設計」（広西美術出版社）他。朝日広告賞他受賞多数。  
展示概要＝過去の様々な「奥村昭夫と仕事」を検証するとともに、世界的に有名になったiPS細胞研究所の空間デザインやシンボルマーク等の「大学研究活動のイメージ戦略」やVI、さらには各界から注目を集めるユニークなデザイン教育など、京都大学客員教授としての活動成果を紹介。さまざまな活動やデザインを展示するだけでなく、会場の一部を研究室とし奥村氏自身が在廊、実際に仕事をしている姿を披露し、来場者とのコミュニケーションの場ともなった。

### GRAPHIC WEST 4: “Okumura Akio and Works” Exhibition

Dates = January 18 – March 8, 2012  
Artist Profile = Akio Okumura was born in Tokyo in 1943. In 1972 he established Packaging Create. After that organization disbanded in 2001, he set up a lab within IMI-Lab. Since 2007 he is a visiting professor at Kyoto University, and in 2008 he became a visiting professor at Northwest University in Xi'an, China. His major works include VI for the Center for iPS Cell Research and Application at Kyoto University, Ezaki Glico and Rohto Pharmaceutical, and packaging, etc. for Cow Brand Soap and House Foods. He has also published several books (in Japanese) and won the Asahi Advertising Award and many other prizes.  
Exhibition Overview = In addition to presenting an overview of Akio Okumura's various past works, the exhibition also introduced the fruits of his activities as a visiting professor at Kyoto University: for example, his world-famous spatial designs and logo for the Center for iPS Cell Research and Application (part of the university's research activities image strategy), VI, and his unique design education work, which has garnered widespread attention. Besides showing Okumura's activities and designs, part of the gallery was converted into a studio where he actually worked, in the process creating an opportunity for interaction between this featured designer and the gallery's visitors.



### 秀英体100

会期＝2011年3月22日－5月11日  
監修＝永井一正  
展示デザイン＝大日本タイポ組合  
新作出展作家＝井上嗣也、葛西薫、勝井三雄、澁谷克彦、杉崎真之助、高橋善丸、立花文穂、仲條正義、中村至男、南部俊安、服部一成、三木健、コントラプンクト（デンマーク）＜以下モリサワ本社ビルにて展示＞浅葉克己、佐藤晃一、佐野研二郎、杉浦康平、祖父江慎、永井一正、中島英樹、長嶋りかこ、原研哉、平野敏子、平野甲賀、松永真  
展示概要＝1912年に誕生した、DNPのオリジナル書体「秀英体」の生誕100年を記念する展覧会。築地体とならび「明朝活字の二大潮流」として、その後の和文書体に大きな影響を与えてきた秀英体の魅力を伝える。「四季」をテーマに制作された新作ポスターをdddとモリサワの2会場で展示。また活版印刷からデジタル活用まで、時代とともに大きく変化してきた秀英体の100年を、書籍、ポスター、広告等、さまざまな作品を通して展覧した。秀英体の美しい骨格にひそむ魅力を探るとともに、次なる100年へ向けた新たなデジタルコミュニケーションへの展開を宣言する機会となった。

### Shueitai 100

Dates = March 22 – May 11, 2011  
Supervision = Kazumasa Nagai  
Exhibition Design = Dainippon Type Organization  
Designers Exhibiting New Works = K.Hattori, T.Inoue, K.Kasai, M.Katsui, K.Miki, M.Nakajo, N.Nakamura, T.Nambu, K.Shibuya, S.Sugisaki, F.Tachibana, Y.Takahashi, Kontrapunkt (Denmark)  
\*The followings were exhibited at Morisawa Head Office: K.Asaba, K.Hara, Ke.Hirano, Ko.Hirano, S.Matsunaga, K.Nagai, R.Nagashima, H.Nakajima, K.Sano, K.Sato, S.Sobue, K.Sugiura  
Exhibition Overview = This exhibition was mounted to celebrate the 100th year since the creation of Shueitai, an original printing type launched by DNP in 1912 and still in wide use. To convey Shueitai's ageless appeal, two venues – ddd gallery and Morisawa Head Office - were devoted to new poster works by 24 graphic designers and one design team on the theme of “the four seasons.” Also, through a broad array of works including books, posters and advertising, an overview of Shueitai's 100 years amidst the dynamic changes from the days of movable type to its current applications in the digital era was demonstrated. The exhibition not only probed the enduring appeal of the cleanly structured Shueitai typeface but also was a timely opportunity to proclaim its development as a new digital communication format for the next 100 years.



### TDC展 2011

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2011

会期＝2011年5月20日－7月2日  
Dates = May 20 – July 2, 2011



### 服部一成二十一年夏大阪

Kazunari Hattori Summer 2011 in Osaka

会期＝2011年7月13日－9月2日  
Dates = July 13 – September 2, 2011



### 2011 ADC展

2011 Tokyo Art Directors Club Exhibition

会期＝2011年9月14日－10月27日  
Dates = September 14 – October 27, 2011



### 100 ggg Books

100 Graphic Designers

100 ggg Books 100 Graphic Designers

会期＝2011年11月9日－12月21日  
Dates = November 9 – December 21, 2011





## Review of CCGA 2011

### CCGA 展覧会概要

#### 秀英体100

Shueitai 100

会期 = 2011年6月11日—9月11日  
Dates = June 11 – September 11, 2011



#### 幾何学的抽象の世界： タイラーグラフィックス・ アーカイブコレクション展 Vol.23

The World of Geometric Abstraction: 23rd Exhibition of  
Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

会期 = 2011年9月17日—12月25日  
Dates = September 17 – December 25, 2011



## 1986

- 3月 1回 大橋正展 野菜のイラストレーション
- 4月 2回 福田繁雄展 Illustric412
- 5月 3回 奥村毅正展 燦々彩譜
- 6月 4回 秋山育展 ピクチャーレリーフ
- 7月 5回 '86 Tokyo ADC展
- 8月 6回 アートワークス展Ⅰ
- 9月 7回 佐藤晃一展 箱についてー2
- 10月 8回 栗津潔展 エノタメノジブンカクメイ
- 11月 9回 追悼・ハーバート・バイヤー展
- 12月 10回 K2 Live!展

## 1987

- 1月 11回 辻修平 いろはの絵展
- 2月 12回 花の万博+博覧会のシンボルマーク展
- 3月 13回 藤嶋正樹展 geometric love
- 4月 14回 松永真 毎日デザイン賞受賞記念展
- 5月 15回 安西水丸 二色展
- 6月 16回 ルウ・ドーフスマンとCBSの  
クリエイティブワークス展
- 7月 17回 '87 Tokyo ADC展
- 8月 18回 アートワークス展Ⅱ
- 9月 19回 五十嵐威暢の立体数字展
- 10月 20回 青葉益輝プリンティングアート展
- 11月 21回 オルガー・マチスのポスター展
- 12月 22回 ミルトン・グレイザー展

## 1988

- 1月 23回 木村勝・バクーエーピングディレクション展
- 2月 24回 谷口広樹展 猿の記憶
- 3月 25回 銀座百点 表紙原画展
- 4月 26回 吉田カズ展 描き下し刷り下し
- 5月 27回 AGI '88 Tokyo展
- 6月 28回 イッセイ・ミヤケのポスター展
- 7月 29回 '88 Tokyo ADC展
- 8月 30回 アートワークス展Ⅲ
- 9月 31回 情報ポスター・リクルート展
- 10月 32回 早川良雄「女」原画展
- 11月 33回 仲條正義展 NAKAJOISH
- 12月 34回 スタシスのポスターとイラストレーション展

## 1989

- 1月 35回 ショッピングバッグ・デザイン展
- 2月 36回 矢萩喜從郎展
- 3月 37回 Texture展  
皆川魔鬼子+田原桂一+山岡茂
- 4月 38回 タナカノリユキ展 Gokan-都市の表層
- 5月 39回 オトル・アイヒャー展
- 6月 40回 操上和美展 Photographies
- 7月 41回 若尾真一郎展 Wakao Collection
- 8月 42回 アートワークス展Ⅳ
- 9月 43回 永井一正展
- 10月 44回 Europalia '89 Japan  
新作ポスター 12人展
- 11月 45回 チャールズ・アンダーソン展
- 12月 46回 清原悦志の仕事展 Hommage

## 1990

- 1月 47回 秋月繁展 遊びの箱
- 2月 48回 菊地信義展 装幀の本「棚」
- 3月 49回 原田雅夫展 木版画「馬」
- 4月 50回 田中一光展 グラフィックアート植物園
- 5月 51回 山城隆一展 猫のいないイラスト
- 6月 52回 松井桂三展 3D
- 7月 53回 寺門孝之展 遺伝子導入天使
- 8月 54回 アートワークス展Ⅴ
- 9月 55回 田原桂一展 光の香り

- 10月 56回 浅葉克己の新作展 アジアの文字
- 11月 57回 伊勢克也展 イメージのマカロニ
- 12月 58回 蓮田やすひろ展 ビープル

## 1991

- 1月 59回 舟橋全二展
- 2月 60回 太田徹也展 ダイアグラム
- 3月 61回 ペア・アーノルディ展
- 4月 62回 澤田泰廣展 P2(Painting×Printing)
- 5月 63回 新井苑子展 インスピレーションを描く
- 6月 64回 Communication & Print  
新作ポスター 10人展
- 7月 65回 中垣信夫+中垣デザイン事務所展
- 8月 66回 アートワークス展Ⅵ
- 10月 67回 Trans-Art 91展
- 12月 68回 '91 Tokyo ADC展

## 1992

- 1月 69回 アイヴァン・チャマイエフ展 コラージュ
- 2月 70回 立花ハジメ初の個展
- 3月 71回 第4回東京TDC展
- 4月 72回 ヘンリック・トマシェフスキ展
- 5月 73回 シーモア・クワスト展 メタル彫刻
- 6月 74回 鹿目尚志展 BOX・XX
- 7月 75回 中村誠 個展
- 8月 76回 リック・バリセンティ展
- 9月 77回 葛西薫展 'AERO'
- 10月 78回 瀧本唯人、宇野亜喜良、和田誠、  
山口はみる展
- 11月 79回 ボール・ランド展
- 12月 80回 フロシキ展

## 1993

- 1月 81回 小島良平展 Tropica Grafica
- 2月 82回 稲越功一展 アウト・オブ・シーズン
- 3月 83回 '92 Tokyo ADC展
- 4月 84回 第5回東京TDC展
- 5月 85回 U.G.サトウのポスター展 "Freedom"
- 6月 86回 オマージュ 向秀男展
- 7月 87回 文字からのイマジネーション展
- 8月 88回 現代香港のデザイン8人展
- 9月 89回 勝井三雄展 光の国
- 10月 90回 河村要助、矢吹申彦、湯村輝彦、  
安西水丸展
- 11月 91回 ソール・パス展
- 12月 92回 グリーティング・ポップアップ13人展

## 1994

- 1月 93回 栗津潔展 H<sup>2</sup>O Earthman
- 2月 94回 第6回東京TDC展
- 3月 95回 上條喬久展 Windscape Mindscape
- 4月 96回 片山利弘展
- 5月 97回 永井一正展
- 6月 98回 オランダのグラフィックデザイン100年展
- 7月 99回 '94 Tokyo ADC展
- 8月 100回 グラフィック・グズ展
- 10月 101回 平野甲賀「文字の力」展
- 10月 九州の九人の九つの個性展
- 11月 102回 亀倉雄策ポスター新作展
- 12月 103回 原研哉展
- 12月 土橋とし子、中村幸子、メグ・ホソキ3人展

## 1995

- 1月 104回 ブルーノ・ムナーリ展
- 2月 105回 日本のブックデザイン展1946-95
- 3月 106回 第7回東京TDC展
- 4月 107回 ビーター・ブラッティンガ展

- 5月 108回 田中一光展 人間と文字
- 6月 109回 ニクラウス・トロックスラーポスター展
- 7月 110回 '95 Tokyo ADC展
- 8月 111回 リズム&ヒューズの  
コンピュータグラフィックス展
- 9月 112回 八木保展 自然観
- 9月 特別展 世界のグラフィック20人展  
ggg Books 20冊刊行記念
- 10月 113回 モダン・タイポグラフィの流れ展ー1
- 11月 114回 戸田正寿・イヤイヤランド展
- 12月 115回 日本のイラストレーション50年展

## 1996

- 1月 116回 蓮田やすひろ展 お江戸で、ゆらゆら
- 2月 117回 モダン・タイポグラフィの流れ展ー2
- 3月 118回 ポスター23人展 イン・サンパウロ
- 4月 119回 第8回東京TDC展
- 5月 120回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
- 6月 121回 勝岡重夫タイポグラフィックアート展
- 7月 122回 '96 Tokyo ADC展
- 8月 123回 前田ジョン「かみとコンピュータ」展
- 9月 124回 K2-黒田征太郎/長友啓典「二脚の椅子」展
- 10月 125回 チェコ・アヴァンギャルド・ブックデザイン  
1920s-’30s
- 11月 126回 Graphic Wave 1996  
青木克憲+佐藤卓+山形季央
- 12月 127回 アラン・ル・ケルネ展

## 1997

- 1月 128回 下谷二助展 人じん
- 1月 特別展 (CCGA)ジョセフ・アルバース展
- 2月 129回 大橋正展 体温をもつ野菜たち
- 3月 130回 東京TDC展
- 4月 131回 仲條正義○○○展
- 5月 132回 今日の雑誌8誌による・特集エコロジー展
- 6月 133回 横尾忠則ポスター展  
吉祥招福繁昌描き下ろし!
- 7月 134回 '97 Tokyo ADC展
- 8月 135回 河原敏文とボリゴン・ピクチュアズ展
- 9月 136回 メキシコ10人展
- 10月 137回 Graphic Wave 1997  
秋田寛+井上里枝+福島治
- 10月 特別展 「勝負勝負」10周年記念展
- 11月 138回 福田繁雄のポスター〈SUPPORTER〉
- 12月 139回 GLOBAL展 世界33人の  
デザイナーによるデュオポスター

## 1998

- 1月 140回 鈴木八朗展 8RO ART & AD
- 2月 141回 オーデルマット+ティッシ展
- 3月 142回 スタシス・エイドゥリゲヴィチウス展
- 4月 143回 東京TDC展'98
- 5月 144回 スタジオ・ドゥンパー展
- 6月 145回 山本容子展 オペラレッシン
- 7月 146回 '98 Tokyo ADC展
- 8月 147回 河口洋一郎展 電脳宇宙への旅
- 9月 148回 Graphic Wave 1998  
蝦名龍郎+平野敬子+三木健
- 10月 149回 グンター・ランボー展
- 11月 150回 フィリップ・アペローグ展
- 12月 151回 ヘルベルト・ロイピン展

## 1999

- 1月 152回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
- 2月 153回 日本のタイポグラフィック1946-95展
- 3月 154回 木村恒久構成フォト・グラフィックス展
- 3月 特別展 堀内誠一の仕事展雑誌づくりの決定的瞬間

- 4月 155回 '99 TDC展
- 5月 156回 現代ブルガリアのグラフィックデザイン展
- 6月 157回 日比野克彦展 誘拐したい
- 7月 158回 '99 ADC展
- 7月 特別展 前田ジョン One-line.com
- 8月 159回 矢萩喜從郎展
- 9月 160回 Graphic Wave 1999  
鈴木守+松下計+米村浩
- 10月 161回 FUSE展
- 11月 162回 松井桂三展
- 12月 163回 ボール・デイヴィスのポスター展
- 12月 特別展 アーヴィング・ベン  
三宅一生の仕事への視点

## 2000

- 1月 164回 Graphic Message for Ecology展
- 1月 特別展 篠山紀信&マニュエル・ルグリ展
- 2月 165回 ブルーノ・モングッツィ展  
形と機能の詩人
- 3月 166回 伊藤憲治展 医学誌「ステスコープ」の  
表紙デザイン半世紀
- 4月 167回 '00 TDC展
- 5月 168回 Poster Works Nagoya 12  
岡本滋夫+11人のデザイナーたち
- 6月 169回 なにわの、こてこてグラフィック展
- 7月 170回 2000 ADC展
- 8月 171回 日宣美の時代  
日本のグラフィックデザイン1951-70展
- 9月 172回 Graphic Wave 2000  
秋山具義+Tycoon Graphics+中島英樹
- 10月 173回 D-ZONE/戸田ツトム展
- 11月 174回 ビエール・ベルナルル展
- 12月 175回 本とコンピュータ展

## 2001

- 1月 176回 二〇〇一年木田安彦展
- 2月 177回 イタコ・ルビ展
- 3月 178回 "Spring has come"  
松永真、ディテールの競演。
- 4月 179回 01 TDC展
- 5月 180回 コントラプント展
- 6月 181回 原弘のタイポグラフィ展
- 7月 182回 2001 ADC展
- 8月 183回 瀧本唯人展 にんげんもよう
- 9月 184回 Graphic Wave 2001  
瀬谷克彦+永井一史+ひびのこづえ
- 10月 185回 ハングルポスター展
- 11月 186回 サイトウマコト展
- 12月 187回 チップ・キッド展

## 2002

- 1月 188回 ウーヴェ・レシュ展
- 2月 189回 宇野亜喜良展
- 3月 190回 デザイン教育の現場から：  
セント・ジュースト大学院の新手法
- 4月 191回 02 TDC展
- 5月 192回 DRAFT展
- 6月 193回 アラン・チャン展 東情西韻
- 6月 特別展 花森安治と暮らしの手帖展
- 7月 194回 2002 ADC展
- 8月 195回 タナカノリユキ展 OUT OF DESIGN
- 9月 196回 Graphic Wave 2002  
左合ひとみ+澤田泰廣+新村則人
- 10月 197回 SUN-AD人展
- 11月 198回 ブラジルのグラフィックデザイン展  
ブックデザインにみる今日のブラジル
- 12月 199回 ハーブ・ルバリン展

2003

- 1月 200回 田中一光 ポスターとグラフィックアート展
- 2月 201回 サディク・カラムスターファ展
- 3月 202回 現代中国平面設計展
- 4月 203回 03 TDC展
- 5月 204回 ファブリカ展 1994-03 混沌から秩序へ
- 6月 205回 空山基展
- 7月 206回 2003 ADC展
- 8月 207回 新島実展 色彩とフォントの相互作用
- 9月 208回 Graphic Wave 2003  
佐野研二郎＋野田風＋服部一成
- 10月 209回 副田高行「広告の告白」展
- 11月 210回 ステファン・サグマイスター展
- 12月 211回 河野鷹思展

2004

- 1月 212回 永井一正ポスター展
- 2月 213回 伊藤桂司・谷口広樹・ヒロ杉山展
- 3月 214回 雑誌をデザインする集団キャップ展
- 4月 215回 04 TDC展
- 5月 216回 佐藤卓展 PLASTICITY
- 6月 217回 現代デンマークポスターの10年
- 7月 218回 2004 ADC展
- 8月 219回 バーンブルック・デザイン展  
Friendly Fire
- 9月 220回 Graphic Wave 2004  
工藤青石＋GRAPH＋生意気
- 10月 221回 杉浦康平雑誌デザインの半世紀展
- 11月 222回 佐藤可士和展 BEYOND
- 12月 223回 もう一人の山名文夫展 1920s－70s

2005

- 1月 224回 七つの顔のアサハ展
- 2月 225回 バラリンジ・デザイン展
- 3月 226回 青木克憲XX展
- 4月 227回 05 TDC展
- 5月 228回 和田誠のグラフィックデザイン
- 6月 229回 チャマイエフ&ガイスマー展
- 7月 230回 2005 ADC展
- 8月 231回 佐藤雅彦研究室展
- 9月 232回 Graphic Wave 2005  
谷田一郎＋東泉一郎＋森本千絵
- 10月 233回 CCCP研究所展
- 11月 234回 祖父江慎＋cozfish展
- 12月 235回 スイスポスター 100年展

2006

- 1月 236回 亀倉雄策1915-1997展
- 2月 237回 野田風展
- 3月 238回 シアン展
- 4月 239回 06 TDC展
- 5月 240回 永井一史／HAKUHODO DESIGN
- 6月 241回 田名網敬一主義展
- 7月 242回 2006 ADC展
- 8月 243回 アレクサンダー・ゲルマン展
- 9月 244回 Graphic Wave 2006: School of Design  
古平正義＋平林奈緒美＋水野学＋山田英二
- 9月 特別展 AGI日本デザイン総会開催記念:掛け輪展
- 10月 245回 勝手に広告展(中村至男＋佐藤雅彦)
- 11月 246回 中島英樹展 CLEAR in the FOG
- 12月 247回 早川良雄展 日本のデザイン黎明期の証人

2007

- 1月 248回 EXHIBITIONS (Part I)
- 2月 EXHIBITIONS (Part II)
- 3月 249回 キムラカツ展: 問いボックス店
- 4月 250回 07 TDC展

- 5月 251回 ヘルムート・シュミット:  
デザイン イズ アティテュード
- 6月 252回 廣村正彰: 2D⇄3D
- 7月 253回 2007 ADC展
- 8月 254回 ワルシャワの風 1966-2006
- 9月 255回 佐野研二郎: ギンザ・サローネ
- 10月 256回 中島信也CM展:  
中島信也と29人のアートディレクター
- 11月 257回 Welcome to Magazine Pool:  
雑誌デザイン10人の越境者たち
- 12月 258回 Aoba Show:  
青葉益輝ワン・マン・ショー

2008

- 1月 259回 アーツダ! 戸田正寿ポスターアート展
- 2月 260回 グラフィックデザインの時代を築いた  
20人の証言 Interviews by 柏木博
- 3月 261回 TEXTASY:  
フロディ・ノイエンスジュヴァンダー展
- 4月 262回 08 TDC展
- 5月 263回 アラン・フレックチャー:  
英国グラフィックデザインの父
- 6月 264回 がんばれニッポン、を広告してきたんだ  
そう言えば、俺。応援団長佐々木●宏
- 7月 265回 2008 ADC展
- 8月 266回 Now Updating... THA/  
中村勇吾のインタラクティブデザイン
- 9月 267回 平野敬子「デザインの起点と終点と起点」
- 10月 268回 「白」原研哉展
- 11月 269回 M/M(Paris) The Theatre Posters
- 12月 270回 OYKOT Wieden+Kennedy Tokyo:  
10 Years of Fusion

2009

- 1月 271回 きらめくデザイナーたちの競演—  
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
- 2月 272回 Helvetica forever: Story of a Typeface  
ヘルベチカ展
- 3月 273回 DRAFT Branding & Art Director
- 4月 274回 09 TDC展
- 5月 275回 矢萩喜從郎展  
[Magnetic Vision／新作100点]
- 6月 276回 マックス・フーバー展
- 7月 277回 2009 ADC展
- 8月 278回 [ラストショウ]細谷巖アートディレクション展
- 9月 279回 銀座界隈限ガヤガヤ青春ショー  
～言い出しっぺ 横尾忠則～  
灘本唯人・宇野亜喜良・和田誠・横尾忠則4人展
- 10月 280回 山形季央展
- 11月 281回 北川一成
- 12月 282回 広告批評展 ひとつの時代の終わりと始まり

2010

- 1-2月 283回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ  
田中一光ポスター 1953－1979
- 3月 284回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ  
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング
- 4月 285回 TDC展 2010
- 5月 286回 TALKING THE DRAGON 井上綱也展
- 6月 287回 NB@ggg ネヴィル・プロディ 2010
- 7月 288回 2010 ADC展
- 8月 289回 ラルフ・シュライフォークル展
- 9月 290回 プッシュピン・バラダイム  
シーモア・クワスト | ボール・デヴィス |  
ミルトン・グレイザー | ジェームズ・マクミラン
- 10月 291回 海と山と新村則人
- 11月 292回 服部一成二千年十一月

- 12月 293回 EUPHRATES ユーフラテス展  
～研究から表現へ～

2011

- 1月 294回 秀英体100
- 2月 295回 イアン・アンダーソン／ザ・デザイナーズ・  
リパブリックがトーキョーに帰ってきた。
- 3月 296回 デザイン 立花文穂
- 4月 297回 TDC展 2011
- 5月 298回 佐藤晃一ポスター
- 6月 299回 レイモン・サヴィニャック展:  
41歳、『牛乳石鹸モンサヴォン』のポスターで  
生まれた巨匠
- 7月 300回 2011 ADC展
- 8月 301回 [ジー ジー ジー] グルーヴィジョンズ展
- 9月 302回 工藤青石展「形と色と構造の感情」
- 10月 303回 100 ggg Books 100 Graphic Designers
- 11月 304回 イデオボリス東京:  
スクール・オブ・ヴィジュアルアーツ／  
美術学修士課程卒業制作展
- 12月 305回 杉浦康平・マンダラ発光

2012

- 1-2月 306回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ  
田中一光ポスター 1980－2002
- 3月 307回 ロトチエンコ  
一瞥星のごとく、ロシア・アヴァンギャルドの寵児—





## 1992-2012

### 1992

- 1月 1回 Trans-Art 91展
- 3月 2回 アイヴァン・チャマイエフ展 コラージュ
- 4月 3回 第4回東京TDC展
- 5月 4回 リック・バリセンティ展
- 6月 5回 シーモア・クワスト展 メタル彫刻
- 7月 6回 デザイン・プリント・ペーパー展
- 8月 7回 ヴァン・オリバー展
- 10月 8回 中村誠 個展
- 10月 9回 マイケル・メイヴリー展
- 11月 10回 灘本唯人、宇野亜喜良、和田誠、山口はるみ展

### 1993

- 1月 11回 フロシキ展
- 2月 12回 ホワイ・ノット・アソシエイツ展
- 3月 13回 アレン・ホリ+ロバート・ナカタ展
- 4月 14回 '92 Tokyo ADC展
- 5月 15回 ラッセル・ウォーレン・フィッシャー展
- 6月 16回 第5回東京TDC展
- 7月 17回 文字からのイマジネーション展
- 8月 18回 デザイン・プリント・ペーパー展 PartⅡ
- 9月 19回 ビル・ソーバーン展
- 10月 20回 U.G.サトウのポスター展 "Treedom"
- 11月 21回 勝井三雄展 光の国
- 12月 22回 現代香港のデザイン8人展

### 1994

- 1月 23回 ソール・パス展
- 2月 24回 グリーティング・ポップアップ13人展
- 3月 25回 リュディ・パウア／インテグラルコンセプト展
- 4月 26回 河村要助、矢吹申彦、湯村輝彦、安西水丸展
- 5月 27回 ジェニファ・モウラ展
- 6月 28回 永井一正展
- 7月 29回 ウーヴェ・レシュ展
- 8月 30回 '94 Tokyo ADC展
- 9月 31回 デザイン・プリント・ペーパー展 PartⅢ
- 10月 32回 デビッド・カーソン&ゲーリー・ケブキ展
- 12月 33回 亀倉雄策ポスター新作展

### 1995

- 1月 34回 ヘルマン・モンタルボ展
- 2月 35回 ブルーン・ムナリー展
- 3月 36回 グラッパ・デザイン展
- 4月 37回 第7回東京TDC展
- 5月 38回 ミシェル・ブーヴェ展
- 6月 39回 田中一光展 人間と文字
- 7月 40回 テレロング展
- 8月 41回 '95 Tokyo ADC展
- 9月 42回 デザイン・プリント・ペーパー展 Ⅳ
- 10月 43回 ベレ・トレント展
- 11月 44回 アジアのデザイナー 6人展

### 1996

- 1月 45回 日本のイラストレーション50年展
- 2月 46回 マーゴ・チェイス展
- 3月 47回 ヴェルネル・イエカー展
- 4月 48回 グンター・ランボー展
- 5月 49回 第8回東京TDC展
- 6月 50回 カリ・ビッポ展
- 7月 51回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
- 8月 52回 '96 Tokyo ADC展
- 9月 53回 前田ジョン「かみとコンピュータ」展
- 10月 54回 アラン・ル・ケルネ展

- 11月 55回 ウッディ・バートル展

### 1997

- 1月 56回 ジョアン・マシャド展
- 2月 57回 K2オオサカ展 黒田征太郎+長友啓典
- 3月 58回 グラフィックデザイン・イン・チャイナ展
- 4月 59回 東京TDC展
- 5月 60回 メキシコ10人展
- 6月 61回 カトー・デザイン展 思考するデザイン
- 7月 62回 '97 Tokyo ADC展
- 8月 63回 ラルフ・シュライフォーゲル展
- 10月 64回 ジェームズ・ピクトル展
- 11月 65回 GLOBAL展 世界33人のデザイナーによるデュオポスター

### 1998

- 1月 66回 ファイトヘルベント・ヴリンゲル展
- 2月 67回 ジャン・ペノア・レヴィ展
- 3月 68回 〈トロイカ〉ロシア3人展
- 4月 69回 フィリップ・アペロウ展
- 6月 70回 東京TDC展'98
- 7月 71回 スタジオ・ドゥンバー展
- 8月 72回 '98 Tokyo ADC展
- 9月 73回 ザフリキ展
- 10月 74回 デビッド・タルタコーバ展
- 11月 75回 台湾四人展

### 1999

- 1月 76回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
- 2月 77回 ビエール・ニューマン展
- 3月 78回 ボーラ・シェアのグラフィックデザイン展
- 5月 79回 ハンブルクのグラフィックデザイン展
- 6月 80回 '99 TDC展
- 7月 81回 ヤン・ライリッヒJr.展
- 8月 82回 '99 ADC展
- 9月 83回 スコット・マケラ[WIDE OPEN]展
- 10月 84回 チャズ・マヴィヤネー・デイヴィースの世界展
- 11月 85回 マカオ2人展

### 2000

- 1月 86回 Graphic Message for Ecology展
- 2月 87回 松井桂三展
- 3月 88回 ボール・デイヴィス展
- 4月 89回 なにわの、こてこてグラフィック展
- 5月 90回 '00 TDC展
- 6月 91回 アントン・ベイク展
- 7月 92回 ビエール・ベルナル展
- 9月 93回 2000 ADC展
- 10月 94回 イタロ・ルビ展
- 11月 95回 デザイン教育の現場から：ベルリン芸術大学オルガー・マチス教室によるアプローチ

### 2001

- 1月 96回 二〇〇一年木田安彦展
- 2月 97回 コントラプンクト展
- 3月 98回 ギルツブルク音楽祭ポスター展
- 5月 99回 01 TDC展
- 6月 100回 チップ・キッド展
- 7月 101回 ハングルポスター展
- 8月 102回 2001 ADC展
- 9月 103回 ウォルフガング・ワインガルト展
- 10月 104回 "Spring has come" 松永真、ディエールの競演。
- 11月 105回 デザイン教育の現場からⅡ：セント・ジュースト大学院の新手法

### 2002

- 1月 106回 灘本唯人展 にんげんもよう
- 2月 107回 サイトウマコト展
- 3月 108回 オット+シュタイン展
- 4月 109回 タビロ展
- 5月 110回 02 TDC展
- 7月 111回 ウィーンのパスター展：ウィーン市立図書館アーカイブ1883-2002
- 7月 112回 三木健展
- 9月 113回 2002 ADC展
- 10月 114回 サディク・カラムスターファ展
- 11月 115回 中国グラフィックデザイン展

### 2003

- 1月 116回 SUN-AD人展
- 2月 117回 田中一光 ポスターとグラフィックアート展
- 3月 118回 ファブリカ展 1994-03 混沌から秩序へ
- 4月 119回 カン・タイキユン+フリーマン・ラウ展
- 6月 120回 03 TDC展
- 7月 121回 ルーバ・ルコーバ展
- 8月 122回 2003 ADC展
- 9月 123回 ステファン・サグマイスター展
- 10月 124回 ヨーロッパの文化ポスター展：ノイエ・ザムルング・ミュンヘンの収蔵作品より
- 11月 125回 空山基展

### 2004

- 1月 126回 副田高行「広告の告白」展
- 2月 127回 永井一正ポスター展
- 3月 128回 現代デンマークポスターの10年
- 4月 129回 雑誌をデザインする集団キャップ展
- 5月 130回 04 TDC展
- 6月 131回 ビエール・メンデル展
- 8月 132回 2004 ADC展
- 9月 133回 パーンプルック・デザイン展 Friendly Fire
- 10月 134回 チェコのポスター展：プラハ美術工芸博物館コレクション1960-2003
- 11月 135回 バラリンジ・デザイン展

### 2005

- 1月 136回 杉浦康平の雑誌デザイン半世紀展
- 2月 137回 シアン展 ベルリンでの13年
- 3月 138回 佐藤可士和展 BEYOND
- 4月 139回 メーフィス&ファン・デュールセン展
- 5月 140回 05 TDC展
- 7月 141回 CCCP研究所展
- 8月 142回 2005 ADC展
- 9月 143回 青木克憲XX展
- 10月 144回 ドイツAGIグラフィックデザイン展
- 11月 145回 和田誠のグラフィックデザイン

### 2006

- 1月 146回 スイスポスター 100年展
- 2月 147回 グラフィック・ソート・ファシリティ展
- 3月 148回 野田皿展
- 4月 149回 ブルーン・オルダー二展
- 5月 150回 06 TDC展
- 6月 151回 ブラック&ホワイトポスター展
- 8月 152回 2006 ADC展

### 2007

- 5月 153回 EXHIBITIONS
- 7月 154回 07 TDC展
- 8月 155回 ヘルムート・シュミット：デザイン イズ アディテュード

- 10月 156回 2007 ADC展
- 11月 157回 キムラカツ展：問いボックス店

### 2008

- 1月 158回 Welcome to Magazine Pool：雑誌デザイン10人の越境者たち
- 2月 159回 佐野研二郎：ギンザ・サローネ・オーサカ
- 4月 160回 中島信也CM展：中島信也と29人のアートディレクター
- 6月 161回 08 TDC展
- 8月 162回 Now Updating... THA／中村勇吾のインタラクティブデザイン
- 9月 163回 2008 ADC展
- 10月 164回 Aoba Show：青葉益輝ワン・マン・ショー
- 11月 165回 真 and / or 善 杉崎真之助と高橋善丸のグラフィックデザイン

### 2009

- 1月 166回 Helvetica forever: Story of a Typeface ヘルベチカ展
- 3月 167回 きらめくデザイナーたちの競演—DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
- 4月 168回 DRAFT: Branding & Art Director
- 6月 169回 09 TDC展
- 8月 170回 2009 ADC展
- 10月 171回 矢萩喜徳朗展 [Magnetic Vision 新作60/100点]

### 2010

- 1月 172回 感じる箱展 grafの考えるグラフィックデザインの実験と検証
- 3月 173回 北川一成
- 5月 174回 TDC展 2010
- 7月 175回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ 福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング
- 9月 176回 2010 ADC展
- 11月 177回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ 田中一光ポスター 1953-1979

### 2011

- 1月 178回 GRAPHIC WEST 3 phono/graph—音・文字・グラフィック
- 3月 179回 秀英体100
- 5月 180回 TDC展 2011
- 7月 181回 服部一成二十一年夏大阪
- 9月 182回 2011 ADC展
- 11月 183回 100 ggg Books 100 Graphic Designers

### 2012

- 1月 184回 GRAPHIC WEST 4「奥村昭夫と仕事」展

## 1995-2011

### 1995

- 4-7月 グラフィック・ビジョン：  
ケネス・タイラーとアメリカ現代版画の30年
- 8-10月 ロイ・リキテンスタイン：  
エンタブラチュア→ヌード
- 11-1月 一瞬の刻印：ロバート・マザウェル展

### 1996

- 3-4月 アメリカ版画の現在地点：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.1
- 4-7月 デヴィッド・ホックニー展
- 7-10月 ジョセフ・アルバース展
- 10-1月 スタイルを越えて：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.2

### 1997

- 3-6月 ジェームズ・ローゼンクイスト展
- 6-9月 版画における抽象：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.3
- 10-11月 大竹伸朗：Printing / Painting
- 12-1月 線／色彩／イメージ：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.4

### 1998

- 3-5月 フランク・ステラ／ケネス・タイラー  
構築する版画：  
アーティストとプリンター、30年の軌跡
- 5-9月 主張する黒：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.5
- 9-12月 形象としての紙：アラン・シールズ

### 1999

- 3-5月 福田美蘭展
- 6-9月 かたる かたち：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.6
- 9-12月 版画の話展

### 2000

- 3-6月 New Works 1998-1999：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.7
- 6-9月 太田三郎：存在と日常
- 9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ設立展：  
ポスターグラフィックス 1950-2000

### 2001

- 3-5月 版画集への招待：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.8
- 5-7月 折元立身：1972-2000
- 8-10月 藤本由紀夫：四次元の読書
- 10-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.2：  
グラフィックデザインの時代

### 2002

- 3-6月 空間に躍りてた版画たち：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.9
- 6-9月 矢萩喜從郎：視触、視弾、そして眼差しの記憶
- 9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.3：  
個性の時代

### 2003

- 3-4月 絵画ー永遠の現在を求めて：  
リチャード・ゴーマン展
- 4-6月 色彩としての紙：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.10
- 6-9月 ヘレン・フランケンサラー木版画展
- 9-12月 タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション 新収蔵作品展

### 2004

- 3-6月 イラストレーションの黄金時代
- 6-9月 パスワード：日本とデンマークの  
アーティストによる対話
- 9-10月 版で発信する作家たち2004

### 2005

- 3-6月 アメリカ現代木版画の世界：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.12
- 6-9月 Breathing Light：吉田重信
- 10-12月 decadeーCCGAと6人の作家たち

### 2006

- 3-6月 版に描く：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.13
- 6-9月 藤幡正樹：不完全さの克服  
イメージとメディアによって創り出される、  
新たな現実感。
- 9-12月 野田哲也：日記

### 2007

- 3-6月 凹版表現の魅力：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.14
- 6-9月 再生する版画：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.15
- 9-12月 ユニーク・インプレッション：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.16

### 2008

- 3-6月 厚い色：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.17
- 6-9月 大きな版画、小さな版画：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.18
- 9-11月 黒のモノローグ：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.19

### 2009

- 2-6月 作品と題名：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.20
- 6-9月 きらめくデザイナーたちの競演ー  
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
- 9-12月 赤のちから：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.21

### 2010

- 3-6月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ  
田中一光ポスター 1953ー1979

- 6-9月 ロイ・リキテンスタイン展：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.22
- 9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ  
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング

### 2011

- 6-9月 秀英体100
- 9-12月 幾何学的抽象の世界：  
タイラーグラフィックス・  
アーカイブコレクション展 Vol.23

**1986**

Mar.	1	Tadashi Ohashi Exhibition
Apr.	2	Shigeo Fukuda Exhibition
May	3	Yukimasa Okumura Exhibition
Jun.	4	Iku Akiyama Exhibition
Jul.	5	'86 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	6	Art Works Exhibition I
Sep.	7	Koichi Sato Exhibition
Oct.	8	Kiyoshi Awazu Exhibition
Nov.	9	Herbert Bayer Exhibition
Dec.	10	K2 Live! Exhibition

**1987**

Jan.	11	Shuhei Tsuji Iroha Exhibition
Feb.	12	Flower Expo + Expo Logo Exhibition
Mar.	13	Masaki Fujihata Exhibition
Apr.	14	Shin Matsunaga Exhibition
May	15	Mizumaru Anzai Exhibition
Jun.	16	Lou Dorfsman and CBS's Creative Works Exhibition
Jul.	17	'87 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	18	Art Works Exhibition II
Sep.	19	Takenobu Igarashi Exhibition
Oct.	20	Masuteru Aoba Exhibition
Nov.	21	Holger Matthies Exhibition
Dec.	22	Milton Glaser Exhibition

**1988**

Jan.	23	Katsu Kimura Exhibition
Feb.	24	Hiroki Taniguchi Exhibition
Mar.	25	Ginza Hyakuten Original Pictures for Cover Exhibition
Apr.	26	Katsu Yoshida Exhibition
May	27	AGI '88 Tokyo Exhibition
Jun.	28	Issey Miyake Poster Exhibition
Jul.	29	'88 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	30	Art Works Exhibition III
Sep.	31	Information Posters Recruit Exhibition
Oct.	32	Yoshio Hayakawa Exhibition
Nov.	33	Masayoshi Nakajo Exhibition
Dec.	34	Stasys Eidrigėvičius Exhibition

**1989**

Jan.	35	Shopping Bag Design Exhibition
Feb.	36	Kijuro Yahagi Exhibition
Mar.	37	Texture Exhibition
Apr.	38	Noriyuki Tanaka Exhibition
May	39	Otl Aicher Exhibition
Jun.	40	Kazumi Kurigami Exhibition
Jul.	41	Shinichi Wakao Exhibition
Aug.	42	Art Works Exhibition IV
Sep.	43	Kazumasa Nagai Exhibition
Oct.	44	Europalia '89 Japan 12 Artists' Original Poster Exhibition
Nov.	45	Charles Anderson Exhibition
Dec.	46	Etsushi Kiyohara Exhibition

**1990**

Jan.	47	Shigeru Akizuki Exhibition
Feb.	48	Nobuyoshi Kikuchi Exhibition
Mar.	49	Tsunao Harada Exhibition
Apr.	50	Ikko Tanaka Exhibition
May	51	Ryuichi Yamashiro Exhibition
Jun.	52	Keizo Matsui Exhibition
Jul.	53	Takayuki Terakado Exhibition
Aug.	54	Art Works Exhibition V
Sep.	55	Keiichi Tahara Exhibition
Oct.	56	Katsumi Asaba Exhibition
Nov.	57	Katsuya Ise Exhibition

Dec.	58	Yasuhiro Yomogida Exhibition
------	----	------------------------------

**1991**

Jan.	59	Zenji Funabashi Exhibition
Feb.	60	Tetsuya Ohta Exhibition
Mar.	61	Per Arn oldi Exhibition
Apr.	62	Yasuhiro Sawada Exhibition
May	63	Sonoko Arai Exhibition
Jun.	64	Communication & Print Exhibition
Jul.	65	Nobuo Nakagaki Design Office Exhibition
Aug.	66	Art Works Exhibition
Oct.	67	Trans-Art '91 Exhibition
Dec.	68	'91 Tokyo ADC Exhibition

**1992**

Jan.	69	Ivan Chermayeff Exhibition
Feb.	70	Hajime Tachibana Exhibition
Mar.	71	The 4th Tokyo TDC Exhibition
Apr.	72	Henryk Tomaszewski Exhibition
May	73	Seymour Chwast Exhibition
Jun.	74	Takashi Kanome Exhibition
Jul.	75	Makoto Nakamura Exhibition
Aug.	76	Rick Valicenti Exhibition
Sep.	77	Kaoru Kasai Exhibition
Oct.	78	Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Harumi Yamaguchi Exhibition
Nov.	79	Paul Rand Exhibition
Dec.	80	Furoshiki Exhibition

**1993**

Jan.	81	Ryohei Kojima Exhibition
Feb.	82	Koichi Inakoshi Exhibition
Mar.	83	'92 Tokyo ADC Exhibition
Apr.	84	The 5th Tokyo TDC Exhibition
May	85	U.G. Sato Exhibition
Jun.	86	Hideo Mukai Exhibition
Jul.	87	Imagination of Letters Exhibition
Aug.	88	8 Designers in Today's Hong Kong
Sep.	89	Mitsuo Katsui Exhibition
Oct.	90	Yosuke Kawamura, Nobuhiko Yabuki, Teruhiko Yumura, Mizumaru Anzai Exhibition
Nov.	91	Saul Bass Exhibition
Dec.	92	Pop-up Greetings Exhibition

**1994**

Jan.	93	Kiyoshi Awazu Exhibition
Feb.	94	The 6th Tokyo TDC Exhibition
Mar.	95	Takahisa Kamiyo Exhibition
Apr.	96	Toshihiro Katayama Exhibition
May	97	Kazumasa Nagai Exhibition
Jun.	98	Dutch Graphic Design A Century Exhibition
Jul.	99	'94 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	100	Graphic Goods Exhibition
Oct.	101	Koga Hirano Exhibition
Oct.		Kyushu 9 Designers Exhibition
Nov.	102	Yusaku Kamekura Exhibition
Dec.	103	Kenya Hara Exhibition
Dec.		Toshiko Tsuchihashi, Sachiko Nakamura, Meg Hosoki Exhibition

**1995**

Jan.	104	Bruno Munari Exhibition
Feb.	105	Book Design in Japan 1946-95 Exhibition

Mar.	106	The 7th Tokyo TDC Exhibition
Apr.	107	Pieter Brattinga Exhibition
May	108	Ikko Tanaka Exhibition
Jun.	109	Niklaus Troxler Exhibition
Jul.	110	'95 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	111	Rhythm & Hues Computer Graphics
Sep.	112	Tamotsu Yagi Exhibition
Sep.		Special: 20 Graphic Designers of the World, 10th Anniversary of ggg
Oct.	113	Transition of Modern Typography-1 Exhibition
Nov.	114	Masatoshi Toda Exhibition
Dec.	115	50 Years in Japanese Illustrations Exhibition

**1996**

Jan.	116	Yasuhiro Yomogida Exhibition
Feb.	117	Transition of Modern Typography-2 Exhibition
Mar.	118	Mar. 118 Posters by 23 Artists in São Paulo Exhibition
Apr.	119	The 8th Tokyo TDC Exhibition
May	120	Contemporary Graphics in Hungary Exhibition
Jun.	121	Shigeo Katsuoka Exhibition
Jul.	122	'96 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	123	John Maeda Paper and Computers Exhibition
Sep.	124	K2-Seitaro Kuroda / Keisuke Nagatomo Exhibition
Oct.	125	Czech Avant-Garde Book Design 1920s-'30s Exhibition
Nov.	126	Graphic Wave 1996: Katsunori Aoki / Taku Satoh / Toshio Yamagata
Dec.	127	Alain Le Querrec Exhibition

**1997**

Jan.	128	Nisuke Shimotani Exhibition
Jan.		Special: CCGA—The Prints of Josef Albers
Feb.	129	Tadashi Ohashi Exhibition
Mar.	130	The 10th of Tokyo TDC Exhibition
Apr.	131	Masayoshi Nakajo Exhibition
May	132	Magazines Today Exhibition
Jun.	133	Tadanori Yokoo's Poster Exhibition
Jul.	134	'97 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	135	Toshifumi Kawahara and Polygon Pictures Exhibition
Sep.	136	Mexican 10 Graphic Designers Exhibition
Oct.	137	Graphic Wave 1997: Kan Akita / Satoe Inoue / Osamu Fukushima
Oct.		Special: The 10th Anniversary of Masaru Katsumi Award Exhibition
Nov.	138	Shigeo Fukuda Exhibition
Dec.	139	Global Exhibition

**1998**

Jan.	140	8ro Art & AD Exhibition
Feb.	141	Odermatt + Tissì Exhibition
Mar.	142	Stasys Eidrigėvičius Exhibition
Apr.	143	Tokyo TDC '98 Exhibition
May	144	Studio Dumbar Exhibition
Jun.	145	Yoko Yamamoto Exhibition
Jul.	146	'98 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	147	Yoichiro Kawaguchi Exhibition
Sep.	148	Graphic Wave 1998: Tatsuo Ebina / Keiko Hirano / Ken Miki
Oct.	149	Gunter Rambow Exhibition

Nov.	150	Philippe Apeloig Exhibition
Dec.	151	Herbert Leupin Exhibition

**1999**

Jan.	152	Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World exhibition
Feb.	153	Transition of Modern Typography in Japan 1946-95 Exhibition
Mar.	154	Tsunehisa Kimura Exhibition
Mar.		Special: The Works of Seichi Horiuchi
Apr.	155	Tokyo TDC '99 Exhibition
May	156	Contemporary Bulgarian Graphic Design Exhibition
Jun.	157	Katsuhiko Hibino Exhibition
Jul.	158	'99 Tokyo ADC Exhibition
Jul.		Special: John Maeda One-line.com
Aug.	159	Kijuro Yahagi Exhibition
Sep.	160	Graphic Wave 1999: Mamoru Suzuki / Kei Matsushita / Hiroshi Yonemura
Oct.	161	Fuse Posters and Fonts Exhibition
Nov.	162	Keizo Matsui Exhibition
Dec.	163	Paul Davis Posters Exhibition
Dec.		Special: Irving Penn regards the works of Issey Miyake

**2000**

Jan.	164	Graphic Message for Ecology Exhibition
Jan.		Special: Kishin Shinoyama & Manuel Legris
Feb.	165	Bruno Monguzzi Exhibition
Mar.	166	Kenji Itoh Exhibition
Apr.	167	Tokyo Type Directors Club 2000
May	168	Poster Works Nagoya 12 Exhibition
Jun.	169	Osaka Pop Exhibition
Jul.	170	2000 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	171	The Epoch of the JAAC Exhibition
Sep.	172	Graphic Wave 2000: Gugi Akiyama / Tycoon Graphics / Hideki Nakajima
Oct.	173	Tzotm Toda Exhibition
Nov.	174	Pierre Bernard Exhibition
Dec.	175	The Book & The Computer Exhibition

**2001**

Jan.	176	2001 Yasuhiko Kida Exhibition
Feb.	177	Italo Lupi Exhibition
Mar.	178	Shin Matsunaga Exhibition
Apr.	179	Tokyo Type Directors Club 2001
May	180	Kontrapunkt Exhibition
Jun.	181	Typography of Hiromu Hara Exhibition
Jul.	182	2001 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	183	Tadahito Nadamoto Exhibition
Sep.	184	Graphic Wave 2001: Katsuhiko Shibuya / Kazufumi Nagai / Kozue Hibino
Oct.	185	Hangul Poster Exhibition
Nov.	186	Makoto Saito Exhibition
Dec.	187	Chip Kidd Exhibition

**2002**

Jan.	188	Uwe Loesch Exhibition
Feb.	189	Akira Uno Exhibition
Mar.	190	Design Education: Post-St.Joost's New Method
Apr.	191	Tokyo Type Directors Club 2002
May	192	Draft Exhibition
Jun.	193	Alan Chan Exhibition
Jun.		Special: Yasuji Hanamori and Kurashi-no-Techo Exhibition
Jul.	194	2002 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	195	Noriyuki Tanaka Exhibition



Sep. 196 Graphic Wave 2002: Hitomi Sago /  
Yasuhiro Sawada / Norito Shinmura  
Oct. 197 Sun-ad: The People Exhibition  
Nov. 198 Graphic Shows Brazil Exhibition  
Dec. 199 Herb Lubalin Exhibition

## 2003

Jan. 200 Ikko Tanaka Exhibition  
Feb. 201 Sadik Karamustafa Exhibition  
Mar. 202 Contemporary Chinese Graphic  
Design Exhibition  
Apr. 203 Tokyo Type Directors Club 2003  
May 204 Fabrica 1994-03 Exhibition  
Jun. 205 Hajime Sorayama Exhibition  
Jul. 206 2003 Tokyo ADC Exhibition  
Aug. 207 Minoru Niijima Exhibition  
Sep. 208 Graphic Wave 2003: Kenjiro Sano /  
Nagi Noda / Kazunari Hattori  
Oct. 209 Takayuki Soeda Exhibition  
Nov. 210 Stefan Sagmeister Exhibition  
Dec. 211 Takashi Kono Exhibition

## 2004

Jan. 212 Kazumasa Nagai Poster Exhibition  
Feb. 213 Keiji Ito / Hiroki Taniguchi /  
Hiro Sugiyama Exhibition  
Mar. 214 The Magazine Design Studio Cap  
Exhibition  
Apr. 215 Tokyo Type Directors Club 2004  
May 216 Taku Satoh Exhibition  
Jun. 217 Danish Posters Over  
the Past 10 Years Exhibition  
Jul. 218 2004 Tokyo ADC Exhibition  
Aug. 219 The Work of Barnbrook Design  
Exhibition  
Sep. 220 Graphic Wave 2004:  
Aoshi Kudo / Graph / Namaiki  
Oct. 221 A Half-Century of Magazine Design  
by Kohei Sugiura Exhibition  
Nov. 222 Kashiwa Sato Exhibition: Beyond  
Dec. 223 Another Side of Ayao Yamana Exhibition

## 2005

Jan. 224 The Seven Faces of Asaba Exhibition  
Feb. 225 Balarinji Design Exhibition  
Mar. 226 Katsunori Aoki XX Exhibition  
Apr. 227 Tokyo Type Directors Club 2005  
May 228 The Graphic Design of Makoto Wada  
Jun. 229 Chermayeff & Geismar Inc. Exhibition  
Jul. 230 2005 Tokyo ADC Exhibition  
Aug. 231 Masahiko Sato Laboratory Exhibition  
Sep. 232 Graphic Wave 2005: Ichiro Tanida /  
Ichiro Higashiizumi / Chie Morimoto  
Oct. 233 Laboratoires CCCP Exhibition  
Nov. 234 Shin Sobue + Cozfish Exhibition  
Dec. 235 Swiss Poster Art Exhibition

## 2006

Jan. 236 Yusaku Kamekura 1915-1997 Exhibition  
Feb. 237 Nagi Noda Exhibition  
Mar. 238 Cyan Exhibition  
Apr. 239 Tokyo Type Directors Club 2006  
May 240 Kazufumi Nagai Exhibition  
Jun. 241 Keiichi Tanaami-ism Exhibition  
Jul. 242 2006 Tokyo ADC Exhibition  
Aug. 243 Alexander Gelman Exhibition  
Sep. 244 Graphic Wave 2006:  
Masayoshi Kodaira / Naomi Hirabayashi /  
Manabu Mizuno / Eiji Yamada

Sep. Special: AGI Congress 2006 in Japan,  
Kakejiku Exhibition  
Oct. 245 Radical Advertisement Exhibition  
Nov. 246 Hideki Nakajima Exhibition  
Dec. 247 Yoshio Hayakawa Exhibition

## 2007

Jan. 248 Exhibitions (Part I)  
Feb. Exhibitions (Part II)  
Mar. 249 Katsu Kimura: Toi Boxes  
Apr. 250 Tokyo Type Directors Club 2007  
May 251 Helmut Schmid: Design is Attitude  
Jun. 252 Masaaki Hiromura: 2D 3D  
Jul. 253 2007 Tokyo Art Directors Club  
Aug. 254 The Warsaw Wind 1966-2006  
Sep. 255 Ginza Salone: Kenjiro Sano  
Oct. 256 Shinya Nakajima TV Commercial  
Exhibition  
Nov. 257 Welcome to Magazine Pool  
Dec. 258 Aoba Show:  
Masuteru Aoba One-Man Show

## 2008

Jan. 259 Toda Today: Poster Art by Seiju Toda  
Feb. 260 Testimonies from Twenty Pioneers  
of the Graphic Design Era:  
Interviews by Hiroshi Kashiwagi  
Mar. 261 Textasy: Brody Neuenschwander  
Apr. 262 Tokyo Type Directors Club 2008  
May 263 Alan Fletcher: The Father of  
British Graphic Design  
Jun. 264 Hiroshi Sasaki,  
Leader of a Cheering Squad  
for the Japanese Advertising World  
Jul. 265 2008 Tokyo Art Directors Club  
Aug. 266 Now Updating... The Interactive  
Design of THA/Yugo Nakamura  
Sep. 267 The Design Cycle of Keiko Hirano:  
Origin, Terminus, Origin  
Oct. 268 White: Kenya Hara Exhibition  
Nov. 269 M/M(Paris) The Theatre Posters  
Dec. 270 OYKOT Wieden + Kennedy Tokyo:  
10 Years of Fusion

## 2009

Jan. 271 Brilliant Rivalry:  
Works by Outstanding Designers in  
the DNP Archives of Graphic Design  
Feb. 272 Helvetica forever: Story of a typeface  
Mar. 273 Draft: Branding and Art Directors  
Apr. 274 Tokyo Type Directors Club 2009  
May 275 Kijuro Yahagi:  
Magnetic Vision / 100 New Works  
Jun. 276 Max Huber - a Graphic Designer  
Jul. 277 2009 Tokyo Art Directors Club  
Aug. 278 Hosoya Gan Last Show: Exhibition of  
an Art Director & Graphic Designer  
Sep. 279 Tadahito Nadamoto, Akira Uno,  
Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show  
Oct. 280 Toshio Yamagata Exhibition  
Nov. 281 Issay Kitagawa  
Dec. 282 Kokoku Hihyo:  
End of One Era, Start of Another

## 2010

Jan.-Feb. 283 DNP Graphic Design Archives Collection II  
Ikko Tanaka Posters 1953-1979  
Mar. 284 DNP Graphic Design Archives Collection III  
Shigeo Fukuda's Visual Jumping

Apr. 285 Tokyo Type Directors Club 2010  
May 286 Talking the Dragon:  
Tsuguya Inoue Exhibition  
Jun. 287 NB@ggg: Neville Brody 2010  
Jul. 288 2010 Tokyo Art Directors Club  
Aug. 289 Ralph Schraivogel  
Sep. 290 Push Pin Paradigm:  
Seymour Chwast | Paul Davis |  
Milton Glaser | James McMullan  
Oct. 291 Seas and Mountains and  
Norito Shinmura  
Nov. 292 Kazunari Hattori: November 2010  
Dec. 293 The Euphrates Exhibition:  
From Research to Expression

## 2011

Jan. 294 Shueitai 100  
Feb. 295 Ian Anderson / The Designers Republic  
C(H)-ōme (+81/3)  
Mar. 296 Design | Fumio Tachibana  
Apr. 297 Tokyo Type Directors Club 2011  
May 298 Sato Koichi Poster Exhibition  
Jun. 299 Raymond Savignac; at the age of 41,  
maestro born from poster  
[Monsavon au lait]  
Jul. 300 2011 Tokyo Art Directors Club  
Aug. 301 [gggg] Groovisions Exhibition  
Sep. 302 Form, Color and Structure:  
The Sensual World of Aoshi Kudo  
Oct. 303 100 ggg Books 100 Graphic Designers  
Nov. 304 SVA MFA Design  
Ideopolis-Tokyo Exhibition  
Dec. 305 Luminous Mandala:  
Book Designs of Kohei Sugiura

## 2012

Jan.-Feb. 306 DNP Graphic Design Archives Collection IV  
Ikko Tanaka Posters 1980-2002  
Mar. 307 Rodchenko  
- Innovator of Russian Avant-Garde -



## 1992-2012

### 1992

Jan.	1	Trans-Art '91 Exhibition
Mar.	2	Ivan Chermayeff Exhibition
Apr.	3	The 4th Tokyo TDC Exhibition
May	4	Rick Valicenti Exhibition
Jun.	5	Seymour Chwast Exhibition
Jul.	6	Design Print & Paper Exhibition
Aug.	7	Vaughan Oliver Exhibition
Oct.	8	Makoto Nakamura Exhibition
Oct.	9	Michael Mabry Exhibition
Nov.	10	Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Harumi Yamaguchi Exhibition

### 1993

Jan.	11	Furoshiki Exhibition
Feb.	12	Why Not Associates Exhibition
Mar.	13	Allen Hori + Robert Nakata Exhibition
Apr.	14	'92 Tokyo ADC Exhibition
May	15	Russell Warren-Fisher Exhibition
Jun.	16	The 5th Tokyo TDC Exhibition
Jul.	17	Imagination of Letters Exhibition
Aug.	18	Design, Prints, Paper Exhibition Part II
Sep.	19	Bill Thorburn Exhibition
Oct.	20	U.G. Sato Exhibition
Nov.	21	Mitsuo Katsui Exhibition
Dec.	22	8 Designers in Today's Hong Kong

### 1994

Jan.	23	Saul Bass Exhibition
Feb.	24	Pop-up Greetings Exhibition
Mar.	25	Ruedi Baur/Integral Concept Exhibition
Apr.	26	Yosuke Kawamura, Nobuhiko Yabuki, Teruhiko Yumura, Mizumaru Anzai Exhibition
May	27	Jennifer Morla Exhibition
Jun.	28	Kazumasa Nagai Exhibition
Jul.	29	Uwe Loesch Exhibition
Aug.	30	'94 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	31	Design, Print, Paper Exhibition Part III
Oct.	32	David Carson + Gary Koepke Exhibition
Dec.	33	Yusaku Kamekura Exhibition

### 1995

Jan.	34	German Montalvo Exhibition
Feb.	35	Bruno Munari Exhibition
Mar.	36	Grappa Design Exhibition
Apr.	37	The 7th Tokyo TDC Exhibition
May	38	Michel Bouvet Exhibition
Jun.	39	Ikko Tanaka Exhibition
Jul.	40	Terrelonge Exhibition
Aug.	41	'95 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	42	Design, Print, Paper Exhibition IV
Oct.	43	Peret Torrent Exhibition
Nov.	44	6 Designers in Asia Exhibition

### 1996

Jan.	45	Illustration in Japan 1946-1995 Exhibition
Feb.	46	Margo Chase Exhibition
Mar.	47	Werner Jeker Exhibition
Apr.	48	Gunter Rambow Exhibition
May	49	The 8th Tokyo TDC Exhibition
Jun.	50	Kari Plippo Exhibition
Jul.	51	Contemporary Graphics in Hungary Exhibition
Aug.	52	'96 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	53	John Maeda Paper and Computers Exhibition

Oct.	54	Alain Le Quernec Exhibition
Nov.	55	Woody Pirtle Exhibition

### 1997

Jan.	56	João Machado Exhibition
Feb.	57	K2 Osaka Exhibition
Mar.	58	Graphic Design in China Exhibition
Apr.	59	'97 Tokyo TDC Exhibition
May	60	Mexican 10 Graphic Designers
Jun.	61	Cato Design Inc. Exhibition
Jul.	62	'97 Tokyo ADC Exhibition
Aug.	63	Ralph Schraivogel Exhibition
Oct.	64	James Victore Exhibition
Nov.	65	Global Exhibition

### 1998

Jan.	66	Faydherbe/De Vringer Exhibition
Feb.	67	Jean-Benoît Lévy Exhibition
Mar.	68	3 Dimensions of Russian Graphic Design Exhibition
Apr.	69	Philippe Apeloig Exhibition
Jun.	70	Tokyo TDC '98 Exhibition
Jul.	71	Studio Dumber Exhibition
Aug.	72	'98 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	73	Zafryki Exhibition
Oct.	74	David Tartakover Exhibition
Nov.	75	Taiwan 4 Exhibition

### 1999

Jan.	76	Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World Exhibition
Feb.	77	Pierre Neumann Exhibition
Mar.	78	Paula Scher Exhibition
May	79	Graphic Design from Hamburg Exhibition
Jun.	80	Tokyo TDC '99 Exhibition
Jul.	81	Jan Rajlich Jr. Exhibition
Aug.	82	'99 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	83	Scott Makela Exhibition
Oct.	84	Chaz Maviyane-Davies Exhibition
Nov.	85	2 Men from Macau Exhibition Ung Vai Meng / Victor Hugo Marreiros

### 2000

Jan.	86	Graphic Message for Ecology Exhibition
Feb.	87	Keizo Matsui Exhibition
Mar.	88	Paul Davis Posters Exhibition
Apr.	89	Osaka Pop Exhibition
May	90	Tokyo Type Directors Club 2000
Jun.	91	Anthon Beeke Posters Exhibition
Jul.	92	Pierre Bernard Exhibition
Sep.	93	2000 Tokyo ADC Exhibition
Oct.	94	Italo Lupi Exhibition
Nov.	95	Design Education: The Classroom Approach of Holger Matthies, Berlin University of the Arts

### 2001

Jan.	96	2001 Yasuhiko Kida Exhibition
Feb.	97	Kontrapunkt Exhibition
Mar.	98	Poster of Salzburg Festival Exhibition
May	99	Tokyo Type Directors Club 2001
Jun.	100	Chip Kidd Exhibition
Jul.	101	Hangul Poster Exhibition
Aug.	102	2001 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	103	Wolfgang Weingart Exhibition
Oct.	104	Shin Matsunaga Exhibition
Nov.	105	Design Education II: Post-St. Joost's New Method

### 2002

Jan.	106	Tadahito Nadamoto Exhibition
Feb.	107	Makoto Saito Exhibition
Mar.	108	Ott + Stein Exhibition
Apr.	109	Studio Tapiro Exhibition
May	110	Tokyo Type Directors Club 2002
Jul.	111	Posters from the Vienna Municipal Library Archive Exhibition
Jul.	112	Ken Miki Exhibition
Sep.	113	2002 Tokyo ADC Exhibition
Oct.	114	Sadik Karamustafa Exhibition
Nov.	115	Chinese Graphic Design Exhibition

### 2003

Jan.	116	San-ad: The People Exhibition
Feb.	117	Ikko Tanaka Exhibition
Mar.	118	Fabrica 1994-03 Exhibition
Apr.	119	Kan Tai-Keung and Freeman Lau Exhibition
Jun.	120	Tokyo Type Directors Club 2003
Jul.	121	Luba Lukova Exhibition
Aug.	122	2003 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	123	Stefan Sagmeister Exhibition
Oct.	124	Cultural Posters from the Collection of Die Neue Sammlung München Exhibition
Nov.	125	Hajime Sorayama Exhibition

### 2004

Jan.	126	Takayuki Soeda Exhibition
Feb.	127	Kazumasa Nagai Poster Exhibition
Mar.	128	Danish Posters Over the Past 10 Years Exhibition
Apr.	129	The Magazine Design Studio CAP Exhibition
May	130	Tokyo Type Directors Club 2004
Jun.	131	Pierre Mendell Exhibition
Aug.	132	2004 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	133	The Work of Barnbrook Design Exhibition
Oct.	134	Posters from the Museum of Decorative Arts in Prague Exhibition
Nov.	135	Balarinji Design Exhibition

### 2005

Jun.	136	A Half-Century of Magazine Design by Kohei Sugiura Exhibition
Feb.	137	Cyan Exhibition 13 Years in Berlin
Mar.	138	Kashiwa Sato Exhibition: Beyond
Apr.	139	Mevis + Van Deursen Exhibition
May	140	Tokyo Type Directors Club 2005
Jun.	141	Laboratoires CCCP Exhibition
Aug.	142	2005 Tokyo ADC Exhibition
Sep.	143	Katsunori Aoki XX Exhibition
Oct.	144	German AGI Graphic Design Exhibition
Nov.	145	The Graphic Design of Makoto Wada

### 2006

Jan.	146	Swiss Poster Art Exhibition
Feb.	147	Graphic Thought Facility Exhibition
Mar.	148	Nagi Noda Exhibition
Apr.	149	Bruno Oldani Exhibition
May	150	Tokyo Type Directors Club 2006
Jun.	151	Black and White Posters Exhibition
Aug.	152	2006 Tokyo ADC Exhibition

### 2007

May	153	Exhibitions
-----	-----	-------------

Jun.	154	Tokyo Type Directors Club 2007
Aug.	155	Helmut Schmid: Design is Attitude
Oct.	156	2007 Tokyo Art Directors Club
Nov.	157	Katsu Kimura: Toi Boxes

### 2008

Jan.	158	Welcome to Magazine Pool
Feb.	159	Ginza Salone Osaka: Kenjiro Sano
Apr.	160	Shinya Nakajima TV Commercial Exhibition
Jun.	161	Tokyo Type Directors Club 2008
Aug.	162	Now Updating... The Interactive Design of THA/Yugo Nakamura
Sep.	163	2008 Tokyo Art Directors Club
Oct.	164	Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show
Nov.	165	Truth And / Or Virtue: Graphic Designs by Shinnoske Sugisaki and Yoshimaru Takahashi

### 2009

Jan.	166	Helvetica forever: Story of a Typeface
Mar.	167	Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
Apr.	168	Draft: Branding and Art Directors
Jun.	169	Tokyo Type Directors Club 2009
Aug.	170	2009 Tokyo Art Directors Club
Oct.	171	Kijuro Yahagi: Magnetic Vision 60/100 New Works

### 2010

Jan.	172	Graphic West 2: Sensory Boxes
Mar.	173	Issay Kitagawa
May	174	Tokyo Type Directors Club 2010
Jul.	175	DNP Graphic Design Archives Collection III Shigeo Fukuda's Visual Jumping
Sep.	176	2010 Tokyo Art Directors Club
Nov.	177	DNP Graphic Design Archives Collection II Ikko Tanaka Posters 1953-1979

### 2011

Jan.	178	GRAPHIC WEST 3 phono/graph-sound-letters-graphics-
Mar.	179	Shueitai 100
May	180	Tokyo Type Directors Club 2011
Jul.	181	Kazunari Hattori Summer 2011 in Osaka
Sep.	182	2011 Tokyo Art Directors Club
Nov.	183	100 ggg Books 100 Graphic Designers

### 2012

Jan.	184	GRAPHIC WEST 4 "Okumura Akio and Works" Exhibition
------	-----	---

## 1995

Apr.-Jul. Graphic Vision Kenneth Tyler  
Retrospective Exhibition: Thirty Years  
of Contemporary American Prints  
Aug.-Oct. Lichtenstein: Entablature→Nudes  
Nov.-Jan. The Prints of Robert Motherwell

## 1996

Mar.-Apr. American Prints Today:  
1st Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Apr.-Jul. The Prints of David Hockney  
Jul.-Oct. Autonomous Color: Josef Albers  
Oct.-Jan. Transcending Style:  
2nd Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection

## 1997

Mar.-Apr. The Graphics of James Rosenquist  
Jun.-Sep. Printed Abstraction:  
3rd Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Oct.-Nov. Shinro Ohtake: Printing / Painting  
Dec.-Jan. Line-Color-Image:  
4th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection

## 1998

Mar.-May Frank Stella and Kenneth Tyler:  
A Unique 30-Year Collaboration  
May-Sep. Statements in Black:  
5th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Sep.-Dec. Alan Shields: Images in Paper

## 1999

Mar.-May Miran Fukuda New Works: Prints  
Jun.-Sep. Forms That Speak:  
6th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Sep.-Dec. The Story of Prints

## 2000

Mar.-May New Works 1998-1999:  
7th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
May-Jul. Saburo Ota: Existence and Everyday  
Aug.-Oct. DNP Archives of Graphic Design  
Inaugural Exhibition:  
Poster Graphics 1950-2000

## 2001

Mar.-May Invitation to Print Portfolios:  
8th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
May-Jul. Tatsumi Orimoto: 1972-2000  
Aug.-Oct. Yukio Fujimoto:  
Reading to Another Dimension  
2nd Exhibition of DNP Archives of  
Oct.-Dec. Graphic Design: The Era of Graphic Design

## 2002

Mar.-Jun. Prints Leaping Into Space:  
9th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Jun.-Sep. Kijuro Yahagi: Touching, Piercing, and  
Tracing with Vision  
Sep.-Dec. 3rd Exhibition of DNP Archives of  
Graphic Design: The Age of Individ-uality

## 2003

Mar.-Apr. Richard Gorman:  
Paintings and Paper Works  
Apr.-Jun. Paper as Color:  
10th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Jun.-Sep. Frankenthaler: The Woodcuts  
Sep.-Dec. 11th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection

## 2004

Mar.-Jun. The Golden Age of Illustration  
Jun.-Sep. Password:  
A Danish / Japanese Dialogue  
Sep.-Dec. Print Art of Today in Fukushima

## 2005

Mar.-Jun. The World of Contemporary American  
Woodcuts:  
12th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Jun.-Sep. Breathing Light: Shigenobu Yoshida  
Sep.-Dec. decade – CCGA and Six artists

## 2006

Mar.-Jun. Painting on Stone:  
13th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Jun.-Sep. Masaki Fujihata:  
The Conquest of Imperfection-  
New Realities Created with  
Images and Media  
Sep.-Dec. Tetsuya Noda: Diary

## 2007

Mar.-Jun. The Wonder of Intaglio:  
14th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Jun.-Sep. Prints Given New Life:  
15th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Sep.-Dec. Unique Impressions:  
16th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection

## 2008

Mar.-Jun. Thick with Color:  
17th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Jun.-Sep. Big Prints, Small Prints:  
18th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Sep.-Nov. Monologues in Black:  
19th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection

## 2009

Feb.-Jun. Prints and Titles:  
20th Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Jun.-Sep. Brilliant Rivalry:  
Works by Outstanding Designers in  
the DNP Archives of Graphic Design  
Sep.-Dec. The Power of Red:  
21st Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection

## 2010

Mar.-Jun. DNP Graphic Design Archives Collection II  
Ikko Tanaka Posters 1953-1979  
Jun.-Sep. Roy Lichtenstein:  
22nd Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection  
Sep.-Dec. DNP Graphic Design Archives Collection III  
Shigeo Fukuda's Visual Jumping

## 2011

Jun.-Sep. Shueitai 100  
Sep.-Dec. The World of Geometric Abstraction:  
23rd Exhibition of Prints from  
the Tyler Graphics Archive Collection



## DNP Foundation for Cultural Promotion

### ギンザ・グラフィック・ギャラリー

開設 1986年3月4日  
名称 ギンザ・グラフィック・ギャラリー（略称／ggg）  
所在地 〒104-0061  
東京都中央区銀座7丁目7番2号 DNP銀座ビル  
Phone:03-3571-5206  
Fax:03-3289-1389  
開館時間 午前11時～午後7時（土曜午後6時まで）  
休館 日曜日、祝日  
監修 永井一正

### dddギャラリー

開設 1991年11月5日  
名称 dddギャラリー  
所在地 〒550-8508  
大阪府大阪市西区南堀江1丁目17-28 なんばSSビル  
Phone:06-6110-4635  
Fax:06-6110-4639  
開館時間 午前11時～午後7時（土曜午後6時まで）  
休館 日曜日、月曜日、祝日  
監修 永井一正

### CCGA 現代グラフィックアートセンター

開設 1995年4月20日  
名称 CCGA現代グラフィックアートセンター  
所在地 〒962-0711  
福島県須賀川市塩田宮田1  
Phone:0248-79-4811  
Fax:0248-79-4816  
開館時間 午前10時～午後5時（入館は午後4時45分まで）  
休館 月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）、  
祝日の翌日（土・日にあたる場合は開館）、  
展示替え期間中、冬期（12月下旬～2月末）  
入場料 一般＝300円、学生＝200円、  
小学生以下と65歳以上および障がい者手帳をお持ちの方は無料。  
サロン  
利用料 200円

企画・運営 財団法人DNP文化振興財団  
<http://www.dnp.co.jp/foundation>

### ginza graphic gallery

Establishment: March 4, 1986  
Name: ginza graphic gallery (ggg)  
Location: DNP Ginza Building, 7-2 Ginza 7-chome,  
Chuo-ku, Tokyo 104-0061  
Phone: +81 3 3571 5206  
Fax: +81 3 3289 1389  
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays)  
Closed on Sundays and Holidays  
Adviser: Kazumasa Nagai

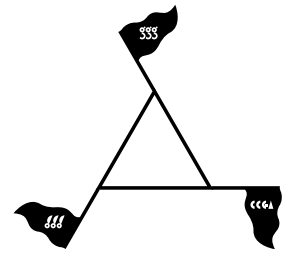
### ddd gallery

Establishment: November 5, 1991  
Name: ddd gallery  
Location: Namba SS Building, 17-28 Minami-horie 1-chome,  
Nishi-ku, Osaka 550-8508  
Phone: +81 6 6110 4635  
Fax: +81 6 6110 4639  
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays)  
Closed on Sundays, Mondays and Holidays  
Adviser: Kazumasa Nagai

### Center for Contemporary Graphic Art

Establishment: April 20, 1995  
Name: Center for Contemporary Graphic Art (CCGA)  
Location: Miyata 1, Shiota, Sukagawa-shi,  
Fukushima 962-0711  
Phone: +81 248 79 4811  
Fax: +81 248 79 4816  
Opening Hours: 10:00am to 5:00pm (Admission until 4:45pm)  
Closed on Mondays (Tuesday if Monday is a public holiday),  
the day immediately after a public holiday (except Saturday and Sunday),  
between exhibitions and during winter (late December through February)  
Admission: Adults=¥300, Students=¥200,  
Free for young children (through elementary school), senior citizens (65 and over) and the disabled.  
Salon Utilization Fee: ¥200

Planning and Operation: DNP Foundation for Cultural Promotion  
<http://www.dnp.co.jp/foundation>



## Graphic Art & Design Annual 11-12 ggg ddd CCGA

発行	財団法人DNP文化振興財団 〒104-0061 東京都中央区銀座7-7-2 DNP銀座ビル Phone: 03-5568-8224
企画・編集	ギンザ・グラフィック・ギャラリー
アートディレクション	松永 真
デザイン	松永 真次郎、清川 萌未
撮影	藤塚 光政 (ggg会場写真) 堺 亮太、阿部 章仁、高梨 光司 (gggギャラリートーク)
翻訳	室生寺 玲、オフィス宮崎
協力	白田 捷治、河尻 亨一
印刷・製本	大日本印刷株式会社



2023  
DNP  
FOUNDATION  
FOR CULTURAL  
PROMOTION

財団法人DNP文化振興財団  
DNP Foundation for Cultural Promotion

